

ドミニカ共和国移住史

68年の時を越えて



編者 青木 美重

ドミニカ共和国移住史

68年の時を越えて

はじめに

「ドミニカ共和国移住史」を制作したいと思っただけは、JICA 日系社会青年海外協力隊としてドミニカ共和国でボランティア活動をさせていただく中で、ドミニカ共和国に移住された日系一世の方々から移住当時のお話をお伺いしたことから始まりました。

第二次世界大戦後、日本政府は、ブラジル、アルゼンチン、ボリビア、パラグアイ、ドミニカ共和国に対し移住政策を打ち出し、一三一九名の日本人がドミニカ共和国へ入植しました。しかし、ドミニカ共和国の移住地事前調査報告書はたった十五ページと、他国とは比較にならない程杜撰なものでした。募集要項で謳われていた三〇〇タレア（東京ドーム四つ分）の土地無償譲渡の約束は果たされず、夢と希望に満ち溢れた移住者を待ち受けていたのは、耕作不能な僅かな借地で農作業を強いられる地獄のような日々でした。また、ドミニカ共和国だけが移住協定を結ばれておらず、困窮する移住者の助けを求め声は何処にも届くことはありませんでした。その後、嶽釜徹氏を筆頭に総勢百七十七名の移住者が立ち上がり国を相手取り東京地裁に提訴、日本移住史上最大の裁判が行われました。

人生が一八〇度変わってしまった現実を、どう受け入れ乗り越えてきたのか、不屈の精神で多くの困難と立ち向かってこられた貴重なお話の数々を、次代を担う後継者の方々や日本の多くの人々に知っていただきたいという想いから取材を始め、九名の方の個人史を制作し、移住史としてここに集約させていただきました。

記載にあたりましては、移住者ご本人の証言をそのままに、加筆を行わず忠実に編集させていただきました。日本の裏側にあるドミニカ共和国で逞しく生き抜いた日本人農業移住者の心髄が、皆様の心奥に届きますように…。

二〇二四年七月二十九日

ドミニカ日本人移住六十八周年記念誌編集者 青木美重

【目次】

はじめに	1
目次	2
ドミニカ共和国移民概要	3
六十八年の時を越えて	9
高吉 ミサ子 様	9
国分 儀法 様	25
井口 シズ 様	37
笠原 ハルエ 様	59
玉手 和子 様	67
犬山 則男 様	79
浜田 忠幸 様	95
向井 猛 様	103
嶽釜 徹 様	115
移住者アンケート	139
入植六十八周年記念式典	145
編集後記	148
奥付	149

ドミニカ共和国移民概要

ドミニカ共和国移民概要

一九五六年

日本人移住開始

- 七月 ぶらじる丸 ダハボン第一次（嶽釜徹、大山則男、笠原ハルエ、国分儀法）
- 十月 あふりか丸 ダハボン第二次、コンスタンサ第一次（浜田忠幸）、マンサニージョ漁業移民
- 十二月 ぶらじる丸 ダハボン第三次、コンスタンサ第二次

一九五七年

- 三月 あふりか丸 ダハボン第四次（玉手和子、井口シズ）、コンスタンサ第三次
- 九月 農林相ネイバ調査
- 十一月 あふりか丸 ネイバ第一次
- 十二月 あふりか丸 ネイバ第二次、ドウベルへ第一次

一九五八年

- 一月 ぶらじる丸 ドウベルへ第二次（高吉ミサ子）、ハラバコア第一次
- 五月 ぶらじる丸 ハラバコア第二次、アグアネグラ第一次
- 六月 あるぜんちな丸 アルタグラシア第一次、アグアネグラ第二次（向井猛）

一九五九年

- 六月 ぶらじる丸 アルタグラシア第二次、コンスタンサ第四次、ネイバ第三次
- 九月 あめりか丸 アルタグラシア第三次、ハラバコア第三次

一九六〇年

日本人移民受け入れ中止

三年三ヶ月間八入植地に合計二四九家族一三一九人（うち五家族三十二名漁業移住者）が入植

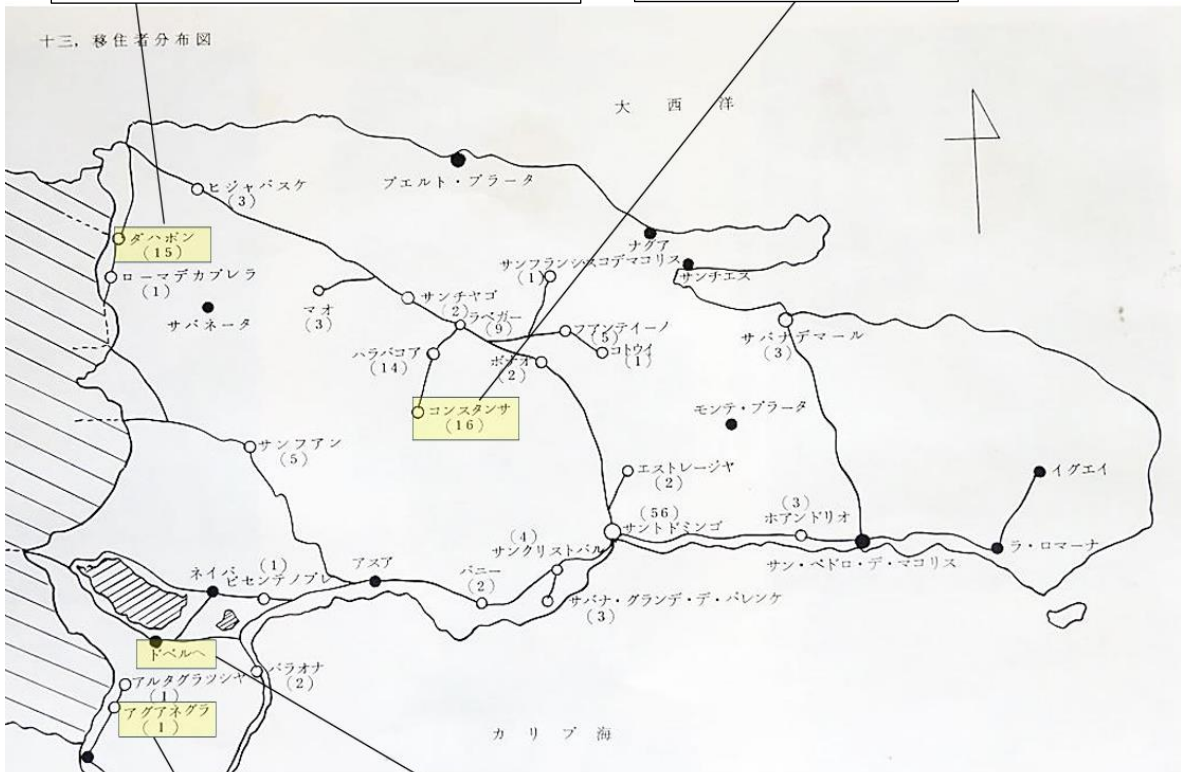
- 一九六一年 五月 トルヒージョ大統領暗殺
- 一九六一年 九月 集団引き上げによる集団帰国、一部南米へ移住が開始
- 一九六二年 二月 ドミニカ移住問題が国会で議論、責任追及運動が起こる
- 一九七九年 八月 David台風がドミニカ共和国を直撃
- 二〇〇〇年 二月 ラ・ルイサ土地無償譲渡
- 二〇〇〇年 七月 東京地裁に提訴
- 二〇〇六年 六月 東京地裁判決
- 二〇〇六年 七月 小泉内閣総理大臣談話により移住者に謝罪
- 二〇一三年 一月 移住記念碑落成記念式典開催
- 二〇一三年 八月 記念碑脇に移住者名を刻んだ碑板を設置し完成式典開催
- 二〇二二年 二月 ドミニカ政府による日本人移民に対する土地補償金支払い開始



【取材対象者入植地 MAP】

ダハボン
 嶽釜徹、犬山則男、笠原ハルエ、
 国分儀法、玉手和子、井口シズ

コンスタンサ
 浜田忠幸



アグアネグラ
 向井猛

ドウベルへ
 高吉ミサ子

六十八年の時を越えて



～高吉ミサ子様～



二〇二三年三月二十二日、六月二十一日 取材

高吉ミサ子

- 一九三一年九月二十三日 鹿児島県で生まれる
一九四九年 (十八歳) 高吉勝実と結婚
一九五〇年十月一日 (十九歳) 長男 良一生まれる
一九五二年十一月十七日 (二十一歳) 長女 ミヨ子生まれる
一九五五年五月十六日 (二十三歳) 次男 清文生まれる
一九五八年一月二十四日 (二十六歳) 夫 勝実と子供、合計五名でドウベルへ第二次にて入植する
十二月三日 (二十七歳) コンスタンサに転住する
一九五九年十月十九日 (二十八歳) 三男 勝広生まれる

高吉ミサ子様は、小さな身体から眩しいほどの明るいエネルギーに溢れている、とつてもチャーミングな女性です。また、昔は踊りを作って移住者に教える日本舞踊家でもありました。今年九二歳。身体が思うように動かず、得意のおはら節も踊れなくなったと言いますが、踊りのお話になると目がキラキラと輝きます。今ではスマートフォンでゲームをする事が日課となり、「身体が動かん代わりに、これ(ゲーム)して頭を動かしよるの(笑)」とお話する姿は、人生を楽しむ名人そのものです。

「周りの人に助けていただいて今がある」と、いつも感謝の気持ちを言葉にするミサ子さん。街の皆から「マリア」と呼ばれ、お母さんのように慕われ愛されているミサ子様は、その愛称の通りコンスタンサの街のマリア様なのかもしれません。



子供の頃、日本での生活は？

その頃、戦争で皆貧乏ですよ。学校には行くんだけど、空襲空襲で、逃げ方ばかりの稽古でしょ、そして私がね、三年生四年生のころから、山で勉強があるの。学校は、先生が殺されたもん。それでもう学校には行かなくて、部落ごとだったの。一年生が二人くらい、二年生が一人くらい、三年生が七、八人か、勉強何ができる？ 歌うだけ、ポツポツポの歌。それで一日終わり。学校の先生もたまには来るけど、来ない日もある。戦争で学校の先生もいなかったんですよ。農業の先生とかいるんですけど。男の人は皆戦争でしょ。私は兄さんが三人いるけど、三人とも戦争だから。私を八年見なかつたんだって。私が六歳の頃（戦争に）行つたんだって。私が十四歳で（兄が）帰ってきてるわけだから。そしたら私を見てビックリ。はな垂れ小僧がね、お姉ちゃんになつてるって（笑）。

靴は、私なんか裸足で、霜がたつてるのに裸足で学校に行つたもんです。買おうも、金もない。買おうも、靴がない。ほいで行つたら、（生徒は）三十九人だった。それに政府からかな？ 八足くらいの靴（の支援が）来るんですよ。それをくじ引きで、八人は当たるでしょ。八人は靴が履けてあちこち行けるでしょ。ほいで、学校に来て運動場で体操があるでしょ、その時は先生がね、当たつたのは持つてきなさいって。その八人も靴は脱ぎなさいって。皆裸足で。そんなあれで、体操したもんですよ。それで休み時間に遊ぶようにって。（何も）ないんですから、みんな焼けちゃつてね。

私は十四歳で終戦だったけど、卒業だけはしましたよね。十六歳で卒業したら、金の方が重要だった。まだいくらでも貧乏人がいる。戦争が終わって兵隊さん達が皆帰るでしょ。防空壕に盗みに行ったもんですよ、私なんか。泥棒よ（笑）。ほら、兵隊さん達が米を何俵とか、缶詰とかおしていらつしやるでしょ。それを皆さん男の人がね、「ミサ子来んか〜」ちゅうから、なんごとかと行つてみりや、缶詰を盗んだり、そんなの本当の泥棒よ。その兵隊さんは置いて帰るわけ、もう誰もいない。まあ取つても悪くはない。みんな泥棒するわけよ。それで私はね、そんな時、兵隊さんの毛布六枚、うちまで持つて帰つたことある。持つて帰つたら、うちのお父さんはね、「兵隊さん達はわんわんわんわん泣いて帰つた。ほしたらバカどもが泥棒どんして！」て話すわけ。それ



で今度怖くて、(毛布を)隠したもん。お母さんは、「もうしようない、お父さんが怒るから隠そう」って、隠したことあるよ。ある日、うわさで、泥棒に行つて、缶詰や他のもので金持ちになったとかいう人が多い話の流れたわけですよ。そしたらお父さんはね「今度戦争に負けたら、俺が行つて取るから」って冗談言うんです(笑)。ほいで、隠してた毛布を持ってきたらね、一番良いのを私に渡して「これお前のよ、これでね、結婚してもいい」て(笑)。まだ十五、六よ！ お父さんがそう言うなら、まだ缶詰も持つてくるんだつた。つて皆で笑つたりしました。

戦争への想いは？

私なんかは日本にいる若い時はアメリカと日本の戦争で、私は十四歳で終戦になったんだよね。食べ物もなくなる、靴もなく。今考えれば戦争ちゆうのはバカなこと、人を殺して、家を燃やして、それが戦争だもん。子供を殺してね。いつかね、このノティシア(ニューズ)でね、日本のNHK持つてるから、いっぺんね、東京だったかどこだったか知らない、四、五人の私みたいなばーちゃん達が、「もう戦争ちゆうのは絶対しないでください。人を殺し、子供を殺し、家を燃やす、それだけしかないんだ。」つてね。本当は私もその時そこにおつたらね、私も一口言いたかった。本当だと思つてね。

鹿児島県を出たのは？

二十七歳の時、鹿児島県を出たのが一九五七年十二月二十一日。横浜の幹旋所に一週間か十日かな、そして十二月三十一日の夜に、私らぶらじる丸に乗り込んだんだから。出たのが朝方の三時頃、お正月の一月一日ですよ。そして出たら、途中で止まったんです。人数調べるとかなんとかで。

皆の話だけど、人数調べとか言わないとかなんとかで。ほしたら私はもうあのペンキの匂いと、トコトコトコするでしよエンジンの音、あれで私は酔つてるんだから、船酔いよ！

そして、二、三日したときの波の揺れ、三日くらいね、なんか嵐みたい。こゝいつたら今度は沈んじゃつたり、今度はこつちにこゝ行つたら、またこつちへこゝきて、今度は沈んだら、それが三、四日続いたんです。それで奥さん連中は、あつちでもゲツ、こつちでもゲツ、それを聞いちゃって、私なんかゲツて思うわけ。私は



五人で来て、三人子供がいて、便器が一人ひとつずつ、みんなにあったから。ベッドの下に置いてあったわけだから。私は鍋かと思つたの、こんな丸いので、一個握るところがあつて。お手洗いはあるんだけど、どっか二階の方に。でもトイレは怖いわけ、そんな波だから。それで皆ね、おしっこさせたり。揺れるとき私なんかは行けないですよ。まあ、若いからトイレにも一日くらい行かんでも大丈夫。子供達はそんなに行かなかつたね。

一番いいときは、川から海へ行くところがあるでしょ、パナマ運河、八時間くらいもう楽だね、船の中を見て歩いた。海の水が川の水か知らんけど、船が上がつてね、三段に上がった。そしたら行きだして。そしたら誰か知ってる人が、今度は女の人がまたゲーゲー言うちようゆうて男の人がよるわけ。今度は、ドミニカ着く時うちの主人が、「お前はもう何とかして荷物をせんと」ちゆうから、「どうでもいい、船が止まるまで寝ちよる」言うて、起きれんの。私は痩せてきたよ。食べれないもの。お正月の一日だから、うちらが出てね、お餅が出た。それから鯛が一人一匹出た。そしたら子供達は喜んで食べるわけ。その代わり骨に気をつけね〜つて。ほして、私もよし食べるつて、お箸で持ち上げたときにはもうダメ、お箸はそこに投げていた。あの頃はみんな戦争で、うちがみんな貧乏だったでしょ、その魚が嬉しくて、お餅が嬉しくて。でも、お箸で持っただけ。食べれない。昼と夜と間違うて寝ちゆるわけ。来るたんびに違うでしょ時間が。すると、昼と夜と間違つちゆるわけ。昼はもう眠くなつちやつて、夜は目が覚めちよるわけ、それで食べれるもんか、また夜にもいいものが来て。捨てるのに大変だったつて。で、どこに捨てたつて言つたらね、ゴミ箱がどつかにあるんだつて。海に投げようかなと思つたけど、皆が見ているそうだから、やっぱり投げきらんでね、ゴミ箱に入れるところがあつたからそこに捨てて。

私ら二十四日間。ぶらじる丸は何か新しくて、ちよつと早かつたとか言つてたよ。それは皆さんの話。皆さんが、あめりか丸は一ヶ月かかつたて。私らは、一月一日に出て、一月二十四日に着いてるから。その船によつて時間がかかつたりするのかもね。あんなに海が荒れたら、また遅いとか、どんなに揺れたか。他の人に聞いたら、三日ばかり揺れたよ〜つて言つたよ。あそこんとこ揺れるんだな〜と思つただけだね。ま〜船だけはダメ。もう乗りたくない。

日本に帰つたとき、鹿児島から大阪まで船に乗つたの。大阪にうちの主人の弟がいるから。船場に迎えに来ちよるけど、乗りたくない〜て私は思うわけ。ほいでも、主人は船に乗りたいたいから。いつ着くのつていつたら、明日の朝つて言つた。ほいでうちの主人が嬉しくて。

やっぱりその船酔いがあかん。(車は)いつでも前に乗せてもらう。私は(ぶらじる丸で)二十四日間食べてない。来たときは本当痩せてきてたよ。うちの次男が、一年と八ヶ月だから、夜はおむつするでしょ、昔は布で持つてきてて、仕方ないから主

人に「洗ってきて」って。自分のパンツまで洗ってもらって、しょうが無かったのよ。頼んだのをば忘れない。船でね、お風呂もあつた。あんまり揺れないときは「よし！お風呂に行こう」って行って。それでまた波が荒いでしょ、でまた汚して、もう仕方ないこれを洗ってきてって、主人にパンツまで洗わせたのは船でだけ（笑）。

ドウベルへの入植時は？

私なんかね、第二次なんですよドウベルへ。もう一次の方が、四十家族くらい来ていらっしやつたの。私らは、高田さん、藤脇さん、加藤さん、高田さん、たった五家族で来た。

行ってみたら日本人の方が真つ黒になつていて。いや〜どうなるだろうかと思つたけど、皆が「明日の朝畑見てみれ」て。こは雪が降らんとこやけど、雪が降るって。塩。塩分が上がってきてるって。ビックリしたんです私は。そしたら、うちの主人が、「本当だよ」て。畑に行つてみれば塩分で真つ白だよ。朝。朝露が降るでしょ。それが塩になつてる。私も初めてそんなの聞いてよ、本気にならなかつた（信じられなかつた）。

畑には毎日行つたの。係の人がいるんです。それで「仕事に行け仕事に行け」でしょ。それで『ひょうたん』を買つて水を入れて。毎日行つてたんです。畑に水がなかつたんです。家からアサーダ、プア^アを担いでね、毎日畑に行き、半分遊びよ。草生えないんだもん、塩分で。く（棘）のたつた木がポツンポツンと今でもあります。ちよつちよつ出る草を取つて歩くだけ。

その時、五タレア^五くらい貰つたと思う。それで、ギネオ、プラタノ植えるように、主人と二人でよ、暑いのに、明るる日行つてみたらなくなつちよる。砂だから、風で、作つたのがなくなつてる。「これで何の仕事が出来るんだらうか」ち、言いながら毎日行くんですよ。

ドウベルへでの、政府から補助金は？

うちで幾らだったか、三〇ペソ^{三〇}か四〇ペソか。何人かいたら多い。それで食べていってました。畑では何も作つてないんですから、食べるばつかしでしょ。金無しにアルゼンチン、ブラジルに行けんでしょ。その頃には仕事が始まっていたみたいね、日本、出稼ぎ。うちの母から、片言のカタカナで、ほら、歳でしょう、勉強してないから、カタカナひらがなでね、「ニホンのウチならどこでもよい、カエツテコイ」って手紙が来たんです



よ。封筒に、ちゃんと兄さんが書いてくれたんでしよう、宛名をね。日本のうちだったら早く帰ってこいって、その時やっぱりね、なんで来たんやろうかって。うちの主人が、五年たったら帰ってくるんだよって、大金貰って、畑が三〇〇タレアあるって言うから、それ貰ったら、仕事やって、五年たったらって。

ドウベルへでの生活は？

(ドウベルへに)行ってみたら蚊が多いのに困りました。私と娘は、できもので、それで掻くでしょ、汗が出て。どこでも、大きな蚊帳を持ってきて、それで応接間に張ってご飯も食べる。そして本当に狭い家だね。お家は どうして配分されたのかな？くじ引きだったかもね。

今のドウベルへは？

この前、ドウベルへに寄ってね、びっくり。誰もいない、今でも、私らが入ったときのままの家がポツンポツンとあります。板だからもう崩れているけど、修理をしているから、ドミニカ人が入っていると思います。「うちらはこの家だったね」と話しました。水は、今でもないんだから。カナル(水路)にぼちぼちくるような水が少しだけ、畑にかかる水ではありません。やっぱし(ドウベルへを)早く出て良かったなと思つた。

ドウベルへからコンスタンサへの経緯は？

その(二次の)五家族の藤脇さんって方と、加藤さん、その二人がうちに来られて、「高吉さん、コンスタンサへ行きませんか？」って。その代わり五家族集まらんと、農林省かどこか知りませんが、カミオン(トラック)の大きいのを出してもらえないって。タンスとかなんとか持ってきていて荷物は多かったですから。そしたら主人が、「どんなところかコンスタンサも知らないけど、行ってみよう」って。「周りに分かんないようにしましょう」って。皆が慌てるって。ほら、皆ここで(農業は)ダメって思ってるでしょ。(周りが)慌てないように畑に行ってくださいって。コンスタンサに来るのはもう決まってるけど畑に行つて…仕事もしないけど、もう遊び。で、夜は荷造りよ。他の人は知らないわ



けだから。ほいでもね、しまいには分かって、丸山さんが「ミサちゃん、あんたらどっかに行つとか？」て。もうしようなかったわけ。もう行かんとも言えんし。「まあ、そんな話だから、出来れば行きたい思つて、ここじゃ私はダメだ」つて言つたわけ。「そりやそうか」つて。

その年の十二月の三日にここ、コンスタンサに来ました。一月二十四日にドウベルへに着いて、二十四日間船に乗っていましたから、それからここに来たのが十二月三日だから、十一ヶ月でしょ。それだけ、ドウベルへにいたのは。

移住者としての転機は？

高田さんと二家族がコンスタンサに残つて、他の人はブラジル・アルゼンチン・日本に行かれた。この五家族のうち二家族がここに残つたの。大使館から「ブラジル・アルゼンチン・日本に行きたい方は？」て、聞きに来られました。でもね、私が言うには、「いや、子供が四人になつてしまいました。お金無しに、子供を四人、日本に連れてはいけません。ブラジル、アルゼンチン、どっかに行つても、金無しにや同じ、動きたくない」つて言つた。そしたらうちの主人も「そうだ。誰が四人の子供を見てくれるか」つて言うわけ。

コンスタンサに来てすぐに妊娠しちゃつた。あんまり涼しくて気候が良くて、蚊が喰つて腫れていたのも自然と無くなつちやつた。長男は良一。二番目は娘のミヨ子。三番目は清文といい、神奈川にいます。四番目はコンスタンサで生まれた勝広。

コンスタンサに移住した当時の様子は？

最初ね、ここ（コンスタンサ）に来たら、この家はウンガロ^{Ungaro}が入つてたの。でも、街にちゃんとエンカルガド（管理人）がいるんですよ。で、五家族パツと（ウンガロを）出してくれた。それまでは、コロニア^{Colonia}の日本人の方の家に泊まつて、明るく日くじ引き。ほんで、もういないの、ウンガロ。どこいっちゃつたのか…。

うちらが来たら、畑がちよつと下の方の湿地帯にあるんですよ。そこをば貰えるつて聞いて行つてみたら、こんな小さい土地だけなんよ。畑がないから、ニンニク作るドミニカ人がいて、（三男の）勝広を背中におぶつて仕事に行つた。ミヨ子を連れて、たまに遊んでくれると思つてね。にんにくを編んで、棒にかけて干すんですよ。かっちゃん（勝広）はまだ赤ん坊だから、背中



におぶったり、ミヨ子に抱かせたりして。そうして働かないと食べれないから。よそのうちに行ったり、コロニアの人がジャガイモ作るのを手伝いに行くの、草取りとか。お米を一俵か半俵もらうでしよ、それで食べてね。それからなんとかかんとか、金借りたりできるようになった。

借金と引き換えに：

ドミニカ人が五タレアとか売るんですよ。それでしようがないから、うちらはもう、畑を人のもんを借りてやるうちゅつたら、土地を借りるお金を幾らか（必要だ）ちゅうけど、それがないから、リアカーと自転車を売った。（土地の）借り賃にそんなのをやってるわけ。一回の仕事に交換。もったいなかったけど、畑の方が必要で…。

最初は、トマトを作ってたね、そのトマトがね、たった四タレアの畑を借りて、それが運が良かったのよ。大きいのが出来て、（儲けが）倍になっちゃったの。いや、良かったよね（笑）。それでまたお隣の土地を借りて。（トマトの）連作は悪いうちゅつから、今度その金でまた他のところ十タレア借りて、また作って、なんとかかんとか赤字にならんように、二〜三回繰り返してね。一番最初のトマトは一年半くらいは作ってました。そうしよつたら、肥料を買ったけど、返す金がない、それで私のミシンを売ったのよ。その肥料代の代わりに。（肥料を売っている）Sra.に、「ミシン、お前取るか？」ついたら、「Hay si!」って。ミシンが欲しいって言うから、ミシンをね、肥料の代わりにやつちゅつた。もったいないでしょう（笑）。何回も借りるうちに、少し金が貯まったら、（ドミニカ人が）畑を買ってくれちゅつて来るから、それで買ってしよつたら、ある日、アグアネグラの（移住者の）方がね、日本に帰るからミシンもいらないうって、ミシンをそっくり買ったの。運が良かったところよ（笑）。またミシンを買い戻したんだから。またそれがね、ええミシンだから。まだそれはあるよ。縫えば縫えるよ！その代わりね、私の目のほうが縫えなくなっちゃった（笑）。もう針目は通らないの。

日々の生活については？

なんとか、ここに来て、苦勞もしたけど、ミシンも買い戻して、畑も買ってね。何とかこれだけの畑が残った。ミシンがないと、ここは（服の）既製品がなかったもん。全部布を買って、全部縫わんとダメ。私はね、裁縫も日本ではあんまりしてない。勉強もしてない。でもここに来て、うちの主人の上着やズボンなんかは全部縫った。うちの勝広や良一（息子達）のズボンからシャツから縫ってきた。

そうしてほら、夜は縫い方、昼は畑仕事でしょう。水がある時は、水かけに行かんと、ここはいつでもね、火・水・木（水を）まいとったもん。三日間昼も夜も。あんな元気やったのと思うもん。夜は行って水をかけてね、朝の四時頃まで。うちの勝広が赤ちゃんの時だもん。おぶって。ミヨ子もまだ五歳か六歳か、可哀想だからと思っておぶって行って、暑い中、水をかけて、それで朝四時頃になったらね、もう眠くなっちゃって。水がないところは主人が（水を）入れて、私は後ろから電気で「届いたよ、届いたよ」て言うけど遠いから聞こえないの。畑だし。ほいで、懐中電気で合図したら、届いたとさだよって言うてあるから、ほいでここにこうして手を振りよったら、（水被って）ずぶ濡れ。

朝は、ここに来た当時は、夜洗濯するんだもん。その頃は洗濯機無いでしょ。洗濯して絞って、バケツに入れてあって、朝五時に起きて洗濯物を干さなあかんでしょ。子供が四人もおるから汚すでしょ。そんな沢山（服を）持ってきててもいないし。今みたいに一〇〇枚も持っていないし（笑）。子供はどんどん大きくなるし、今度はミシンで縫って、着せて。夜は早いときは九時十時には寝らんと、もう水があるときは三晩は畑でしょ。昼寝したことなかったけど、今頃昼寝したり、子供達に（ご飯）貰って食べて（笑）。まあしょうが無いわね。まあ、ようやってきてますよ。

当初の予定は？

うちの主人は（日本で）郵便局勤めだったのよ。その頃は月給は安いから、それを捨てて、五年たったら（日本に）帰ってくるから、また仕事に行くよなんて言うてた。（ドミニカで）五年経った時は、食べられんくらい苦しかった。

それで、ここ（コンスタンス）に来たらね、畑ないんですもん。

街の人からマリアと呼ばれるようになったきつかけは？

私（の名前）はミサ子、マリアでないの。でも皆「マリア」だから（皆にマリアと言われるから）。

ドウベルへでね、三人くらい道路を綺麗にするドミニカ人の男がいるんですよ、そしたら言葉ひとつも分らんでしょ、私になんとか言うけど、日本の本を持ってきて、指さすの。「日本語で何ていう名前ですか？」って言うから、「Yo（私）はね、ミサ子」



ってバカだから教えちゃったの。そしたら、ミサ子が言えなくてね、「サコ」ちゆうんです。そのサコが何の意味か知らないから、「まあ、ええわ」て喜んで、その三人はそこら辺にまだいて、サコサコちゆうもんだから。そしたら日本大使館から来られた人が、私にこう仰ったんですよ、「サコって言うのはね、お米を入れる袋ですよ」て。もうそれからね、こつち（コンスタンサ）に来たら、ここでも日本人は珍しいから、「何て名前か？」なんて聞かれて。「私はね、高吉ちゆうの」と言ったら、「高吉はお前の婿さんだ」ってのはつきり言う訳よ。

四年くらいした時、どこの誰かが「マリア」って言い出して。未だに（理由は）わかんない。一人が「マリア」って言って、私が返事でもしたのかな？　それで、コロナ全部「マリア」ち、言い出したの。そしたら街まで広がってるの。肥料を十俵くらい欲しいと街に行っただけどお金がなくて：「Yo（私）は肥料が欲しい、トマトがあと一ヶ月か二ヶ月かできるから、金は払う」って手真似、足真似で言ったらね、「あ、お前はマリアか」って言うわけ、マリアがハポネッサにもいるって、十俵も十五俵も貸してくれて。私が借りて持って、カミオンがちゃんと持つてくるでしょ、うちの主人が「何て言って借りたんだ」って。高田さんのおじいさんも、「奥さんが借りられたんだから、今日は私が行って借りてくるよ」って。そしたらね、借りれんかった。それで、うちの主人と高田さんみんなに笑われた（笑）。

それから今度はニンニク作ったもんで、ちよつと良くなったんでニンニクの方が金になるって。そしたらそこにどうしても倉庫が欲しいんですね。今の五十万ペソですよ。それ言った途端にね、全部貸してくれたの。高田さんは大工さんだったから、すぐにうちに来て（倉庫）を作って、ニンニク作り始めて、何とかかんとか。貸してくれたのが私は凄いなと思う。「マリアがいいのからもよ」って（笑）。未だにね、ここの人、私の名前知らない。若い人からこんなちっちゃいのからね「マリア！」って言うの。良かったよ。なんもかも借りて、肥料も借りて、畑仕事ができるでしょ（笑）。でなかったら肥料がない、倉庫がないっていったら仕事が出来ない。

お金にまつわる苦勞は？

うちのかつちゃん（三男 勝広）が、（コンスタンサに来た）明るる年の十月に生まれたんだから、ここへ十二月三日に来て、すぐ妊娠しちゃって、あの子がちよこちよこする頃トマトを作りよった。それからは自分たちで肥料を借りて、借りるのばかり。主に肥料、それから倉庫を作る材料、そして消毒、そういうのも借りないと。消毒しないとダメでしょ。ここに担いで消毒する



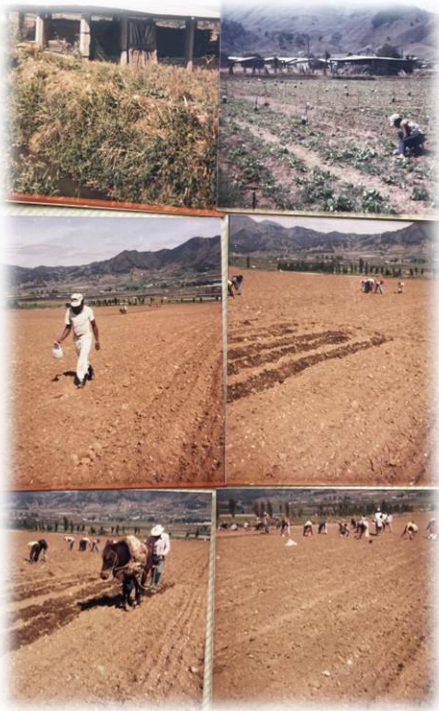
でしょ、ああゆうのも二つ三つ借りて、お金はトマトが出るまで払わんのだから、トマトが出て、金になったら払いに行く。高利貸しだったら、私が二〇〇ペソ借るでしょ、二〇〇ペソは向こうで取るわけ。一八〇ペソでしょ。それでも借りましたもん。それも私は言葉分らんから片言よ！ 牛と同じよ！（笑）。

農業銀行からも借りてました。農業銀行でね、ちゃんと返してたもんだから表彰されたんです。うちのかっちゃん十五六歳の時、農業銀行の方から招待されて、それでうちの主人と二人で「行ってみるが、うちらに何食べさすかな？（笑）」って、行っただんですよ。そしたら、「よう返したな」って表彰された。初めてだって。返しちや借る、返しちや借る、これいだいたんです。（表彰状を見ながら） これをもらって喜んで、その頃からちよっと自分たちで（生活を）やれるようになってたから、十年間苦労して。お金借りちや持つて行くのが仕事みたいだった（笑）。

それからもう一人、個人で Iglesia（教会）持っていたおじさんがいつも馬に乗って白いシャツ着てね、歩きよった。それであのおじさんが（お金）持っていないかな？と思つて、こっちは金がないんだから。主人が「一〇〇ペソ欲しいなあ」って言うから（おじさんのところに）行つたの。その人にお金が一〇〇ペソ欲しいって言った。その頃はね、一〇〇ペソあつたら人夫（畑仕事の使用人）使つて、食べて、一ヶ月くらい生活できる。今の一〇〇ペソは一日もたないけど。

それで、借りに行つたらね、その人が「サビーナのマリア？ あゝ、お前か。大丈夫か？」て、一〇〇ペソ貸すって言ってね。Sra.（奥さん）がいたから、Sra. が保証人で一〇〇ペソ貸してくれた。「十ペソは取らんのか？」って聞いたら、「いらない」って。「その代わり一ヶ月したら返して。」って、利子もとらんの。それで、その代わり、私がワイシャツとパンツの白、襦袢をね、ちゃんと畳んでね、「ありがとう」って一ヶ月後にお金と一緒に返したの。ほいたら喜んでね、「また貸すから」て言うの。有難いですよ、やっぱああいうこと言ってもらうとね。

そういうこともありました。今頃人に話したって（その時のことが）嘘みたい。苦労しましたよ。畑を次から次買つて。もう今では一〇〇何タレア持つてますから。今はうちのかっちゃんが（畑を）やってます。水はうちの主人がね、ちゃんと底から掘つて、畑にある。昔はカナルの水は綺麗でいっぱ



いあったけど、今は無くなっちゃってるの。もう今はごみだらけで洗濯もそこでは出来ないの。

子供達の学校は？

言葉が分からんから、うちの良一と他の子供達全部で四人、ここの学校行きだしたらね、一人ずつやめてっちゃった。言葉分からんでしょ、「ケモ〜」つって、落第したって帰ってきた。三年か四年いたかもね、それで分からんから、試験があったら落ちちゃうわけよ。清文とかっちゃんだけが高校まで行った。それでも文字は良一も書きよったもんね。私は六十何年もおって読むの大変。

当時の生活は？

昔は贅沢しなければ一ペソで三日食べるけど、肉とかは買って自分で切らんといかんかった。今は一kgばくれたら、ちゃんと切ってくれるでしょ。鶏はそのまま買ってきて、自分でこしらえないかん。羽とか全部自分で取らんないかん。そうして切らないかん。昔はそういうのあんまり食べてませんよね。一羽五十ペソで買えるでしょ、冷蔵庫もないでしょ、二回くらいに分けて煮て。

日本に行つて、日本は贅沢だなくって思つて。一歩出たらおにぎりはある。いいな〜と思つて。私も五〜六回帰つてるから。子供が神奈川にいるから、今頃皆贅沢だなく。

お米が二ポンドで十六ペソ、十六銭ちゆうんだよね。マツチが三銭、玉子は二銭くらい。それでもこっちは、その時はお金がないんだから。昔と比べたら違いますよ。シナ人のお店に行ったら日本米もある、贅沢よ〜。

ここもお店があったから、行けばものはあるけど、金ないから、借りてくるの。ノートを持って、向こうに書いてもらつて、ほいで収穫の時払いよつた。収穫まで待てよ、一ヶ月くらいするよ〜て言うからそんなことも何回もありました。お店の人はほら、日本の人はね、なんとなく信用があつたんですよ。

経済調査について

経済調査があつたんですよ、JICAから。所長さんもね、そろばん担いで、ちよこちよこ来られてたけど、今ないですよ。その時は私らの日記で、肥料を幾ら入れた、人夫が…。それでうちの主人も見て、話すわけだ、JICAの人とね。一年に二回は来ら



れてたんですよ。もう全部（日記に）書いて、どのくらい儲かるのか。日記、それだけは毎日かいています。もうちつと勉強すりや良かったと思うけど、「お前の日記はね、読めん」と、うちの主人はよく笑いよった（笑）。

ここへ来たとき、三〇〇タレアやるつちゅう畑がひとつも無いわけだから。ドウベルへはひとつも（農作業が）出来ないし、塩分で。ドウベルへでは一日一ペソくらいお金が出てたんですよ。うちが五人で四十ペソでしたから。四人のところは、三十ペソとか聞いたもんですけれど、それが月に出るんですよ。それで食べていたんです。それで分かりますでしょ、四十ペソが一ヶ月あったわけだから、食べるのはなんとなく食べて、その代わり贅沢は出来ない。子供おれば子供にお小遣いくれられない、そういうのはありません。風邪引いた、薬、蚊に刺されて、医者に行ったけど、医者のお金払ったり、薬払ったりで、それも安かったと思うけど、やっぱりそのお金ででしょ。

写真説明 コンスタンサでの文化活動

コンスタンサ日本人公民館。「いもがらぼくと」あれを、面をかぶって踊りよったの。まだ持ってますよ、お面を。日本から持ってきて。コンスタンサでも踊った、キャピタルでも二人で踊った。面をかぶっているから顔は誰にも分からない（笑）。

黒田節も、うちらは踊ったもんですよ。衣装は自分たちで作ったり、日本から持ってきたり、自分で作ったり。布がなくて、日本に行ったらまたもらって、あんまりもらったから、





この前うちの娘に全部くれちゃった。(踊りは)作りが多いのよ、知らんのは作って教えるのよ。「勘太郎月夜唄」も全然知らんのよ。私(踊りを)作っちゃったの。

人生振り返ると？

日本であれだけ苦労したから、ここに来てても苦労は何とかなると思ったけど、なかなか…。ドミニカ来てから、一生懸命で、苦労で。ドウベルへからここ(コンスタンサ)へ来たけど、やっぱり、食べるもんも食べないで、稼いで畑を買ったの。畑がないんだから。それで何とかかんとかね、今自分の家がなんとか出来て。私なんか戦争にあってるから。日本では戦争ね、ここではお金。でもここにおつて何とかかんとか食べていつて、九二歳まで元気である。

ドミニカで一番楽しかったことは？

一番楽しかったこと…様々たくさんありますよ。ドミニカ人と喋るのは一番の怖い楽しみ。言葉を覚えたいうちゅうのと、覚えのないのに、心配したり、楽しかったり、そういうことです。他にも畑仕事に来るとき、ドミニカ人とおしゃべりしながら、畑仕事をするのが、私には言葉が覚えるから一番いいと思つてます。

一番つらかったことは？

最初来たとき、言葉の分からないこと。それで本当に苦労しました。言葉を覚えるのには一生懸命で。今、言葉を覚えて、楽しくなつて、ドミニカ人と話すのが楽しみです。

一番の思い出に残っていることは？

思い出に残つてもたくさんあるんですけど…。まあ、やっぱり仕事ですよ。仕事を一生懸命やって、畑が多くなり、色々が多くなり、今度は何が儲かるのだろうか、少し金になるのだろうか、その楽しみに一生懸命働いたことです。



最後に：

(ミサ子さん九十二歳の誕生日会にて)

ミサ子さんのお誕生日には、沢山の家族親戚お友達が集まりました。アメリカに住んでいて来れない息子の良一さんやお孫さんからもお祝いの連絡があるそうです。「みんなが自分の誕生日会に来て本当に楽しいのか分からないけど、それでもこうやって一緒に祝ってくれる。有難いよ。ケーキなんかこんなに食べちゃってさ。もし日本に帰っていたら、今頃（誕生日の日にも）家で独りだったかもしれない。日本では最近そういう感じだっけ聞いて聞かない。ひとり暮らしで、独りで食べて独りで亡くなっ、寂しいだろうね。身体ももつとダメになってたかも。この年まで生きとらんかったかもね」と語るミサ子さん。

移住して六五年、ご主人の勝美さんは既に三〇年前に亡くなられています。大変な苦勞を乗り越え、ここでこうして周りの皆と賑やかに過ごせるだけで、この国に来て、帰らずに残って良かったとお話されていました。

一 農具の一種

二 タレア約六〇〇平方メートル

三 通貨単位 ドミニカペソ

四 ハンガリーからの移住者

五 一般的に移住者が住む地域言う





～国分儀法様～



二〇二二年二月九日、二〇二三年四月十三日 取材

国分儀法

一九三二年九月二十日

フィリピンで生まれる

一九四六年

(十四歳)

福島県二本松に家族で引揚げ

一九五六年七月二十九日

(二十三歳)

兄義人の同伴者として、母と兄弟、合計六名にてダハボン第一次として入植する

一九七二年八月二十三日

(三十九歳)

※ 長男 洋治生まれる

一九七二年十月二日

(四十歳)

※ マルサ・サントスと結婚

一九七四年十月二十九日

(四十五歳)

※ 次男 商治生まれる

※ 過去の移住史からの引用

国分儀法様は、九十一歳。現在、ドミニカ日系人協会の九十代男性は、儀法様を含め二名だけです。ご高齢のため、身体の衰えには逆らえませんが、強い目力と勢いある口調は衰えることはありません。ご自宅を訪れると、「おう、来たか。遅かったじゃねーか。」と迎えてくださいます。弱みを一切見せず、泣き言ひとつ言わず、これまで沢山の荒波に揉まれながら、我が人生と戦い続けた逞しい生命力が、全身から溢れ出し、そのお姿は、まるで「七人の侍」の菊千代のようにです。また、血の繋がりに関係なく、常に弱者の味方となり、沢山の人の面倒をみてこられました。そんな男気ある儀法様が、鋭い眼光で、過去の凄まじいご経験を語ってくださいました。息つく暇もないお話の数々は、人生とは何か、生きるとは何かを考えさせられました。



生まれは？

私はフィリピン生まれ。大東亜戦争が始まったとき、私は八歳でした。人生で三回收容所に入れられました。日本軍が入ってきて、私ら解除になった。十四歳までフィリピン。両親がフィリピンに移住した、移住者です。なんでフィリピンに行ったかは分からん。

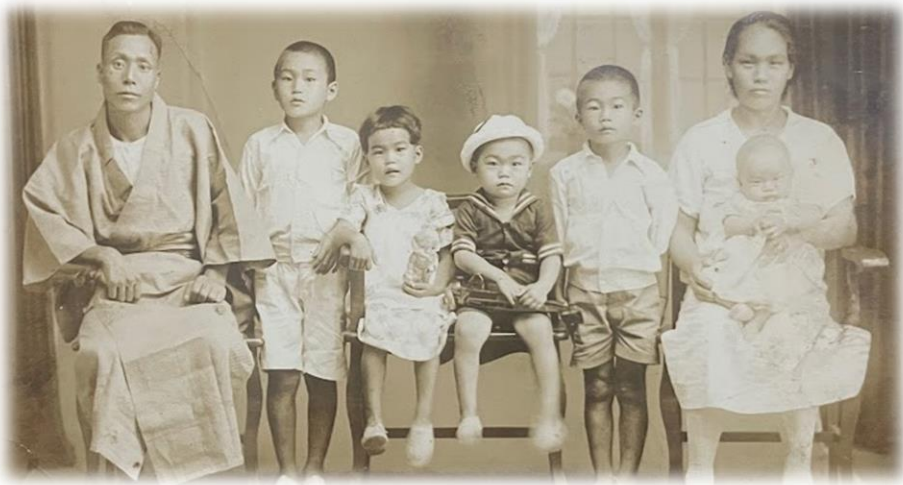
その当時、フィリピンにはマニラ麻つてのがあったんですよ。その栽培で、儲かったか何か知らんけど、うちの親父はフィリピン一の成功者だったんですよ。でも、大東亜戦争が始まって、私らはバカ正直に日本軍の言うことを聞いて。そこへどんどんどんどんアメリカ軍が攻撃した。アメリカ人と日本人の戦争でしょ。フィリピン人は手が出なくなつた。

戦争前は、アメリカ人もフィリピン人も仲良かったんだ。山本五十六が戦争始めた。フィリピンにはガソリンがあつた。だから一番始めにフィリピンに飛んだ。

フィリピンでの開戦

朝、私は飛行機が飛ぶのを見てた。それ全部日本軍だった。それから学校に行ったら、「アメリカと日本の戦争が始まった。今日から学校はないから家に帰りなさい。」って返された。二年生のね、十二月の八日、月曜日。忘れられませんか、これは。その戦争が始まったと言うよりも、日本軍が飛んできたんだから。その前は、アメリカのマークが付いた飛行機が飛んで、練習はしよつたんだ。だから私らは、「今日はバカに早いうちに練習してるな。」と、見てたんだ。

日本軍が来たときは空爆をやつとつたよ。いきなりですよ。だから私らは、戦争が始まったの知らないでしょ、練習だと思つて見てたの。日本軍はそのフィリピンのガソリンが欲しかった。フィリピンはアメリカの領土、そこにガソリンがあつた。日本にはガソリンがない。それで大東亜戦争が始まって、ハワイで真珠湾攻撃をして。真珠湾攻撃と同時に、日本の飛行機がフィリピンに飛んできて。学校から返されたけど、バスに乗って收容所に家族で連れて行かれたけど、男と女、子供は別々。收容所は日本人学校で、私ら二階に入れられました。その時に、ガソリンの入ったドラム缶が玄関に二つあつた。なんであつたか、当時私ら分かんかった。それに火をつけて、フィリピン人



は逃げるつもりだったそう。玄関に二つ、逃げる所ないでしょう。その時に、日本軍がちょうど上陸したんです。豆戦車つて言うんです。私らは収容されて(日本人学校の)中に入ってたから、トコトコトコ音がして、「何だあれは？」つて見てたんだよね。そしたら「日本人だぞ！日本人はいるか？」と。忘れられんね。あんどきは泣いたね。その戦車が来なかつたら、私らは「けまわり」(煙に巻かれて焼死)してたでしょう。それはフィリピン人がやったの。怖いでしょう。

日本兵が、「お前ら日本人を殺す気か、お前らは日本人をダメにするのか、ほんなら俺がお前らを全滅してやる。」と、フィリピン人に言ったんだ。私は忘れませんよ。お前らは見るなよと言われた。見るなと言われたら見たくなりますよ。こそこそ隠れて見に行った。あれ見なきゃ良かったんですよ。水路を掘るんです。その人ら(フィリピン人)が自分で埋まるとこ掘つてんだよ。水路が出来たらそこへ座らすんです。縄で縛つて座らせて、それを後ろから機関銃でダダダダダダと。皆カナル(水路)の中へ。生きてるやつは、銃剣で刺す。三十人くらい。そういう体験は私くらいしかいらないと思う。見てる方だつて震えて歩けなかつた。草の中に隠れてね。だからそういうのを私は一生忘れられない、頭の中で。

どっちが悪い？

一番先は、火を付けて逃げようとしたのはフィリピン人でしょ。豆戦車が来たから火を付ける暇がなかつたわけ。それで私らは助かった。それを見た日本兵は、「ほんならお前らを殺してやる」と言う…

フィリピン人がガソリンタンクを置かなければ良かったんだよ。

日本軍はガソリンを手に入れた？

フィリピンにおつたのがマッカーサー。フィリピンでアメリカの司令官をしていた。マッカーサーがガソリンに火を付けて「私はまた帰ってくる。」と言つて、飛行機に乗つてオーストラリアに逃げた。有名でしょ、それは。それで日本の航空少尉が追いかけたが、自分の飛行機のガソリンがなくなつて戻ってきた。だからマッカーサーは助かった。

私を見たよ。ガソリンスタンドに火を付けられた時は、真っ黒い煙出して、一週間も二週間も燃えてた。それを見るときに、どのような気持ちで見ていたか：ドキドキですよ。私らが子どもの頃でも、「もつたいたいことするなあ。」と思った。火を付けて逃げた理由は、ガソリンが湧き出るところを燃やすため。日本軍にはガソリンがない。だから日本は戦争に負けたのよ。私はそう思う。

戦時中の生活は？

私は良い体験を持ってますよ。

日本刀の試し斬り。それをフィリピンで見えます。生きたフィリピン人をくくりつけて。旧式の日本刀と、昭和刀って新しく将校用に作った軍刀があるんです。どっちが切れるか試したかったですよ。日本の将校ですよ。だけどね、見る方が震えて。それで、うちの親父が（日本軍に）怒ったんだ。「そんなに人殺すな！俺たちは人夫（使用人）のおかげで助かっているんだ！その人夫をどんどん殺してどうする！これ以上殺すなよ！」と。でも親父は（日本軍に意見したせいで）豚箱入ったんだよ。それで今度は、フィリピン人を三十〜四十人集めて、親父を頭にして、飛行場を作るためにまわされた。父親は戦争には行っていないけど、戦争の犠牲者。

軍国式、日本軍が命令して、あれやれこれやれと。親父は義勇軍の小隊長か中隊長にさせられて、フィリピン人を連れてね。笑い話みたいなんだけど、日本軍の飛行場を作りに行ったの。親父は、日本兵とフィリピン人の通訳をした、死ぬまで。

学校は？

日本人学校は兵隊の宿舎になってたから、学校はないし、八つから六年生になるまで勉強なんてしてないですよ。兵隊さんの部屋掃除とかね、してました。

それでね、（フィリピンの）山の中に宝物が埋まってるって聞いて、私ら掘り起こしたことあるよね。出てきたのは骨と縄。皆山に逃げるから何かあると思って。だけど何もなかった。

そして、恩賜の煙草。今でも歌えます。

「空の勇士」

恩賜の煙草を いただききて

あすは死ぬぞと 決めた夜は

広野の風も 腥（なまぐさ）く

ぐつと睨んだ 敵空に

星が瞬（またたく）く 二つ三つ

それは全部麻薬ですよ。今考えたらそれは全部麻薬。それ吸ったらバカになる。

終戦間際の経験

終戦間際になって、たこつぼ生活。子供が良いとか何とかで。映画で見たことない？子供がダイナマイト抱えさせられて。私が十二、三歳かな。たこつぼってね、道路に穴を掘って、爆弾を抱えて待ってる。それで戦車が来たら飛び込む。私らは練習だから、(爆弾じゃなくて)砂なんだ。十二キロ。火薬が十二キロ入ってるから。指に爆弾の箱をはめて、たこつぼの中に入って、戦車が来たら戦車の下に飛び込む。ところが、飛び出すのが大変なんだよ。顔のところまで(穴に)入ってるでしょ、それに爆弾が身体に縛ってある。(穴から上がれないから)ビンタを食らって。その練習ばかり。一か月間、たこつぼ生活。でもね、一番困ったのは蚊なんだ。蚊が真っ黒になってたかりますよ。裸になって道路の脇に座ってごらんない。蚊が痒くて(たこつぼに)入ってられん。飛び出したら鬼軍曹にビンタ食らった。本当に戦車が来たときは逃げたよ。戦車が来た時、私らに命令してた鬼軍曹はどこ行ったか分からない。だから私らも逃げた。それで助かった。日本軍は弾も何もないんだから。

終戦時について

終戦になって、日本軍が負けた。だけど今度、フィリピン人に日本軍が悪いことしてますから、フィリピン人が私らに反感を持っていたんです。私ら山の中に逃げてただけど、アメリカ人がそれを分かったから、「よし戦争が終わったぞ、おまえら早く出てこい！」とビラをまいた。「これは嘘だぞ、これにのるなよ！」日本軍はそう言って、私らを外に出さなかった。けど食うものがなくなっちゃったから、それに鉄砲の弾や投げ弾、砲弾や飛行機の音がなくなっちゃったから、確かに戦争は終わったと思っ出てきた。出てきたらアメリカ軍が鉄条網を張って、アメリカ軍の貯水場に私らを監禁してくれた。フィリピン人は日本人に手が出なかった。戦争が終わってから、アメリカ人が私らを助けてくれた。でも終戦になった時、「お前らをフィリピンに一人も残さん。」と言われ、アメリカ人が私らを日本に送った。で、私らはフィリピンに残れなかった。

日本に引き揚げてからの生活は？

日本で私はだいたいじめられた。日本に帰るときは強制送還だから。父親はフィリピンで死んだ。母親の親戚を頼りに、福島県二本松に引揚げたが、生活が苦しいから兄弟はバラバラになった。

日本に帰ってきてから同窓会の話もあった。沖繩の人から手紙を一通もらっただけ。「同窓会、どうですか？」って。四人でフィリピンの同級生と沖繩で。でも、福島から沖繩に行く金がなかった。

ドミニカ移住のきっかけは？

私はドミニカに来る前、ここじゃなくて北米に行きたかった。だから農村建設少年隊に応募した。その時にトンネル工事、そこで絞られた。ここ(ドミニカ共和国)へ来る前の三ヶ月間。一日に四時間。四人で。

北米への募集要項を新聞で見えね。その前に、日本の土地改良の何とかで、土地は地主から小作人の手に渡っているよね。農村建設青年隊で肉体鍛錬(どかた)をして、一番優秀な人からアメリカに渡る。アメリカに行きたいから真面目に一生懸命やっただけ、もういりませんと断られた。季節労働者ですよ。私は二次だったんだけど、一次の人は北米に行った。玉手さん、八巻さんは私の後輩で、北米に行く予定だった。それが中止になったから皆こっち(ドミニカ)に来た。その時のドミニカは募集要項が最高だった。土地は三〇〇タレア、一日の補給金は一人六〇セント。その時に(他の移住地)ブラジルとか何とかありましたけど、補給金はなかった。ブラジル行きは一日二セントです。私らが来るときには、ボリビア・ブラジル・アルゼンチンなど、七カ所あったんですよ。ブラジルは二年間働かにかいかん。その後、自活するか土地をもらうか。ドミニカは明日から自営農、それで飛びつかにやどうする？

行くためには厳しい審査があったが、私は青年隊(農村建設少年隊)に入ってるから、私を落とすわけにはいかないんです。私は北米に行きたくて入ったんだ。ドミニカに行きたくて入ったんじゃない。私はこっち(ドミニカ)に来たくなかったんだけど、北米がパーになったから、「お前悪いけど、ドミニカに行ってくれ」と県庁から頼まれて来たんだ。

どうして北米に行きたかった？

お金ですよ。私らが一日働いて一三〇円くらいでしょ。その時にアメリカで働いたら七ドルでしょ。一ドルが三六〇円。その頃は戦後で食べ物なかった。

移住当時について

第一次です。ダハボン地区。当時二十二歳。それがね、暑い。フィリピンも暑かったから、そう苦にはならなかったけど。蚊！これはへー(苦労)したもん。何もないでしょ。私たちの移住地は電気がなかったのよ。当時の海協連支部長、横田一太郎。覚えてますよ、喧嘩ばかりしよったから。一番最初に聞いたのは、「ドミニカに電気、水道がついてると、募集要項に入ってたよ。どこに電気があるんですか？」そしたら、「お前の家の中に、豆ランプ、油のやつ、あれが二つあっただろうが。それ

がドミニカの電気や！」って言いましたよ。「お前、逃げやがったな！」って。だけどね、あの人(横田一太郎)くらい苦労した人いないよ。一緒に歩いたからわかりますよ、よくやってくれたよ。ところが、配分の土地がないんだよ。募集要項の土地の三分の一の配分を受けただけです。それが三十五タレア。ドミニカの農法で、そうなってるんだって。日本人にはどこから三〇〇タレアが出てきたかも分からない。それで水がないんだもん。大きなカナルを掘ってきて。でも、水がないから水が流れないんだよ。少しの水が来ると、食水分しかない。それで横田一太郎は苦労したね。私ら一次。二次はコンスタンサ、ハラバコア。そして第四次がまたダハボン。第五次がネイバ、ドウベルへ、アグアネグラ。

農業について

私らがここに来てから、農業ですよ。日本人は、どんなことをしても米を作る。だけど水が足りないの。水田用の水がないんです。だから今度は畑作用、水田じゃなく。そしたら今度は雨で水をかぶって枯れちゃう。洪水で、流されたんじゃないけど、水が溜まっちゃってね。一週間でトマト腐っちゃって売り物にならない。だから、井上さんて人がバルセロ会社に行つて、一番最初は鍋にトマトを入れて、ケチャップを作った。

一番の苦労は？

水です。毎日水で喧嘩だ。仕事がないから文句言いながら土地を探しよったんだ。ここはどうだ、あそこはどうだと。今度の問題は、「土地はないから、お金を貸してやるから、自分で好きなところを買いなさい。」と言われた。くれるじゃない、貸すだ。それでダハボンの日本人会長の斎藤さんが、「横田、あんまり移住者をいじめんな。私らの募集要項は三〇〇タレアだ。金を借りて返せとは何だ！」と言って、斎藤さんは「借りるなよ！」と、移住者に言い続けたが、今すぐ飯が食えないんだから、融資を受けるしかない、借りるしかないんだよ。金を借りても何で食う？ 私らの募集要項は無償で三〇〇タレア。だから斎藤さんみたいに、受けたら負けるぞって言ったけど、受けなきゃ食えないでしょ。それで皆負けちゃった。どんどん借りて、今でも私は(借金払ってますよ。借金地獄を俺言ったのよ。ドル建て peso 払い。土地があつたら払うんだよ、無いから苦



労してるんだよ。無いから融資で借りるなんて冗談じゃない。

日々の生活は？

畑したり、いろんなことして。水の喧嘩とかして。配水管とかあるけど、ドミニカでの移住者は日本人が最後だから、水全部取られて。そのうち私は畑仕事で自分の足が腐っちゃった。

足が腐ったとは？

田んぼよ。水田でしょ。ドブ地と乾燥地と、水につけたり乾いたりしたら悪いみたい。なんだか知らないけど両足にブツブツが出てきて、お医者さんに行ったんだ。日本の婦人科、一戸、アレがこのダハボンの医者だった。「ちよつと見てもらいたい」と言ったら、「は？これで痛いですか？」と言われた。「何だってお前、痛いとは何だ？痛いから来るんじゃないのか！痛くなきゃお前みたいなバカものところに来るか！」と喧嘩になった。痛かったですよ。土踏まずにポコポコ穴が空いている。腐った水か、何かの菌かあったはずだ。同じ水田に入っけていても出ない人は出ない。

治らず歩けないでいたら、マンサニージョ(地名)に漁業移民が来られて、その中の福德という移住者が、「その足じゃあ畑にはいけないだろう、私のところに来い。」と言って、マンサニージョに連れて行ってくれた。それで、その人と一緒に、魚釣り始めて。足が治って、だけど福德さんは日本に帰っちゃったんだよ。ドミニカでは漁業で成功できないって。漁業移民は集団帰国した。福德さんの帰国後、漁師をやめて斎藤さんのところへ行って、運転手から何から、何でもやって生き延びた。二十三歳だった。

ダハボンで、私らに配分されたところに、日本人が集団で帰った後、(その土地を)買ったのよ。それで、今度は働きに出てる間、義視(弟)にその土地を任せていたら、義視がその土地を売っちゃったのよ、全部。俺がダハボンに戻ったら土地がないから、「俺らの土地どこいったんだ？」と聞いたたら、義視が「(兄貴が)捨てたんだ。」って言うから、「俺は、捨てたんじゃないよ。ここに皆でおったって食えないから、俺は別に仕事を探すと言って出たんだ。お前何やってんだ！」って言ったんだ。そこにいる娘っ子に惚れちゃって。(義視は)何にも、仕事したこと見たことないもん。



その後の生活は？

横田一太郎が、「お前らが土地土地土地言うから、お前の名前はアグアネグラ(地名)につけてるぞ(アグアネグラに土地を確保した)。文句言うなら向こう行って言え。」と言われて、一年とちよつとアグアネグラにおったよ、一人で。一五〇タレア。広いよ。だけど何も無い。苦労したつたら、苦労した。土地をもらってね、一番先に私が質問したのは、何故コーヒー園なのか、「私は、日本は良く分からないけど、なぜコーヒー園で募集をしたのですか？」と聞いたんだ。そしたら、「お前の配分を受けたところにコーヒーは生えてないのか？」と言われて、「二〜三本生えてますよ」と答えると、「立派なコーヒー園じゃないか！」と言われた。だけど雨も降らないし、何も無いし。私らの土地とドミニカ人の土地と混ぜてるんだよ。だから、おられんくなるんだよ。

また斎藤さんのところに戻ってきて、Aron(米)組合に入つて米を作りよつただけど、洪水で流されて。斎藤さんは金が入つてこなくて、皆融資を受けたけど、斎藤さんは断つたし。

次の仕事は？

当時、日本から肥料が船で一艘分、港に投げてつた。それが日本の初めての無償援助。だけどどうする？畑がないだ。だから港に肥料がどつさり。そこから運ぶのは自分たち。それを山下つていう頭のいい人が、サンファンに大きな牧場を見つけて、「国分、お前も行こう。」と言つて、中平さんと三人でサンファンに入ったんだ。その牧場の大きな倉庫に肥料をぶち込んだ。肥料で倉庫いっぱいになりましたよ、船に一艘分ですから。コンスタンサとか、日本人がいるところに配つた。あちこち走つて倉庫を見つけて。倉庫がないと持つて行けないでしょ。

そのうち、倉庫の地主が、日本人が欲しいとか何とかで、私らの所で働いてくれて。それで私と中平さんはサンファンに残つた。中平さんは小作人。私は倉庫の地主の雇い人に入った。

サンファンで暮らした期間は？

二十年。ダハボンで三年か四年おつて。サンファンで牧場を二十年間やつて、やめざるを得なくなつちやつたのは、牛乳を出る牛が三〇〇頭、出ないやつが三〇〇頭くらいおつたんです。それが病気でバッタバタバッタバタと死んで。危ないですよ。病氣。一日に十頭ずつくらい死んでごらん。穴掘つて埋めたんだ。どんどん死にだしたから、売りに出したけど誰も買う人はい

ない。地主は農業技師だったんだけど、そこを処分して、私ら捨てられた。それで私はサントドミンゴ出るか、アスアに出るか考えて、アスアに出た。

なぜアスアに？

近いからですよ、サンファンから。それでJICAから土地の購入金は出してもらえたけど、植え付け資金は出てこなかった。それで私が考えたのは、販売業をしようと思った。家を買えなかったから、そのお金を店の土地購入金に回した。店を買うのはお金が出るから。漁師は、明日からお金が入ってきますもんね。畑は(作物が出来るまで)半年入ってこない。それで私が考えたのは、漁師をやって、家を買って、ここに販売所を作って、毎日魚捕って、ここで売ればいいと。だから、一二〇〇ドル借りて、土地購入資金で私の漁業が始まった。

海協連(現在のJICA)の次長が、「ここをお前何すんだ？」と言うから、「漁師やります。だから、金網から何から全部作ったんだ。魚を売るために。」と答えたなら、「ずるいぞ。」と言ってきた。「ずるいんじゃないんだ、俺の頭ではそれしか考えられないんだ、土地はもらってきても水は来ないわ、乾し上がった土地で何する？」と答えた。農地を買っても、水道代から何から全部払わにゃいかん。この土地を買っても。

漁師の暮らしは？

アスアに来たのは、一九九三年。漁師になる証明を海軍からもらって。ドミニカの漁業許可書。まあ、魚が捕れたよー。あんまり調子が良すぎたんです。一番先に網を買ったの。大きいのと小さいの。どれが良いか分からんから一つずつ買ってた。一枚がね三〇〇mかな。大きいでしょ。何枚買ったかは分からん。

でもね、ある日、網に魚がかかりすぎて、魚が全部腐っちゃった。もったいないけど(網から)外れんもん。人夫(使用人)と三人で外したけど、一日じゃ外しきれんから、三日間豚箱入った。海軍に抑えられた。魚が腐っちゃって捨てるところがないんだよ。網が大きすぎたのか、魚が多すぎたのか、一日で外しきれなかった。海軍に「これどうする？」って聞かれたのよ。私らは「仕方ないから海に捨てます。」って、海に捨てたから、海が腐っちゃった。それで三日間豚箱。

だけど、上手いかわからないのは、(私は)商売を知らないんだよ。そのうち大きな台風でみんな(漁具を)持ってかれちゃった。全滅。漁業始めてから台風までは二年ないだろう。網も全部、船も二艘ともどこか行った。台風が来なきゃ今頃大地主ですよ。

それで、その金(借金を払えよと。そのうち JICA が裁判になりたくないから金を出して、貸して、皆借りた。(二〇〇〇年、融資を受けなかったドミニカ移住者が、日本政府に対し損害賠償を求めて提訴)。俺らみたいなバカ正直は…。その時、借りるだけ借りてれば良かった。誰も返さないんだから。「払えません。」そんで終わり。

借りた一二〇〇ドル。元は小さいの借りたけど、差し引かれて、積もり積もって。今でも私は(借金を払ってますよ。

日本に対して思うことは？

私はね、日本を恨んだ事は一度もありません。恨んだってどうする、どうにかかりますか？ 誰も助けてくれませんよ。全部自分で決めた、私が選んだ。全部自分の責任ですよ。人生に悔いはないね。



国分儀法様は、二〇二五年五月十三日、九三歳で逝去されました。
ここに謹んで哀悼の意を表し、心よりご冥福をお祈り申し上げます。





～井ロシズ様～



二〇二三年四月四日・二十一日、七月二十二日 取材

井口シズ

一九三二年十二月十八日

長崎県の五島列島に生まれる

一九五〇年

(十七歳)

井口義春と結婚

一九五〇年八月十一日

(十七歳)

長男 義博生まれる

一九五二年六月二日

(十九歳)

長女 眞弓生まれる

一九五七年三月八日

(二十五歳)

実母、夫、子供、弟二人、合計七名でダハボン第四次にて入植する

一九五七年六月十六日

(二十五歳)

次女 三津枝生まれる

井口シズ様は、私の本当の祖母のように、いつも優しく見守ってくださいました。私がドミニカ共和国に来て間もない頃、不安な日々を送っていた時、「あなたの笑顔はとても素敵。あなたの笑顔を見るのをいつも楽しみにしているんですよ。」と、手を握って仰っていただき、とても嬉しく、不安が一気に晴れたことを今でも鮮明に覚えています。シズ様の生きる姿勢から、日本人の本質とは何か、誇りとは何かを学ばせていただきました。シズ様は私の憧れでもあり、人生のお手本です。

「自分が出来ることは自分です」と、重い荷物もご自身で持たれる凛とした佇まいは「己を律する」お姿そのものです。如何なる困難も受け入れ、他責思考にならず、全て自分事として捉え、様々な教訓からご自身の指針を形成されてこられたのだと、取材を通して感じました。戦前からドミニカ移住にかけて、度重なるご苦勞を乗り越え生き抜かれた気骨の精神は、日本を代表する女性像であると思います。



お生まれは？

一九三二年の、母が言うにはクリスマス一週間前に生まれたって、十二月十八日に生まれたって。籍は明けて一月十八日に入って。戸籍上は一月十八日になっているんです。五島に住んどったから、父がね遠洋漁業の船に乗ったわけなんです。だから父が帰ってくるまで、子供が生まれても籍を入れなかったって言うのね。母がいつもね、クリスマスの一週間前に生まれたって。お誕生日は一月にお祝いします。満九十一歳に今年はなっただんですよ。

ご出身は？

生まれは長崎県五島列島です。五島の方の学校に一週間くらい行ったかな、それで七歳の時に引越してね、だから五島の方は生まれたってだけで、殆ど記憶にありません。ふる里とは思ってないわね。恋しいとも思わない。やはり豊津（福岡県）が私たちのふる里ですよ。島の方は色々不自由があったでしょう、私の母方のおじいさんおばあさんになる人とか兄弟になる人がそこ（豊津）におったんですよね。それで、母が来たかったから来たんじゃないでしょうか。子供だったから詳しいことは分からない。

引越してきてから一年くらいで父が高血圧で亡くなったんですよ。数え年で四十九歳と言っていましたね。一番下の弟は生まれて十二日しか経っていませんでした。私は下に二人弟がいました。私も父の記憶は少ししか残っていません、写真はありません。家も貧しかったですし。母に言わせると写真はあっただけで言うんですよ、でも上の姉たちがいたずらして破っていました（笑）。

ご兄弟は？

私たちは五人兄弟なんですよ、生きてるのが。生まれたのは七人生まれたらしいんですよ。一番上の姉は三歳か四歳の誕生日の時に亡くなってるね、長男になる兄が生まれて、長男次男っておってね、長女、次女、私が三女ですよ、生きてるのが。だから四女になるんですよ。そして、私のすぐ下の弟が満一歳で亡くなって。かすかに記憶にあります。そしてまたそれから、男の子男の子ってね。だから私と弟は五歳年が空いているんです。一番下の弟とは七歳違いね。私たち貧しかったですけどね、昔はやっぱ兄弟喧嘩もするし、また仲良くしてね、上の子は下の子を可愛がってね、そうして育ちましたよね。

お姉様について

次女がお腹に入ってこつち(ドミニカ共和国)にきて、ここで生まれて。この子が生まれたときは、ものすごく苦労して。姉が日本から粉ミルクとか、着物や浴衣、色んなものを送ってくれましたよ。姉が私をとつても可愛がつてくれてね。私、母以上に姉を慕っていたんです。姉は福岡の田川、炭鉱地帯です。麻生さんのセメント会社に兄さんが務めとつてね、そこにいたんです。でも姉も決して豊かな生活ではなかったです。自分でギリギリいっぱいだったけど、昔の人はやっぱり始末をしたでしょ、今はテレビで貧乏人とか言うて出るけど、私たちにとつたら貧乏人じゃないですよ。今の人はね。

幼少時代の生活については？

母は苦労しましたよね、父がいなかったからね。それで上の人は仕事ができるようになったら、皆家を離れて行って、家に仕送りなんかをして、私から下は、あんまり外に出ないですよ。母は田舎もんやから仕事なんか出来ませんからね、農業しよつたですよ。農家つて言ったつて、食べ物を作るだけね、田んぼを持っていなかったからね、畑の方だったからね。だからきびとか芋とかそういうものを沢山作りましたよ。お米は買うんですよ、やっぱり主食はお米になるんですけど。お芋やカボチャなんかを作って売って、それでお米をかうんです。それが戦争前。

街全体では大金持ちの人もいっぱいいましたよ。大抵生活が豊かな人が多かったですよ。でも、私たちみたいな人もおつたわけなんです。だから、小さいときにね、自分が特に器量が悪かったけど、大人になつてから従兄同士で私が一番器量が悪いつて事に気が付いたの。でも小さいときは、自分が特別貧乏だとか、器量が悪いなんてこと気にかからなかった。大きくなつたらね、「あ、自分たちは貧乏だったな」と。まあ、貧乏つてのは小さいときから分かつたけど、自分が器量悪いつて事は分からなかった。一つも恥ずかしいとも何とも思つてなかった。大人になつてから、あら、私が親戚中で一番器量悪い女やつたなど分かつたの。どうしてうちの母はもつといい器量に生んでくれなかったんかなくと(笑)。長男が二三年前にうちに来たときにね、「ママはどうして俺をもつと良い器量に生んでくれなかったの？」と言うので、「ああ、あなたもそう思つてるの？私もそう思つてる。」と笑つた。皆、自分の頭とか器量とか、大人になると分かるんですよ。自分がどのくらいか程度なのか。今こうしてね、年をとつて死ぬ間近になつたから、自分の器量までもね、こうして笑えるようになったんですよ(笑)。

戦争後の生活は？

戦後は何もなかった。戦争しようというてから、日本の国は武器ばかり作って、国民そっちのけですよね。それで私たちの住んでるところは田舎だったから、道なんかも舗装してなかったし、雨が降ると土がべたついて。そういう所やったですよ。今、日本に帰るとちゃんと全部舗装されてね、見違えるようになってるわね。

日本の学校は？

日本の一番始めの国語の教科書は「さくらさくら」というのから始まりました。国語、算数、習字、そろばんは四年生くらいから。音楽とかね。上のものが学校卒業したら、もう中学なんかも行かなくて、仕事について金銭的に手伝いをしたわけなんですよね。よそに仕事に行かなかったのは、私から下(の兄弟)だけが行かなかったの。中学に行かない人のために尋常科ってのがあって、そこを卒業したらもう仕事に出て、金銭的な援助をしたんです。尋常科は、中学校の試験に落ちた人だとか、家庭が貧しくて行けない人は高等科っていつて一年二年行つて勉強するんです。私なんか貧乏やったんです。

ご主人のご実家は？

主人の方(実家)は大きいってこともないんだけど、私の家に比べたら大きい農家でした。福岡。私は豊津町でしたけど。主人の方は築上郡築城町っていうところでした。(築上町と豊津町は)離れてるんです。歩くと一時間くらいかかりましたよ。そこに私は嫁に行ったわけですよ。私の方は百姓じゃなかったのね。うちの母が「七人も子供おるけど、シズがひとり百姓に行つた」って言つて、私を可哀想だといつも心配してたんですよ。

ご結婚のきっかけは？

私は五島の生まれ、主人の方も五島の出身。そして主人の方、井口のお父さんと、うちの父が同じ(漁)船に乗ってたの、五島で。それで、五島におるときから、自分のところには上から三人男の子がおる。大瀬良(シズ様の旧姓)の方は女の子が三人おる。ちょうど似合ひだつて。だからどうしても大瀬良の方から嫁さんもらいたつて井口のお父さんがいつも言つとつたらしい。主人の方は、長男、次男、三男つておつて、姉さんがおつて、うちの主人になるわけね。妹がおつて、弟がおつて、七人兄弟。

兄さん三人とも戦死。第二次世界大戦で戦死したの。三人ともね。それで、上の男の子三人とも(戦争で)亡くなったから、今度うちの姉たちは(年齢が)合わんようになったんですよ。それでお父さん(義父)が、よそはみんな戦争が止んで、帰って来て嫁さんもらうって。俺のそこはそんなことできないって、三人とも息子は死んでしもうたってね。(年齢が)合うのは私と主人だけになった。それで、四男にはよ嫁さんもらいたっていうので、私が選ばれて。だから私が見込まれたってわけなんですよ。私は満十七歳で結婚したんです。主人が十八歳でした。私たちはカトリックですから、生まれながら。主人の方もカトリック。五島じゃカトリックが多いですからね。カトリックはカトリック同士でないと結婚ができなかった。その頃はね。今は私、娘や息子が誰と結婚しようと構わないねえ。でもね、昔の人はそういうことにこだわりよったですよ。今から七十年も七十五年も前のことですからね。

教会や信仰について

新田原っていうところに教会があったんです。日曜になると歩いて一時間くらいかかって、皆してしんどいところ(遠い教会に)行ってたんですよ。そしたら、途中でいじめられたんですよ。カトリックっていうので。カトリックのお祈りにアーメンってありますよね。そうするとね、「アーメン、ソーメン、ヒヤソーメン」ってね。それで石を投げられたりして、いじめの対象になつとつたんですよ。私その時つくづくね、恨めしかった。日本にも宗教があるのに、親はどうしてこんな宗教に入って、私がいじめられなきゃいけないのか。だからね、今でも信仰してません。私は言うの「元気な時は宗教はいらない。死んだとき、お葬式の時だけ」と。

主人の家はものすごい信仰心の家でね、朝起きてもお祈りする、夜寝る前もお祈りする、ご飯を食べる前にも、ご飯を食べた後にもお祈りするね。簡単なお祈りですよ、食前、食後っていうのはね。でも夜寝る前なんかは、かなりのお祈りするのでね。大百姓じゃなかったけど、ちよつとした財産をもつて嫁いできたの。それで、嫁にいったはいいけど、今度はものすごい田舎です。みんな働きものやつたですよ。うちの主人は田植えるのにちやっちやっちやつと速いんです。私なんか初めて田植えるんですから、あんまりできなかった。それで夜中まで仕事する。収穫時期になったら、夜の九時十時までは仕事するのね。そうするとクタクタなんですよ。それでお風呂に入つて夕ご飯食べて寝る前にまたお祈りする。私、そのお祈りをしたくなくて、早く寝たくて、それでもしようがないでしょう、嫁の立場というのね。それで私はまた、カトリックが嫌いにな。

宗教はどんな宗教でも同じね。私は言うの、信仰なんてしなくてもね、自分がまつすぐにね、悪いことしないでね、嘘もつか

なくて。私の母がいつも「嘘は泥棒よりも悪い」って私たちに教えたの。泥棒は自分のものを盗られんようにしとったらいい。でも嘘は用心のしようがないって。嘘つかれたらね、これ本当だろうか、嘘だろうかって迷わないけんってね。嘘は見抜けん。私は嘘を絶対につかないんですよ。だからあまり信仰しない。教会にも行ってない。ドミニカ人は嘘をついても悪いこととしてヘラッとして教会に行くんです。ドミニカ人は嘘をいっぱいついて人の物を盗んでも信仰だけはしてる。だから私言ったのよね、「中南米の人とか西洋人は、だいたいにおいて神のために悪いことしない。日本人は恥のために悪いことしない」って。それでも、死んだときに宗教がいるんですよ。うちは主人が死んだときカトリックのお葬式をしました。うちの孫たちはドミニカ人と結婚してる。孫たちの家族がお葬式に来る。だからカトリックで良い。私が死んだときもカトリックにしてくれって言ってます。

お母様のお葬式は教会で？

もちろん、日本にいるときに亡くなったからね。うちの家族はみんなそうです。特に主人の方は、生まれながらの何代も続いたカトリックです。日本にカトリックが入った時(戦国時代)の終わり頃ですよ。あの時からずっとカトリック。うちの母の話によると、私にとってはひいおじいさんになる人はね、クリシタン攻めっていうので死んだそうです。武士の子孫だったってね。それでその時に迫害されて死んで。それから武士がなくなっって、私たちは平民になったんだって。

ひいおじいさんはどんな方？

ものすごくできた人で、昔の人でもちゃんとした字が書けたし、武士の家に生まれたんだからね。その時結婚しとってね、私たちの祖母になる人と、もう一人女の子が生まれとった。それでひいおじいさんが死んだから、私たちのひいおばあさんが、また別の人と結婚して、そのあとに子どもが何人かできたんです。ひいおじいさんの名字は山下。そして、ひいおばあさんが再婚したもんだから、肥喜里になった。で、そのひいおばあさんはものすごい美人だったらしいね。ひいおばあさんは産婆さんだったみたい。そしてうちの母は、私のおじいちゃん(トヨキチ)に似ていたので、ひいおばあさんが、「お前はトヨキチ似てものすごく可愛い」って、母を可愛がって育てたって。産婆さんやからあっちこっち行っって、色んなお土産もらっってきて、いつも食べさせてもらっただって。顔がおかしかったても、自分の息子に似たから可愛かったんでしょね。そしたら今度は私が母に似て(笑)。

母はね、父がちよつと顔が良かったから、「子供たちは誰もお父さんに適うものはおらん」と、いつも言っただんですよ。「そ

りやあんに似てるからね！」って私は言ったんです（笑）。

とても明るい家庭ですね。

明るいことはなかったんですけどね。今だからこうして笑ってられるんですよ。昔は悲しいことばかりだったですよ。今やっとうして話せるようになったんですよ。自分の器量のいい悪いも、死ぬ間際になってからどうしますか？って、もう構わないですよ。

苦労したことは？

長女が生まれる時、ちょうど六月、麦なんかの収穫の時期ですよ。私もう産月に入っているわけですから、里の母が手伝いに来たんです。長男の時はお腹が痛くて産んだのね。今回は腰がものすごい痛い。腰が痛くなるとしゃがんで休んで、仕事を休んでそうするとまた治まったり、また痛んだり。母がそれを見て、「これはだめだ、大変なことになった。ほらお父さんお母さん呼んで！」って。産月でも仕事しましたよ。忙しいからね。母が私をものごくかわいそうだって、そんな身重で働かされてね。兄弟で農業をしているのはお前ひとりだけだった。母が手伝いに来てなかったら、畑の中に子供を産み落としていた。

長男も産月まで働いたけど安産やった。長女の時はなかなか下りてこなくて。難産だったの。促進剤っていうの二回打った。ちよつと覗いた時に産婆さんがパツと引き出したけどね、真っ青になって全然泣かないの。もう息も無いっていうのね、管を口に入れて、ふーと息を吹き込みますよね。そして今度はパンパンと叩く。それでも泣かない。でも息だけはするようになった。そして夜中の十二時頃やっとな声「ぎゃあ」と泣いたんです。産んでから五時間ぐらい。こんなして長女が生まれたんですよ。

移住をしようと考えたきっかけは？

十七歳で嫁いで、もう井口の畑とか、ご両親の手伝いをしたの。それで初めは一緒にやってたらね、井口のお父さんが戦後の成金になってちよつとお金ができて、それで大きな家を建てたんですよ。ただ、それを仕上げるお金がなくなって、仕上がりないで家だけ出来て、それで私たちがもらって、畑の方の田んぼも分けてもらって。まあ一緒にいる時は、お父さんお母さんが、「建てかけた家やから早よ仕上げよ。」っていつも言うのよ。二階建ての豪勢な家をね。色々プレッシャーがかかるわけなんですよ。でも、私がどうしても耐えきれなくて。それで、姉がね、福岡県の佐川郡の（政治家の）麻生財閥のセメント会社で働い

てるっていうの、それで私もサラリーマン生活に憧れたんですよ。それにしようと思ったら、その時、終戦後で就職難の時ですよ、いっぱい引揚げの人も来て、仕事があっても就職先がなくて、じゃあ別の土地で新しい生活してみようって思って、ドミニカに行こうかと。ドミニカに住むこと、私が進んでっていうこともないけど。うちの主人が言うにはね、井口のお父さんも、若い時にブラジル学校に行きたかったみたいで。だから、「構わん、行ってこい」って。だからこつちに来てからもね、ちよつとしたものを送ってくれたりしましたよ。

移住時の状況は？

三月八日にドミニカについてたんですよね。当時年齢が、私は二十五歳でした。主人が二十六歳。長男が今度から学校に入るっていうのを連れてきたんですから六歳でした。長女は四歳。それで次女が私のお腹に入ってきたんですよ。

ダハボンについて生活が始まったんですけどね、まあ皆さんがおっしゃってるように、そりやもう大変なところでしたよね。配分される土地は三〇〇タレアね、水も豊富にあるって言うのですね。でもね、もらったのは一時配分で六〇タレア。

私ね、日本で一筆した紙を長いこと持ってたんですけどね。まあ契約書でもないけど、ほら「三〇〇タレアのうち、半分一五〇タレアは開墾してやるってね。あとは自分たちで開墾するように。」ってことを書いて。裁判を起こすために視察に来た人たちが、「誰かその契約書の紙を持ってませんか？」って。誰も持っている人がいなくて。私持ってた、その人たちがちよつと見せてくれて言うんで渡したら、そのままになったんです。

配分地の状況は？

ダハボンの街から家まで四キロか五キロぐらいじゃないかな。私たちの配分地は国道沿いやったけど、玉出さんとか山木さんとか谷岡さんとか、このずつとまた奥の方だったんですよ。私たちから見ると少し丘になって、ものすごく劣悪なところだね。配分地の一番手前が杉山さん、次に川路さんね、それからうちやったんです。それでドミニカ人の土地、田んぼがあったからね。だから、そこにカナル（水路）があったの。でも水がこない日とか多いですよ。国道沿いがもらった配分地のうちで一番良かったです。奥の方なんか水は全然行かないのね。何にも育てられないですね。

私は家から（畑に）来るのがものすごく遠いから、畑の近くに粗末な小屋みたいなものを建てて、そこに住み込みで仕事してきました。一日使う水をコンクリートに貯めて、それで暮らしたんです。朝早くきれいなうちに取って、昼になるとみんな洗濯

なんかするわけですから、汚れちゃった水とかも畑で使うことがあります。ダハボンの街の現地人なんかは水路があるわけですからね。この街々の道路沿いに沢山土地を持つとして、ポツンポツンとドミニカ人の家があったんですよ。この人たちが使うわけなんですよ。

ちよつと丘になって低いところは、水が溜まってもう沼地みたいな所があったんですよ。それはどうしてかっていうと、みんなが上で使った水がね、全部下にいくでしょ。だから沼みたいになってるんですよ。溝になってね。だからこの土地でベタついてね。そこはもうほんと悪い。水もないね。とにかく全部悪いんですから。

私の土地はね、真ん中に石山があったんです。で、この石山の裏側は沼地で、もう(作物が)作れる土地じゃないの。四六時中いつも常時水が溜まっているの。六〇タレアの内ですよ、それ全部。地としては土の粘土質。(作物が)できる時もあるし、できない時もあるしね。だから田んぼも、たまに雨が降ったり、たまに水が来たりするから、草が生えるわけなんですよね。草を鋤で掻くわけ、田んぼの中を。そうすると埃がパーと立ってね。そんな状態でしたよ。

それで今度はね、二次配分地っていうのでね、二〇タレアもらったんですよ。奥の方に大きな沼があつて、きれいな水が溜まってました。その沼の近くだったんですけど、雨が降るとみんな水に浸かるんです。だから一作落花生、あれを作りました。それでね、この裏側にね、ドミニカ人の土地と田んぼがあつてね、年を取ったおじいさんが仕事ができなくてね、(田んぼを)荒らかしとつたわけ。それを貸すと言うのよ。それをね、借りたんですよ、私たち。それで、その田んぼを綺麗に整地してね、綺麗に畦なんかも作って、それでお米ができました。一回でね。今度はお米作つたから、おじいさんの息子たちが(土地を)返せっていうの。ドミニカ人はそんなんですよ。



(上段左) 井口義春様/大瀬良勲様/井ロシズ様/大瀬良啓子様/大瀬良正夫様
(中央) 大瀬良キノ様/大瀬良さとみ様/井口義博様
(下段) 左井口眞弓様/大瀬良幸恵様/井口三津枝様

ダハボンで生活を始められた当時の様子は？

うちの弟と母はね、もうここにおられないからね、ここじゃみんなが生活できないからって、アルタグラシアの方にきました。もう既にアルタグラシアに日本から移民が入ってきてた。そのタイミングで、第二人とうちの母が行って。私たち親子は残ってね。ここに田んぼを借りた時は、長男がもう学校も行ってたからね。

その頃、次女は早産で生まれたんですよ、無理したもんですから。本当は八月九月に産まれる予定だったのね。でもお腹が痛くて六月に生まれたんです。妊娠八ヶ月でね。生まれた時はほんとに小さくて、みんなびっくりしたの。頭の方を心配したけど頭も大丈夫！

ハイチの方からね、お米を食べにちっちゃい小鳥がいっぱい群れになってくる。だから櫓を立てて、長男と長女が一番下の子守りをしながら鳥追いをするわけですよ、櫓の上で。私と主人はその下で仕事をしてね、そうしたもんです。そんな立派な櫓じゃない。子供たちが乗ってね、倒れないぐらいのものを主人が作るんです。昔、日本で農業をやった人はできるんですよ。長男と長女がドミニカの学校に行くでしょ、私は一番下の子を連れて主人と一緒に(畑に)通ってくるんですよ。その時にね、スパゲッティの空の箱をお店からもらって、それを持って行って、その石山に置いて、日本から持ってきたこうもり傘をさして、次女をそこに寝かして。日が照るからね。側にはサボテンが一本あるだけだったの。サボテンじゃ影になりませんからね。それで、こうもり傘を影にして仕事をしたもんですよ。

夕日が沈む頃、私は自転車で帰るんですよ。日本から二輪車持って来とったから。すると長男と長女が、ちゃんと家の掃除をしているんです。その時、七歳と五歳ぐらいですよ。それから夕ご飯の仕度をして。主人は、日が暮れてからリヤカーを馬に引かせ、それに野菜を入れ売りに行くんです。それで帰ってきて、夕ご飯を食べて。そしてまた朝四時頃から起きて洗濯をして、朝ごはんの用意、そしてお弁当を作ってね。四時はまだ暗いですよ。それが癖になってるから、今でも毎朝大体朝四時ぐらいに起きて、まず洗濯をします。

少しづつ子供たちも大きくなってね、長男長女は次女をお守りしながら、三人で櫓の上におるわけです。中間のところ板を敷いて人が座れるようにして、長男と長女が鳥追いしながら下の子の子守りをしてね。そして私と主人は仕事するわけ。

昔は稲を刈るとパンパン叩いてね、棒か何かにつけて落とすんです。葉っぱが入ったのは風で飛ばして綺麗にして、そして今度は袋に入れてそれを括って。それからね、長男が馬に乗せていっぺんずつ家まで運んで乾かして。長男はものすごく気がきいとった。そしてものすごく役に立ちました。今でも優しいですもんね。そのとき長男が八歳ぐらいだったかな。朝は学校行って。

そのうちに、母たちはコーヒー栽培がダメだと言って帰ってきたんですよ。それで、ダハボンの私の家に住むわけです。母が来てからは、母が長女と次女をコロナア(日本移住地)の家で子守りをして、田んぼの小屋には私と主人と長男が。長男はダハボンの学校に通わせたんですよ。それでも、土地が全然使い物にならないっていうので、すぐ骨折った人達は、皆日本に引き揚げたんです。その時、母も帰りました。私たちの土地もダメやったでしょ、だからダハボンを出たんです。それからもう人も言えないような苦勞をして、あっち行ったりこっち行ったり、家移ったのが数えたらきりがなくらいですね。

ダハボンを出た後の生活は？

ダハボンを出てから「Leros 組合(米の組合)」を一次の人と共同で作ったんです。皆がそこに入ったわけでは無いんですけど、うちはそこに入ってたんです。重留さんとか竹中さんとか犬山さんとかね。それで、ラベガに土地を借りて。その時、独裁者のトルヒージョが殺されて、そのトルヒージョの親戚やなんかがある土地やマンションを持って。それでその動乱で未亡人になった人が(その土地を)貸したんですよ。それを借りて、みんなそこで手入れするように組合を作って(ダハボンを)出たんです。その時が一番始め、コロナアを出たのが。その時に、ヒマ・アバホと言うところに移ったの。ラベガの田舎の方です。それから、組合が事業に失敗して、皆で少しずつ借金を被りました。

私がこの組合の仕事に行った時に長男をダハボンの学校の寄宿舎に入れとったわけなんですよ、一緒に連れて行かなくてね。(その時息子は)十歳くらいじゃなかったのかな。長男を(寄宿舎に)入れて、下の二人の娘を連れて組合のところに行きたんですよ。私の上の弟があつた頃ダハボンにおつたから、長男は日曜日なんかになるとおじさんを頼ってここに寝泊まりして行くんです。私とはたまにしか会えない。長男が嫌だと言って(学校を)やめて帰ってきたんです。家は金を出すの大変やけどなんとかするってやってきたけどね。下着は自分で洗う、パパと一緒に仕事するって言うわけなんです。その時は十二、三歳になったのかな。それで私が言うたんですよ、「それで後悔せんのか、それでいいのか、絶対親を恨むことないね?」って。長男だけは、どんなことがあつても、ご飯食べなくても学校に行かせるつもりだった。「いや、自分はもう行かない」って言うんです。その時に私が言いたかつたの、「お金があつたら、首に綱つけてでも連れて行く」って。でも、やっぱり経済苦しいですよ。それで学校辞めたんですよ。

その後、経済面は？

その頃ね、下の弟がまだ結婚してなくて、サントドミンゴの田舎の海の近くにおったんですけど、それからあちこち移ったもんですよ。それで小さい家を作って、土地の地上権を少しだけ買って。チシャ(レタス)を作ってたね。

そのうちに、お菓子のポン菓子機を母から送ってもらって。でも、私はそれを使わなくて、ラベガの上の弟が使ったと思う。またサントドミンゴに引っ越してきて、海岸通りに家を借りて。マレコン(海岸)のちよつと中に入って、ちよつと歩けば海岸というところに借りて。そこでおこし(ポン菓子)を作るんですよ。コメを膨らかして。その時おこしでかなり儲けたんです。それで土地を少し土地だけを買ったんですよ。そこで私がチシャを作りながら、おこしをしたのね。長男と弟、現地人を三人か四人雇ってね。その時おこしがものすごく売れて、それでちよつとお金が儲かったんです。そんなことから少しづつ(生活が)落ち着きましたよ。

その年、ドミニカ政府がね、工業地帯の中に家をいっぱい建てて、裁縫や色々なことをさせるようになったのね。その地帯に(自宅)入って、土地を使うからって政府からお金が出て。それでまた同じサントドミンゴ市内のビジャバスケットというところに移ったの。そこでチシャを作ったんですよ。そこに、また土地を買ったんです。そこから本当に自分の土地。少しですけどね。チシャ作りにはたくさん土地はいらなわけなんです。少しの土地でたくさんできるもんですから。その頃から、あんまりお金には不自由しないようになりました。あつちこつち、ラベガの方、組合ね、その時には苦労しました。お金が回りませんでした。本当に苦労しました。食べるものとかは何とかね。それで自分で、おこし作りやらするようになってからは、あんまり苦労しませんでした、お金にはね。貯めるお金はそんなにありませんよ。でも、いくらか少しづつは残りましたよ。その頃に娘をアメリカに留学させたんですよ。下の娘をね。ポン菓子を作るのはやめました。チシャだけで。

中国野菜の輸出業について

そうこうするうちに、ラベガの方が中国人の野菜を作ってアメリカに輸出する商売を始めたんです。それで、ラベガにおった弟が真似してね。「俺たちも兄弟でやろうじゃないか」というようになって。うちの長男を私が夜の英語の学校にやりよったんですよ。だから「お前ね、少し英語があるんだからニューヨークに行ってこい。中国人に話して来い」って長男が弟に言われて。昔の人は勇気があったんですよ。初めてニューヨークに行くんですよ、一人だね。誰も知らないんですよ。

長男は中国人と話を付けてきて。今の人はそんなことできませんよ。その時、もう長男すでに結婚してたから、二十四歳で結

婚したからね。二十五、六歳くらいにはなつとったわけですよ。行ってきて、話付けてきて、それから輸出の仕事を始めたんです。弟二人と、うちと息子と、四軒でね。弟たちは子どもがおつて学校があつたから、弟と長男はサントドミンゴに住んだ。私たちはあつちこち行って野菜を作ったんですよ。その輸出をしてる時に、お金が少しづつ貯まってね、その時に少し生活が楽になって。そしてラベガに今度は大きな土地を買って、そこで野菜を作つとったわけです。そして私たちがあちこちに回つて土地を借りて、野菜の輸出を地方で作つてね、キャピタル(首都：サントドミンゴ)に送り込んだり、ラベガにも大きな土地を買つとつてね。長男と私が共同で四〇〇タレア持つとつたの。そして弟が別に二〇〇タレアをラベガに持つとつたのね。それで野菜を作つとつたんだけど、野菜に虫や菌がいたりして、ダメになってね。それでアメリカへ輸出が中止になったんですよ。それからプラタノ(食用バナナ)を作つて。ドミニカ人の主食ですから、よく売れるんですよ。ドミニカの一番の主食ですからねえ。同じ土地に作つたの。そして主人が病気になって。仕事ができなくなったから、その土地をドミニカ人に貸しとつたの。ここ(首都)に移つてきた時、二十年くらい前に売りました。確か主人は、一九九六年に病気になつたと思う。高血圧で倒れたんです。脳溢血で。それでね、ちよつと貯金しとつたから、それをもとにして、これ(家)買つとつたんだから。そして日本語学校の二人の先生に四年間貸したわけですよ。それでその後移つてきた。

サントドミンゴの土地は私が持つとつたでしょ、बीジャ・メジャにね。そこに大きな野菜を冷蔵する施設を作つて。それで移住団の融資をその時受けて、トラックも何台か買いました。そこで野菜を冷やしてから、飛行場に持っていくんです。それで飛行機に積んでアメリカに行くんです。私がサントドミンゴの土地を持つとつたからね。家も建ててましたしね。बीジャ・メジャにね。そして私たちは子どもが大きくなつてもう心配することないからつてアスアで家を買つて、ラベガでも二回家を買つたからね。数えてみると、家を買つただけでも十何回あるね。職業もやつぱり七、八回変えてますよね。私だけじゃない、移住者の半分以上の人はそういう暮らし方をしてたつていうことなんですよね。より良い生活を求めてね。それは苦労しましたよ。私は男以上に働きました。大体ね、ダハボンで女の人が働いたつていうのは犬山の奥さんとか私とか働き頭やつたです。自分で言うのはおかしいけど、本当のことを言うとな。

畑仕事でお身体にご負担は？

昔はなかつたですよ。この頃、使いすぎですよ。私は自分でも男以上に働いたと思つてる。かつこの悪いことばかり。たくましかつたですね。本当いろんなことしたと思う。だからみんな土地が



悪かったから日本に帰ったんですよね。それは日本政府の完全な間違いですよ。

日本に帰らなかった理由は？

私なんかは、家も財産も全部売って来ているわけなんです。帰って住むところもないね。皆んなそうやって来てるんですけど、しようがないから転住したり帰ったりと。私なんか恥ずかしいでしょう。私達は一家族で来ていて、母と弟二人は同伴者で、主人は家長で恥ずかしいから帰れないでしょ、そんな人が残ったと思いますよ。

帰った人たちは恥を知らないっていうわけじゃない。やっぱり困る、どうにもならないからね。だから帰った。帰った人は恥ずかしいけども、そんなこと言っておいても、どうにもならない。私たちは何とかなるって思って残った。その当時、日本に帰ってそれっきりになっている人の方が多い。日本が経済成長でみんな良かったんじゃないですか。だから私が日本に帰った時にね、主人の姉さんも私の姉も「帰ってくれば良かったのに、なんで恥ずかしいかね」と言うたの。でも私の姉は「でもね、あんたもこうしてお金を出して日本に帰ってくるようになったから、やっぱり少しかつたね、これも悪くはないね」と言ってくれたんですよ。

移住当時の時代背景について

もう十年か十五年前か、JICA 職員の方でとってもいい方がいて、その方に言うたんですよ。「私たちがドミニカに来た頃は、日本はちよつと苦しかったけど、東京オリンピックが間もなくあって、そして経済成長に取り掛かった頃ですよ。その頃には日本の上の偉い人たちは、そのうちに経済が良くなってくると分かってたと思う。そんな風になるのに、どうして私達をここに送り込んだか？」と。今度は集団就職の金の卵で言われるしね。ドミニカに来て、五年ぐらいした時はもう経済成長も真っ盛りになったわけですから。それでも、分かっている人は分かってたと思う。それをどうしてこんな事したか、それを思うんですよ。私が日本に帰った時、（経済成長に）びっくりして。この日本に一人でもいいから自分の子どもを残したいと思った。長女と長男は結婚して叶わないけど、下の子だけは残ったから。それで、次女を日本に帰したんですよ。

次女三津枝様は何歳で日本に？

三十歳くらいだったんじゃないかなあ。あの子は二十八歳くらいでアメリカの大学に一年か一年半おったのか、コロンビア大

学に行ったんだっただんですよね。それで帰ってきてからここ(ドミニカ)に勤めとったからね。それで私がどうしてもこの子だけは日本に住ませたいと思つて。

(日本に)行つた頃は、ものすごく寂しかったみたいですね、家族がいないからね。この子(三津枝)は生まれた時から素直な良い子で、あんまり色々言う子じゃなかったからね。でも、寂しかったとは言いましたよね。結婚して子どもが生まれた時もね、ママが近くじゃなかったから悲しかったつて話しましたよね。今はもうそんなことないでしょう。でも私良かったと思つて、あの子だけでも日本の生活をさせられてね。長男もそう言いますよ。「三津枝は運が良かったなあ。日本で暮らせるようになって。」つて。

長男は、日本は良い国だと思つても、自分達が住む国じゃないと思つてるんですよね。やっぱり習慣も違うでしょう。あの子たちは小さいときからドミニカで育つてゐるわけですからね。私たちほどドミニカ人に違和感もないしね。私たちはどうしてもドミニカ人は違和感があつて、日本人同士が付き合ひやすいんですよね、やっぱり。でも、子どもたちになるとドミニカ人の方が付き合ひやすいね。

ご家族との会話はスペイン語？

子供たちになると、ほとんどスペイン語。日本語はあまり分からないね。うちの孫なんかもね、私が言うとなんとか聞き取りますよね。でもあんまり難しいことは分からない。ラベガの姪なんかもそうですよ。私と話すときはたどたどしい日本語で。どつちかつていうとスペイン語が得意ですね。日本語はそんなに分からない。それで聞くことが分かつても言うことが分からないつてことがあるでしょう。うちの長男なんかになると、スペイン語も日本語も両方、どつちも上手に使いますよね。でも、どつちかつていうとスペイン語の会話が多みたいですね。

日本にいる三津枝様とは？

電話のやりとりは日本語でします。あの子は日本語は大体しゃべれますね。ほとんどのことをね。昔は手紙きよつただですけど。でも難しいことになると書けないんですね。

国際結婚についての考えは？

私は子どもたち一人もドミニカ人と結婚させなかった。私くらいの年代の人は、そんな人もおられますね。早くからドミニカ人と結婚した人もおるけどね。特に女の子はドミニカ人にやりたくないってことなんです。ドミニカ人の女性は日本人の男性と結婚したい。日本人の男性は顔が見劣りしますけどね、まじめだからって。ドミニカ人の男性だと、日本人の女性はあまり綺麗じゃないって言うけど、ちよつとどんなにか付き合ってみたっていう感じですよ。それで結婚するでしょ。それでやっぱり大体同じだつてなると思うね。

移住当初は皆がコロンビアに住んどつたからね。自分たちの付き合いのある人と結婚したいでしょ。今はあつちこつちに散らばつて住んでるから、日本人同士が付き合うことはめつたにない。やっぱり周りがドミニカ人と付き合うから、どうしてもドミニカ人と恋愛感情になつて、ドミニカ人と結婚するようになるんですよ。そうすると日本人の男性とドミニカ人の女性が結婚したらうまくいくけど、日本人の女性と、ドミニカ人の男性が結婚したら離婚率が多いです。ドミニカ人の男性は一人の女性じゃ安心しないから。必ず浮気してね、奥さんを変えるんですよ。だからドミニカ人と結婚して、生涯一人の人と死ぬまで一緒になつたつていうのは三分の一もいるか、必ず他に替えてる。日本人も男性はそうしたいところでしょうけど、やっぱり恥つて言うのを多少知つてゐるからね。ドミニカ人は一人の女性だけで、誰も他の女性を連れてないのが恥なんです。ほとんどのことがドミニカでは正反対です。

日本人でも女性を何人も連れてゐる人はおられますよ。ドミニカ人の真似をしてるんですよ。男にとつては男冥利ですよ。ドミニカ人は一人ぐらい女性を連れてないと男の甲斐性がないつていうので恥になる。あの男は一人の女性に満足してるのかつてね。「あれは *pandeyo* (意気地なし) だ。」つてなる。ドミニカでは女性を連れてゐるつていうことは名誉ですよ。でも、甲斐性がない人もしてるの。明日のご飯もない人でもそれをしてる。かえつてね、食べ物もないような、明日の生活もできないような人が多い。それは習慣ですよ。ドミニカ人の男性つていうのは、女性に対しても誰に対しても親切ですもんね。この銀行に行くと、番人がドア開けてくれて、ちゃんと丁寧だね。外国人とか年寄りとかには余計優しくするの。そんなところはドミニカ人の良いところ。でもそれに騙されよつたら大変。普通はそれで付き合いやすい。でも実際家庭で付き合いことになつたら大変ですよ。日本人は恥だからそれをやらない。

昔、本で読んだことがあるのね。強盗とか、人のものを盗むとか、日本人は恥のためにそれをしない。西洋人、東南アジア人、中南米人はね、神様のためにそれをしないの。信仰心が強いですから。神様のために悪いことはしない。その時に「なるほどな

あ、これは本当だなあ」と思いましたね。日本人は恥を知ってるっていうんですね。ドミニカ人は恥を知ってない。

ラ・ルイサーの土地譲渡の話は？

私なんか土地を見に行きましたよ。外務省の移住課長って人がね、「この土地は粘土質で地下水も近くて、もの凄くいい土地ですよ」て。私たちがダハボンで水がなくて「水水」言うから、「地下水が近い」と言ったんですよ。でも、粘土質は最低な土地なんです、硬いんですからね。種をまくと一番先に芽が出るんじゃないで、根が出るんです。その上、地下水が近いと根腐れもするんです。移住課長さんは農業のことをよく知らなかったんでしょう。

その後、外務省の移住部に交渉に行つて、移住部長さんと移住課長さんにお会いした時、移住部長さんがね、「あの土地(ラ・ルイサー)は良い土地だそうですね」って仰るから、「そうじゃないですよ、移住課長さんが来られて、この土地は粘土質で地下水も近い土地だ、と言いましたよ」と言ったら、移住課長さんが「いや、私はそんなこと言っていない！」と、目の前で真つ赤な嘘をついたんです。最初の移住のあった頃からもう五〇年近く経っているのに、全く体質は変わっていないね。

その時に、移住部長さんがね、「お願いですからどうしても土地をもらって下さい」って言うんですよ。私、その時ね、「それしたらね、私を移住当時の若さに返してください。それなら土地を貰いますよ」と言いました。それなら、移住部長さんが「それは出来ません」と言うから、「そうですか、それなら私も土地を貰うわけにはいきません。お互い出来ないことがあるんですよ」私はそう言いました。

ドミニカ移住問題の裁判について

日本には裁判の時に二回ぐらい行つたかな。(裁判に)行くときはね、何人かで行きよつたですよ。五、六人は一緒に、嶽釜さんとね。嶽釜さんが全部連れて行くんですよ。うちの主人はその時ちょうど病気しとつたから行かれなかったから、私が主人の代わりに行つたわけなんですよ。

それまで私たちは、健康保険も貰ってなかったし、今みたいに保護謝金っていうのもなかったんですよ。裁判の結果そういうものを獲得したんですよ。一時金もちろんもらいました。私たちが請求したよりも遥かに額は少なかったですよ。それでも一時金はもらいましたから潤いました。みんな嶽釜さんのおかげです。嶽釜さんじゃないとできることじゃなかった。だから、私今でもいつでも嶽釜さん尊敬しています。でも、今日本に住んでるご高齢の方は、もっと大変な人の方が多いみたいですね。

弟はいつも「政府の過ちでここに来たから、こうして苦勞して、今は補償金を少し貰ってる。でも日本における者はそんなもの無いんだからな。誰から見れば俺なんかも身が出るほうだな」ってことを言ってたんです。

日本とドミニカについて

私が主人と四月に日本に行った時にテレビを見たらね、二〇度って出たんですよ。うちの主人はものすごい寒さに強い人でした。私は弱い、寒さに冷え性なの。「二〇度って出てるよ。二〇度なんて私はドミニカで経験したことないよ」って言って。寒かったです。だいたいは夏の時期に行きますよね。日本の夏は湿気があるから、それが皆が嫌って言うのよね。ここ(ドミニカ)は乾燥してるから。だから、真夏でも風があるときはここ(リビングルーム)におると、あんまり暑いと思わないんです。外に出ると猛烈に暑いですよ。なるべくスーパードライなんかにお買い物に行く時は、朝早くに行きます。ドミニカは、昼と夜(暗くなるのが)ほとんど同じですよ。

日本に帰りたい？

私なんかは日本が恋しいですね。日本に行くと、飛行機から「これが見納めかな」と思って、泣きたいような思いで帰ったけどね。若い時は本当に日本に帰りたいかった。必ず晩年は日本で過ごしたいと思ってた。お金を貯めてね。でも今はね、やっぱり考えが変わりました。私は寒さに弱いですからね。テレビを見ると、日本のお年寄りは大変みたいですし、だから今はここも良いかなと思いました。温かいし、女中さんは安く使えるし。

女中さんについて

うちは今(女中さんに)お掃除だけしてもらっているんです。私は洗濯さ



せないの。どうしてかというのと、何もしなかったら身体が動かなくなるからね。だから出来ることは全部自分でやろうと思つて。私みたいに一人暮らしをしてるとね、いつまでも元氣でいないと子供達に苦労をかけるから。なるべく自分が寝込む時間を少しずつ少なくしていこうと思つているんですよ。

私がまだ達者なうちに、私が食べるご飯の炊き方を(女中さんに)教えたいんですね。私はドミニカ食ばかりは嫌やからね。朝はレーチエ(牛乳)かパン、プラタノ(食用バナナ)食べる人もいるでしょうね。昼はご飯の油飯にアピチュエラ(豆)かけたりね。夜はプラタノとかバタータ(サツマイモ)、ジュカ(芋)ね、そういうのを(ドミニカ人は)食べるんです。

昔はいい女中さんがいくらでもドミニカにいたんですけど、今はドミニカ人では女中さんが少なくなったそうです。世の中が拓けてきたもんですからね。女中をして高いお金をもらうよりかは、綺麗な仕事をして安い方がいいつて言う人がドミニカ人にも多くなつたみたいです。

今でも味噌作りを？

もう年を取つたから出来なくなりました。私たちの郷里は赤味噌でした。うちの母も、もちろん私たち小さいときに味噌を作りましたし、結婚した先のお父さんお母さんも自分で作つて、私もそこで習つてね。自分で作つて子供達や他の人にもちよつと分けてやつてね。皆が欲しいがるんですけど、皆にやるほどは作れないからね。一回に六〇ポンド(二十七kg)くらい作つてました。一人では出来ないので主人に手伝ってもらつてね。豆をこう挽くのね。主人が達者なときは主人が、主人が出来なくなつてからは女中さんにさせて。でも、私は自分が年を取つてもう出来ない。ラベガにいるときは外に袋を作つて、薪で燃やして豆なんか煮たんですよ。ここじゃコンロの位置が高いでしょ。鍋を下ろしたりするのが大変だからね、もう三、四年前から作らない。味噌が欲しいつて言うのは一世だけ。ここで生まれた子は味噌汁は全然。

老後について？

私はあんまり長生きしたくない。いつも長男が、「ママいつも同じ事ばかり、そんなしょうもないこと言つて」と怒られるから、あまり言わないんですけどね。他の人も「いや、おばさん長生きするのは良いよ」つて、皆言つてるんですけどね。なるべくなら早く死にたいと思う。こればかりは自由にいかないでしょ。うちの母が満九十四歳か九十五歳に日本で亡くなつて。途中で皆さんが帰国したときに帰らしちゃつたから、日本で亡くなつたわけですよ。その時に、悲しいよりも安心した方が多か

った。母は一人暮らしでしたから。だから私もね、子供達を安心させたいなあと思ってね。姉が亡くなったときは、ものすごく悲しかったですよ。心が真つ暗になった。電報が来たんですけどね、私がラベガにおる時にね。だからその日は忘れないようにしてる。

子ども達へ想うことは？

私なんか、こういう所に子供を連れてきて苦労させてるんですよ。ちゃんとした教育も受けさせなくてね。子供達にもものすごく苦労させてるの。小さいときにね。

うちは長男がおって嫁さんがおるけどね、一番面倒みてくれますよ。迷惑かけるのは長男夫婦に迷惑をかけてる。長男は大変ですよ。なんかある度に私の世話をしているんですから、難しいことはね。私が重りになるときもあると思いますよ。だから親としてはなるべくね、子供達に迷惑かけないように心掛けてるの。

ラ・ルイサ地区は、日本政府の依頼により、一九九八年にドミニカ国政府が日本人移住者に対して土地の無償譲渡措置を発表した地区





～笠原ハル工様～



二〇二三年八月四日 取材

笠原ハルエ

一九三五年四月十四日 神奈川県で生まれる
一九五六年七月二十九日 (二十一歳) 兄清次の同伴者として清次の妻と子供三人と弟、
合計七名でダハボン第一次にて入植する

一九五八年 (二十三歳) 結婚

一九五九年九月二十一日 (二十四歳) 長女 朱実生まれる

一九六三年十二月十日 (二十八歳) 長男 潔生まれる

一九六五年三月九日 (二十九歳) 次女 ゆかり生まれる

一九六九年十二月十日 (三十四歳) 三女 由美子生まれる

二〇二四年四月二十二日 (八十九歳) 永眠



笠原ハルエ様は、いつも笑顔で誰にでも気さくにお話しをしてくださる親しみ溢れる女性です。新しいことや楽しいことをするのが大好き。どんな遠くの場所でも移動は苦にならないと、首都から車で六時間以上かかる場所でもヒョイッと旅行をするなど、元気いっぱい少女のようです。現在は、御身体が弱り車椅子の生活を送られています。気持ちは今にも何処へでも飛んでいきそうです。前向きでクヨクヨしない、「天真爛漫」とはハルエ様のためにある言葉かと思うほどです。可愛い笑顔の中に、どんなことがあっても自分の信念を貫くハルエ様の逞しくも美しい人生を取材することができました。

移住のきっかけは？

移住するには働き手が欲しいでしょ(※移住条件は一家族に働き手が三名必要だった)、それで兄貴が私と弟を連れて来たわけ。最初兄貴から誘われた時は、まだ若いから「うん、行くよ行くよ」て簡単に言った(笑)。ほんと何にも考えてなくてばかりっ

としてたよ。ほんとにそうよ、何にも考えてない。親はがっかりしただろうけどね。親からも、誰も反対しない。兄貴が一人だと困るから、やっぱり私が行かないと色々困るだろうって言うので、親たちは承諾したんだと思うんだけど。

それから父には会えなかった。あの人は五十五歳で死んじゃったから。早かった。胃癌だった。お酒の飲み過ぎ。毎日よ！第一次世界大戦で中国に行ってたんじゃないかな。母は長生きしたよ、八十三歳。私の方が(母親の年齢を)超えたけど(笑)。姉がいるのよ、日本に。五つ違いの九十三歳。福島でまだ元気よ。私よりずっと若いよ。

移住当時の暮らしは？

ダハボン着いたときはお家が出来ていたのね、私たちが入る家が出来てて、色んな家で、賑やかだったのよ。うちは緑色っぽい感じ。日本の家と全然違う違う、どこに何があるか全然分かんないでしょ、どこに入ったら良いのかわかんないわけよ、「どうしたらいいだろう、どうしたらいいだろう」聞くわけにもいかないし、まっ苦労したわね。そして食べるものが全然何も無いの。うちの兄が一番最初、先頭になって買い出しに行ったの。離れてる街に行ってお米とか色々買ってきたのね。そしてたら近くにお店があったのよ。それ知らないで遠くまで行って買ってきて。だけど、食べ物なんて何にも無いのよ。バカラオとアレンケ(ドミニカで捕れる魚)、あれだけしかないのよ。肉は現地人が殺すでしょ。だからそこに行行って買うの。一頭殺した肉を皆で分けるの。日本人は皆買いに行くの。朝、「今日は殺すよ」と言うのと皆日本人が集まってきて待ってるわけ。お肉屋さんには無い無い、ドミニカ人が自分で殺してその場でさばいて、それを分けてもらうんだから大変よ。まだ私二十一歳でしょ、そんなの初めて見た！ 殺すところから全部見たから、なかなか食べられなかった。それでなくてもお肉嫌いだったから。それでもしようが無い、だって何にもないんだもん。皆のためにお肉を買ってお料理をしていた。

兄貴と兄貴の嫁さんと、子供三人と、弟と七人で来たけど、兄貴と奥さんが畑に行くわけでしょ、だから殆ど私が兄貴の子供を見ながらご飯炊き。家事は全部私よ。お肉と卵しかない。野菜なんてそんなの一切無い。キャベツなんてこんなちっちゃいのしかない。それでもドミニカ人はそれしか無いから買うの。

すごかったよ、食料なんて全然考えられない。それでも帰りたいなんて思うわけなかった。こんな遠くまで来ちゃったんだから。船(ぶらじる丸)の中でもね、みんな私のことをお母さんだと思ってるわけ。「ほらほら、子供泣いてるよ」と私に言いに来る。「あんたおっぱいやる時間だよ」なんていう人もいたの。笑っちゃった。「冗談じゃないよ、私の子じゃないよ！」って言ったなら「え?!」って(笑)。六カ月の子をおんぶして、皆私がママだと思ってたよ。大変だったよ。兄貴の奥さんは身体が

弱いからずっと寝てたの。四歳、二歳、六カ月の三人の子供よ。船中でもどこでも全部私が面倒みたの。その時は、自分の子供が欲しいとは思わなかった。

国際結婚についての考えは？

私はドミニカ人と結婚しているんだから、いまさら国籍がどうかダメだとか言えることないわよ(笑)。いいと思った人と一緒になればいいだけだと思うよ。私が結婚したのは二十三歳。相手はドミニカ人。なんか知らんけどね、若いから、私の夫になるような人じゃなかったんだけど、あの当時は何も考えないから。まあまあちよつと良いなと思ってたけどね。やっぱり若いから、後先考えない。

自分の子供は、女の子三人、男の子一人、四人とも全部育てたよ。お家は政府で作った家があったでしょ、そこにいたから。でも、兄貴達が表に仕事が出来て出ちゃったから、そのままそこ(兄の家)に残って。でも弟がいたから、弟がよく手伝ってくれたよね。その弟は今、日本にいますけど、まだ元氣よ。

日本に帰ろうと思ったことは？

子供が四人もいるから、日本に帰ろうという気持ちにならない、全然！ でもね、一回日本に行ったのよ。子供三人置いて、ドミニカにいてもしょうが無いから、働いてこようと思って。子供を置いてよ。一番下の娘が四歳の時。七年くらいいたかな。子供置いたまま。だから子供達可哀想だったけど、私の旦那の兄弟が子供達を見てくれたの。(他に)いないからしょうがない。私は黙って(日本に)行っちゃったから。言えば反対されるから。黙って飛び出して、相手(夫)もビックリしたろうけど(笑)。でもほら親戚がいるから、自分の親とか、兄弟がいるから、そこに連れてって、そこで大きくなった。

日本での生活は？

日本では色々したよ。最初は料亭の仲居さん。着物を着て。最初は私嫌だつて言ったんだけど、女将さんが「そんなこと言わないでやんなさい！」なんて言われて、それで着物着せられて、お料理を運ぶのに座敷に出て、その他は何もしないけど、それをね、何年やったのかな、三年くらい続いたのかな。その後、福島から出て東京に行って、長女の朱実を日本に呼ん

で、朱実 は日本 で タイピング や色々勉強 していた のよ。私は、お医者さん の家のまかない を作る 仕事をした の。大きな病院 じゃなくて 個人 の病院 だから。その頃は まだドミニカ料理 は作って ない。三年以上 いたかな。

調理師 免許、日本 で取った のよ。一回 取りに いったら 受からなかつた の。で、黙ってて、その次 に行ったら 取れた。で、ドクトール に言った ら、「わーすごい なー！」って。勉強 したよ、一生懸命！ 筆記 だけ。あのときは 難しかった けど、もう何もかも 覚えて ない。昭和五十三 年、四十三 歳で取った んだから 大した もんよ。挑戦 者かもね、それは あるかも。

稼いだ お金は ドミニカ に送った。だって 子供 が若い でしょ。ドミニカ に友達 がいた から、その人 が（お金を）受けて くれて、子供 らの父親 の方に。長女 だけ私 の友達 が見て くれて、三人 の子供 達は 父親 がみて くれて。日本 に帰った のはこの時 だけ。後は 逃げる わけには いかない ね、子供 が大き くなつた から（笑）。

七年ぶりのドミニカで感じたことは？

ドミニカ に戻った ときは 子供 が大き くなって ビックリ した（笑）。いつの間 にこんなに 大き くなつた かなって。日本 は良い けど、大変 でしょ、日本 で子供 を育てる の。やっぱり ドミニカ は良い なく と思って。子育て するのは こっち の方が 楽よ。着る物 は年中 同じで 良い（笑）。あの人（夫）も 元氣 だった けど、一緒 には 住まなかつた。結婚 して すぐは 一緒 に住んで たけど ね。当時は 離れて 住むの はあんまり なかった から。

ドミニカでの生活は？

ドミニカ 帰って きてから 喫茶店 みたいな お店 をやって たの。奥で 食べれる ように して、女中さん 雇って。女中さん がほとんど 作る けど、私は 店の方 がある から、裏には あんまり 行か なかつた けど、女中さん に言ったら 結構 やるから 指示 だけ 出して、五年 近く（お店） やってた。別の 仕事 が入って やめた の。日本 から 来る人 達に料理 を作って くれて 言われて。結構 皆喜んで くれた けど、その 仕事 はね、長く 続かない。もう 日本 から 来た人 達が 帰る 時期 になったら さっさと 辞めて、サントドミンゴ に戻って、娘（朱実）と 孫（純司）と いたから。孫 がね、私 が来る たんびに「行っちゃダメ だ！」って 言って ね、その孫 が今（私の）面 倒みて くれてる の。ほんと ね、ありがた いよ ね。あの子 みたいに 尽くす 子 いない。



昔は首都で納豆作って売ってたのよ。納豆菌買ってきて。今は全然作れないもの。もったいないけど、もうとてもじゃないけど、豆煮るだけで納豆は大変なの。ちよっと冷まして納豆菌入れて、入れ物に入れて、お布団に入れて一日発酵させる。簡単よ！皆日本から来た人が美味しい美味しいと喜んで買ってくれて。大使館とかJICAとか、持つて行くと喜んでくれて、美味しかったのよ、納豆。今でも市販の納豆食べると何だか美味しくないなと思って。納豆菌は息子が日本から持つてきてくれた。この家で作っていたよ、このぼろぼろの家で。三十年経っているからね。

お金にまつわる苦勞は？

お金のことはずーっと大変だったよ、何もないところから始めるわけだから。子供のことはやっぱり大変だったね。学校の費用はほとんどかからなかったから有難かった。子育てについてはこの国は本当にいいよ、少し危ないところはあるけれど。でもやっぱり食べていくこと、生活していくこと、苦勞したよ。

移住当時、大使館やJICAとの関係は？

良好であったとは思わない（即答）。頼り甲斐無かったからね、昔のお偉方はデンとして、大使館だって敷居が高くてね、そんな時代だったから。腹が立ったりとかは別になかったけど、無関係な感じだったって言ったらいいかね。最近ではそれも変わってきて懇親会とかもあるけど、大使も色々な人がいて、話しやすい人もいれば顔も見たい人もいますよ。頼まれて大使館のイベントの料理のお手伝いはよくやってたね、頼まれたらなんでもやっちゃおう。

移住当初、ドミニカ人との交流は？

交流はあったと思うよ。言葉をどうやって覚えたのかは覚えてないね。気付いたら喋れるようになってた。分からなくても通じさせちゃうのよ（笑）。

ご自身の死後については？

墓地はもう自分用の場所をもっているから大丈夫。娘は二人先に亡くなっている、朱実とゆかりがね。



お墓で待っていてくれてるんだろね。子供たち、孫たちの心配は全然ない。孫なんかはあんまりもう知らないっていうか関係ないわね。それくらいが丁度いいよ(笑)。心配したってしょうがないんだから、本当に。

宗教については？

日本のときは創価学会だったけど、こっちにきてからも一時期は行ってたけど、今は行ってない。アルタグラシア(※地名)には無かったし。いまは無宗教。カトリックもあんまり関係ないなと思ってた。創価学会入ってた時とそうでない時とで、自分としては何も変わりがないね。会議とか色々いっぱいやってる人たちはいるけど、私は関係ないかな。

子供の教育については？

子供が好きなようにさせたらいいよ、実際になんにも言わなかった。純司(孫)だって、(長女の朱実が亡くなった時に)私と一緒におりなよって言ったたら、「うん、そうする。おばあちゃんと一緒にいる」って。他に何にも言わずにそう言ってくれた。ほんとうにね、ありがたいと思うよ。今でもごはん作ってくれたり「ちゃんと食べたかー？」って、仕事先から電話くれるし、なんでもやってくれる。あの子は小さい時からほんとに優しい。

朱実も、日本いたのに離婚してまでしてドミニカにきてくれたんだよ。旦那さんすごくいい人だったのに、ママの面倒を見に行かなきゃいけない、長女なんだからって言って。私もびっくりしたよ。ちよつとできないよね。「あんたほんとに(旦那さん)置いてきちゃったの？」って。「申し訳ないな」って言ったたら、「そんなことない、最初からの約束だから。そうなった時はそうするって決めてたから」って。(朱実を)どう育てたかなんて分かんないけど、もうあの子の性質だろうね。純司がそっくり。ありがたいと思うよ。

日系行事や日本語学校についての考えは？

今のままでいいんじゃないかな。色々イベントもやっているし。

前は婦人会とかあったけど長続きしないのよ。むつかしいよ、ボランティアみたいなものだから。福島県人会もあるんだけど、なかなか人が集まってくれない。なんかやればいいと思うんだけど、なかなかね。他の県人会と合同でなんかできたらいいよねえ。

現在の生活の満足度は？

そうね、もうこのままいつ死んでも良い。「やりきった！」は無いけど、自由奔放に自分の好きなように生きてきたから、人生に悔いはないにしよう！　こんな自由な人ないよ！

移住してから困ったことは？

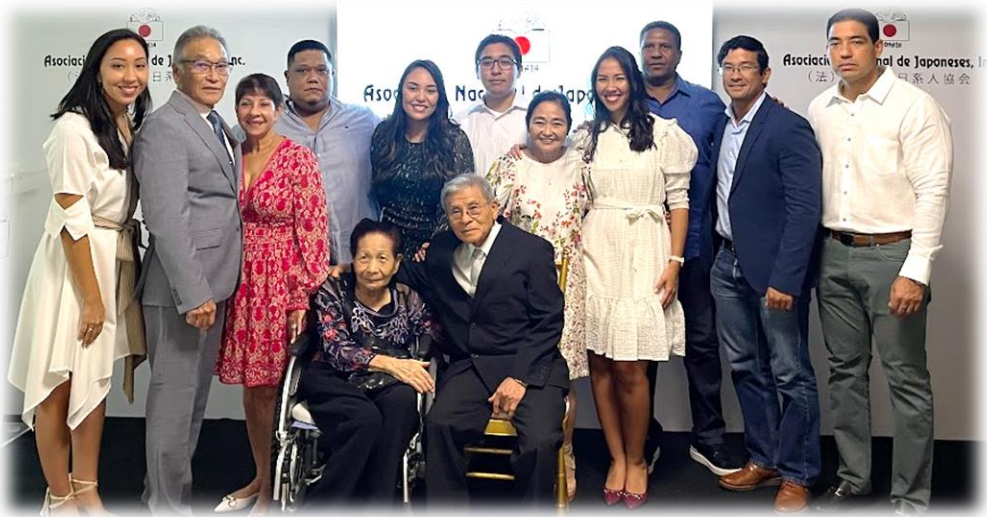
困ったことはない、悩んでもしょうが無いから悩まないよ、なるようにしかならない、そういう心境だから、どんなあれに置かれても、もうこれしかないんだって思う。だからいつ死んでも惜しくない。ろくな人生じゃなかったけど、私にしてみればまあまあ。

ご自身の人生を振り返ると？

私の人生なんかめっちゃくちゃだよ。よくこんなんで生きてきたなと思うよ。半分男みたいなところがある。日本にいたら、こういう性格じゃなかったと思うんだけど、ドミニカに来てからそうになったんだと思うよ。ほんとそういう感じ。でも、「辛いとか、しんどいな」とか思ったことはない。そんなことは考えないし、だいたいそんなこと考える暇が無いよ(笑)。楽しいな、幸せだなと思うこともない。ほんと今までよく生きてきたなと思うよ。

ドミニカで生きていくって決めて、もう迷わないね、今になってさ、自分で死にたいとか、日本に帰りたいとか、それは無い。人生は楽しんでるわね。人から見たらバカみたいな人生だけど、なかなか他に探しても(私のような人)いないかもね。

笠原ハルエ様は、二〇二四年四月二十二日、八十九歳でこの世を去りました。ハルエ様に直接この移住史をお渡し出来なかったことが、とても悔しいです。如何なる苦境にも負けず、自ら新たな道を切り開き、自分に正直にめいっばい魂を輝かせ続けたハルエ様は、私たちの心の中で生き続けています。心よりハルエ様のご冥福をお祈りいたします。





～玉手和子様～



二〇二三年七月八日 取材

玉手和子

一九三七年五月二十三日

福島県で生まれる

一九五七年一月九日

(十九歳)

玉手秀雄と結婚

三月八日

(十九歳)

夫 秀雄と秀雄の弟妹、合計四名でダハボン第四次にて入植する

一九五九年六月一日

(二十二歳)

長女 恵子生まれる

一九六〇年十二月八日

(二十三歳)

次女 ルリ子生まれる

一九六三年三月二十一日

(二十五歳)

三女 文子生まれる

一九六九年四月二十七日

(三十一歳)

四女 法子生まれる

一九七〇年十二月二十九日

(三十三歳)

五女 みよう子生まれる

玉手和子様と初めてお話をしたのは、私がボランティア活動をしている安らぎセンター(首都サントドミンゴの“Escuela de Idioma Japonés”敷地内にある日系人を対象とした福祉施設)内にある図書コーナーの前でした。本が大好きで、家ではいつも本を読まれていると言います。好きなジャンルは推理小説。毎月十冊以上の本を借りていけます。いつも優しい表情で、和子様からはホッと安らぐ空気を感じます。今回、次女ルリ子様のご協力で、和子様の取材をさせていただきました。取材を通して、苦労を一切顔に出さず、静かに現実を受けとめ、立ち止まらず前に進んでこられた和子様の秘めた強さを知ることが出来ました。そのしなやかな逞しさは、言葉一つ一つから伝わってきました。信念を貫く旦那様を、側で支えながら家族を守り、幾多の困難を乗り越えてこられた和子様は、昭和の日本人女性を代表する素晴らしい女性です。



夫 秀雄様とのご結婚のきっかけは？

ドミニカに来る前に日本で結婚したんです。私たちは何で知り合ったかというと、アメリカに出稼ぎのグループで。私たちの町で沢山おったんですよ。そういうグループでたくさん活動していて、そして彼もやっぱり申し込んでいて、ちゃんとアメリカの引受人も決まっとったんですよ。ところがね、中国かどこかから、もっと困っている人がいるって言うんでね、そっちが先になっちゃって、結局行けなかつたんです。本当はアメリカに行きたかつたんです。やっぱり広いから。何か可能性があるかなど。親は何にも言わない、自分が行きたいと思った。私らの近くの町の何か所かから一カ所に皆が集まって、しょっちゅう講習をやってたんです。十代二十代の若い人が多かつたです。

アメリカに行こうと思つたきっかけは？

町がなんかそういう募集をやってたんです。県庁が主催で各町にやつたんです。男性の方が多い。妻帯者もおつたんですよ。独身だけじゃなかつたんですよ。

応募資格は？

家族でね、あの当時十五万円必要だった。その当時大変だったんですよ。

最初は独身でアメリカに行こうとしてたでしょ。アメリカがダメになつたから、県庁がドミニカにこういう話があるからって。だけどそれは家族でないといけないって、個人じゃダメって。働ける人が三人いないと…。そういう条件。それじゃあ、ということ、中心になっている人が世話してくれたんです。家族で行つたらどうかって。そしたら、あの人（夫）のお母さんがね、やっぱり子供がたくさんおつたから大変だったでしょ。弟と妹も連れて行つてくれっていうことで、それで弟と妹連れて、四人家族で来ました。他には募集はなかつた。

ご結婚の決め手は？

結婚するって言ったら一生いるわけでしょ、そりや嫌いな人だったらしませんよ。親と離れて地球の反対側に行くわけですから。そういう話になつてから（ドミニカのことを）色々地図で調べて、そんな感じでした。調べても分らないですよ。

アメリカがダメになつたから、どっちみち海外出たいっていう気持ちがあつたわけですよ。それでいつも中心になつていた

人の家に、その当時申し込んでいた人が集まって色々講習かなんかやってたでしょ、そして、その人が探してくれたんですよ。ドミニカにこういう話があるからって県庁が町に言ってきたんですよ。もうアメリカは希望ないって、ドミニカにこういう話があるって。それでうちの親もいってことで。でもやっぱり父はね、私が長女だったから、もうなんかガツクリきて。(ドミニカ行きが)決まったときは、二日くらいあんまりご飯も食べないで、寝てばかりいたからね、私あれ見ると涙がこぼれましたよ。

気持ちには変わらなかった？

そうですね！ 決めてたからね。

ドミニカに持って来たものは？

味噌、醤油、うちは父が桶職人だったんですよ。だから大きな樽を、ちゃんと新しいのを作って、それに味噌をいっぱい、梅干しいっぱい持たせてくれた。私たちが持てるように醤油もたくさん買ってくれた。皆ね、梅干しとか、私らもそんなに食べるわけじゃないから、だいたい長いことあったんですよ。そしたらね、具合悪くなった人が、うちへもらいに来るんです。具合悪いときはみんな欲しがってね。しばらくあったよ、だって樽ひとつで持ってきたから。全然悪くならなかった。お味噌も醤油も全然大丈夫。

和子様の巻き寿司は美味しいと伺いました。

かんぴょう、椎茸、玉子、人参、きゅうり。海苔がいいのはいんですよ。お酢と砂糖とほんだし、今はほんだしは赤くなるから入れず味の素を入れてます。私なんかはずっと日本食を作ってきました。

秀雄様の為？

そうですね。ドミニカ食でも食べますけどね、もう何年もいるから。でも自分が作るっていったら日本食です。すね。



日本での生活は？

日本で花作りをやっていた。それで福島市場に出してたんです。だからやつぱり、こつち来たのもね、花作りやるから、新潟からチューリップの球根、あれ一箱買ったりとかね、持ってきたの。だけどダハボンに入ったでしょ。ちようど暑くて、三月入って、ずーっと暑くなるから、ダメだったですよ。一回くらい咲いたかな。でも、やつぱりダメだった。

ダハボンでの生活は？

まあ、そうですね。ダハボンには五年しかいなかった、それからコンスタンサに三年半行って、ハラバコアに二年、ラベガ三年くらいおったかな。それからマンサニージョに二三年、サントドミンゴにきて、ずーっと。サントドミンゴでもいろいろ移って、国内全部で十一か所。首都の郊外にもしばらくおったんです。そこには荒井さん、そして増岡さん、うちと、大庭さん、その人たちがね、近くにみんな住んでた。郊外なんですよ。そこは三年か四年くらいおったかね。それから今度、郊外からロス・ミナというところに住んでいて、ポン菓子やって、木村さんの裏の家が空いていて、そこに移って、ポン菓子の袋詰めを手伝った。もう、すぐ売れた。米をバンとやって、それを砂糖をぐらぐら煮立たせたのに入れて、まぜまぜして、そしてこういう輪っかがあってね、そこに入れて、平にして、格子つけてね、開けて、切るの。その機械は木村さんが持ってきたのか、誰かから買ったのか。そういう機械が一つあったんですよ。ほかに、井口さんと大庭さんがやってた。大体こじや、あのバンってやるあの機械なんてないもの。だから誰かが持ってきたか、買ったかなんかでしょうね。そりやもう、ものすごいみんな大変な中、ものすごい貧乏しましたよ。

一番大変だった時期は？

うちとすれば、私が病気をした時だね。コンスタンサで高血圧、二十七歳ですよ。それでね、高血圧で、三番の子どもが死んだんですよ。ルリ子の下。その子は生まれて、産後の肥立ちが悪くてね、ちようど六か月目に私倒れたんです。それでね、自分の頭もふらふらというより、重たくて頭が上がらない。それでね、町の医者が往診してくれてたけど、こりやダメだって言うて。その医者が付き添ってくれて、アンブランシア(救急車)を頼んでね、サントドミンゴまで。九日入院して。私も苦労した。だから、夫と一緒に病院いったから、まだ恵子とルリ子しかないから。畑なんかほっぽらかしですよ。恵子とルリ子は近所の人が見てくれてて、まだ小さかったからね。一番最後に生まれた子ども、生後六か月くらいだったかな、それは国分さんのおば

あさんがいたんですよ。福島県だから、その人も。その人がみてくれて。私はほら、病院に入りに行っちゃったから。ほんと、よく助かりました。

当時の医療の技術は？

本当にね、ひどいですよ。日曜日だったんですよね。アンブランシアで行ったでしょ、医者がないって、宿直の医者しか。それで、診てくれないのよ。ただ寝ているだけ。十人部屋。だってお金もないから、個室なんて、誰も入る人いなかったですよ。十人部屋に入れられてまる二日、全然診てくれない。私いろいろ具合悪くなっちゃって、死にかけたときに、たまたまコンスタンサの加藤ようこちゃんが見舞いに来てくれて、これだめだって、すぐにJICAに電話してくれて、JICAが飛んできて、病院の院長とちよつと話してくれて、まあ、それからですよ。それでも九日入院しましたよ。

やっぱりね、治って帰ったんですけど、あそこ(コンスタンサ)は気圧が低いんですよ。どうも私の身体には標高が高いから合わない。それで結局、半年はやっぱり寝てましたね。

首都サントドミンゴは過ごしやすか？

ルリ子 .. サントドミンゴ(首都)に来てから長かったよね。首都来てから動かないから。まあ、場所は移ったけどね。

和子 .. サントドミンゴに来たのは、日系の中では早かったのかしら？ あまりいなかったよね。

ルリ子 .. このお家で、五十年間も住んでいるんですよ。はじめの時が、一九七二年か、一九七三年に来たよね。

このお家に来るまでの長い道路は、秀雄様が開拓されたって伺いました。

和子 .. そう、この辺、何もなかったから、外からの道を全部自分たちで拓いて。電気もないから、外から引かなくちゃならなかったんですよ。電柱から、電線から、全部買って。それで(夫が)自分でやったの。そうしたらね一週間くらいつかない。

ルリ子 .. メータをつけないといけないんですよね。電力会社がそれをやるのに時間がかかったんですよ。(電力会社が) やつと来て、メータを入れて一週間後に、その線が全部盗まれたの。



和子 …だから、長いこと、うちには電気がなかったの。
ルリ子 …それで上の人が住んで、彼女は私たちがランプで勉強しているのを可哀想と思って、ハポネサにここから引つ張りなさいと言ってくれたんですよ、でもパパは嫌と。どうしてかと言えば、彼女は（電気を他から盗んでいたので、その線を大きな線につなげてお金を払ってなかったから、自分は盗んでいるものは欲しくないと。だから四年間、ずっと高校生の時はランプで勉強していました。

電気がない生活はいつから？

ダハボンも最初はなかった。サンドドミンゴに来た時もなかった。

四年後電気がつながつたきつかけは？

ルリ子 …電気の線を買うお金があったから。

大体、（自宅まで必要な電気線の長さは）五〇〇メートルくらいあったから、お金がなかったんですよ。

和子 …そのうちね、商売始めたからカミオネタ（車）買ったんですよ。それで走るうちに、もう一つバッテリーをつけておくんですよ。それで充電して、夜にそのバッテリーで電気をやった。一つだけです。一つのライトだけ。だからね、ネベラ（冷蔵庫）も新しいのあったんだけど結局使わない。しょうがないから、友達にあげた。

ルリ子 …あげたんですよ。「引つ張りなさい」と言った友達に。そこに冷蔵庫をあげて、そこに私達が（冷蔵庫に入れて欲しい）物を持って行って入れてもらってたりとか。アウレリーナ（その友達）はいいおばさんだったよね。よくやってくれたよね。近所の中で一番金持ちだったので。でもすごく良くしてくれたんです。私たちが小さい時。

和子 …もちろんテレビなんかもないから、お昼ご飯食べると、恵子とルリ子は、その家に行ってテレビ見た。

言語の苦労は？

大変でしたね。でもね、まだ私たちはダハボンに一次で入植した人がいたから、コルマド（小さな商店）の人も日本語覚えて。私が買い物行くときは、日本語が通じて苦労しなかった。コルマドは若いムチャチャコ（使用人）が、なんでも日本語で通じちゃう。一次の人は大変だったと思うけどね。

スペイン語の勉強は？

やりましたよ。ダハボンは、公民館でやりました。

ドミニカでの生活で嬉しかったことは？

私コーヒーが好きでね、朝と昼必ず二回飲むですよ。あの当時、日本には(コーヒー)なかったよ。私は必ず砂糖入れる。

畑仕事で辛いことは？

私もね、腰が痛いんですよ。痛いよ、こうやって(腰を曲げて)歩くんですよ。だから、自然と腰が曲がった。

妊娠中も畑仕事を？

和子 .. そりゃ、やってましたよ。それこそ生まれるまで。

ルリ子 .. ダハボンだったかな、赤ちゃんが生まれてすぐ畑に行ったりとか。そういう例もあったんです。

和子 .. そうやって働かなくちゃ、生きていけなかったんです。ちよつと日陰のところには赤ちゃん置いて。

ルリ子 .. 家に赤ちゃん一人置く人もいた。そうしないと働けなかった。

過酷な生活でしたね。

うん。まあ、今は本当に、そんなことも忘れて。食べるのも心配なく暮らしてはいけるけど。あの当時は、本当にみんな移住者は大変だった。

日本への帰国については？

和子 .. 思ったって帰れないでしょ。お金もないし。旅費だけでもどれだけかかりますか。

来るときは政府が貸してくれた。それは返さなくてもよくなった。

ルリ子 .. お母さんは帰りたいかった。でもお父さんが「こんな状況では帰れない。だから残ろう」と。

その時、喧嘩にはならなかった？

和子 ……ならないですよ(笑)。

ルリ子 ……その時はもう恵子と私は生まれてたよね。

和子 ……St.(はい。)二年してから恵子が生まれたのかな。三年目に生まれた。

子ども達の生活は？

和子 ……恵子とルリ子はものすごく苦労したんですよ。恵子が一番苦労した。市場に行くこと、私十年やりましたからね。

ドウアルテまで三十分くらいかかるんですね、当時。毎日四時に起きて行くんですよ。それを恵子と一緒に行くんですよ。それを手伝ってから、学校に行くんですよ。終わったら帰ってきて、また手伝って。だから、恵子が一番苦労したね。恵子がだめな時はルリ子が。

ルリ子 ……私はここに残って。学校に行つて戻ってきて、みょう子と法子のご飯作つて。

そして、二人とも昼から学校に行つてたんです。十年も違うんですよ、みょう子と私。

結婚式は？

ルリ子 ……一九五七年一月九日。十九歳でね。かわいそうよね(笑)。まだ子どもよね。

ママはすごく若いとききれいで、みんな褒めてました。パパもハンサムだった。

和子 ……その当時の女性としては、そういう時代では、勇氣あるよね。お父さんはもつとですよ。

パパは、あるところと大人しくいられないタイプだったから。なんかいろいろ失敗しながら、別の仕事を。落ち込むタイプじゃなかったよね。だから、私たちが大変だった。ついていかなきゃいけなかったから。

電線を盗まれた時も、秀雄様は落ち込まなかった？

ルリ子 ……けれども、やっぱり、落ち込んだでしょうね。よく考えたら。

(結婚式の写真を見ながら)

昭和三十二年、お衣装とても立派ですね。

そりゃそうですよ。一生に一度の、ね。変わっちゃってる？(笑)。昔こういう顔だったんですよ。変わらないでしょ、うちのパパ、二十五歳。写真はカラーではなかったんですよ。あの当時は。

「一生ついていきます」って言ったのですか？

和子 .. ははは(笑)。そんなこと言わな

いわ。きれいでしょ？(笑)。

これカラーだったらよかったですよ。写真館に行つて、結婚記念だから。

ルリ子 .. これ(結婚式の写真の台紙に書か

れた日付のこと)ママの字よね？

和子 .. S.S. 中学校で習っただけですよ。

ルリ子 .. ママはインテリヘンテ(頭が良い、聡明)なんですよ。本もたくさん読むし。

和子 .. 何か書類いろいろ、日系人協会とか政府に出すのとか、全部私が書きました。

新婚生活をダハボンで？

和子 .. はい。新婚旅行がここだもん。



ドミニカに来る「ぶらじる丸」の中での船酔いは？

和子 …… 最初しましたよ。もう船酔いは、みんなしました。もう、みんなした！

ルリ子 …… 三十三日間だったから。

和子 …… 二十八か三十家族。おかゆが出るんです。時間になるとコックさんが、「お昼の時間ですよ、よろしかったら、

船酔いの方はおかゆがありますから、おかゆに梅干しでどうですか」とか言ってアナウンスしてくれるの。

やっぱ私らもね、最初二日くらいはおかゆ食べたね。それから割と早く治って、普通に。

船の中で秀雄様のことをよく知るきっかけに？

そうですね。その前はね、結婚したって一緒に住んでなかったから。一月九日に結婚式したのかな。すぐに私は家に帰って、(ドミニカに)来る準備があったから、一緒に住んでなかったです。幹旋所にきて、初めてそこで一緒に住むようになったんです。

幹旋所の生活は？

部屋なんてもんじゃない。大きな部屋。ベットがダーつて並んで、上と下。だから、新婚なんて気分じゃないですよ。そりやもう、イチヤイチャしている状態じゃなかったですよ(笑)。できなかった。船も幹旋所もみんな一緒。小さい子どももいましたよ。家族で来た人は、小さい子もおったから。でも、わりと子どもって船酔いしないね。早く子どもは走り回って。船の中では運動会とか、演芸会とかいろいろありましたよ。

移住者による企画で？

そうですね。大体はリーダーがおったよね。その人が仕切るんだけど。

私らの場合は、どこか他に行く人も一緒だった。ドミニカに行く人だけじゃなかった。ドミニカは途中だった。

三十日は長いですよ。退屈する。だから、もう、船のまわりをぐるぐる歩いたり、ギターを持っている人なんか、甲板で弾いたり。運動会あったしね。演芸会もあったしね。映画もありましたね。スペイン語の勉強会もありましたよ。あったけど、私はしゃべれなかった。覚えてない(笑)。そしてダハボンに来てから、スペイン語を使う必要がなかったから。一次の人が先に来て、周りのドミニカ人に日本語を教えて、コルマドも日本語が通じたから、私は余計にダメなんですよ(笑)。

家での会話は日本語で？

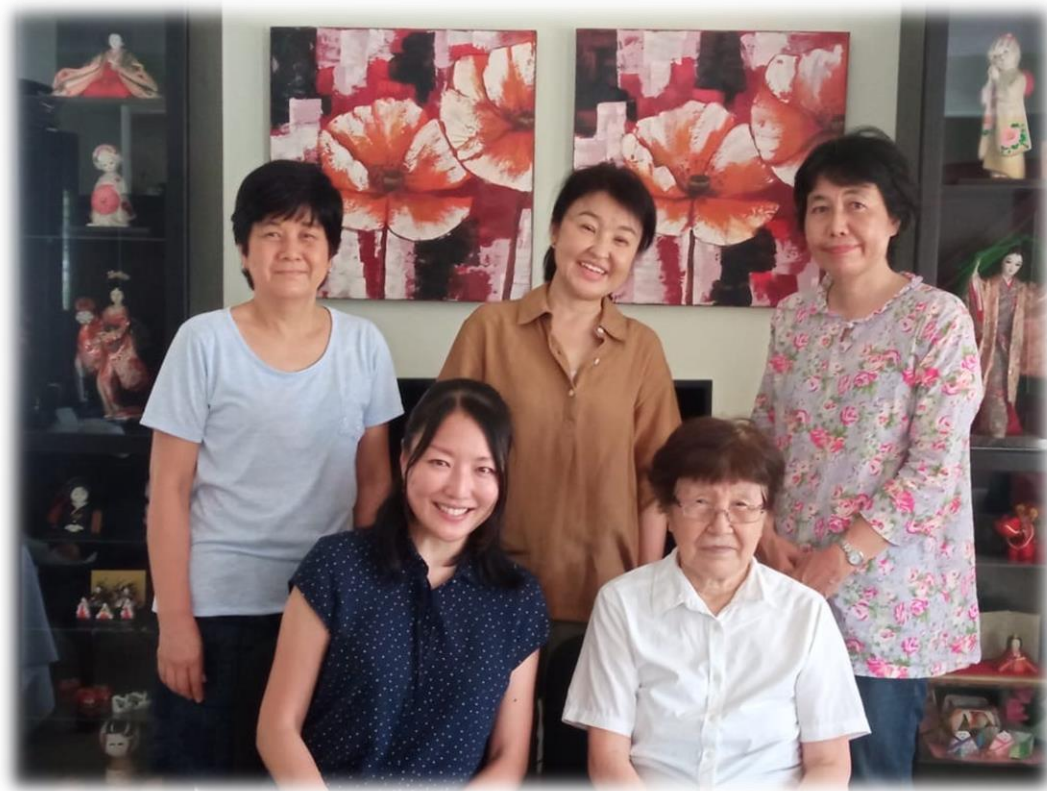
いや、もう子どもらはスペイン語ばかりでした。自分がしゃべれなくてもね。まあ、日本で住んでいる人にはちよつと想像できないね。

やっぱり苦労しましたよ、最初はね。なかなか大変だった。

ドミニカに来て一番よかったことは？

一番ドミニカに来てよかったのは、寒さがないこと。私は、寒さがダメなの。本当に体がダメなの。福島は寒いですよ、東北だもん。寒さが嫌だった。ここはいつも暖かいから、これが一番私は嬉しいです。

コンスタンスは寒かった。そして気圧が薄いから、あそこで私、身体が悪くなって大病したんです。生きるか死ぬかだったんです。おかげでね、助かったから。それから本当に丈夫になりましたよね。病氣しない。風邪ひいたり、お腹こわすことないもの。



上段左から玉手ルリ子様、JICA ボランティア赤丸・棚瀬

下段左から JICA ボランティア青木、玉手和子様



～犬山則男様～



二〇二三年三月十四日・五月十八日 取材

犬山則男

- 一九四三年十月七日
- 一九四八年 (四歳)
- 一九四九年 (五歳)
- 一九五六年七月二十九日 (十二歳)
- 一九七九年五月十二日 (三十五歳)
- 一九八〇年五月五日 (三十六歳)
- 一九八一年八月七日 (三十七歳)
- 一九八二年九月二十日 (三十八歳)
- 一九八三年十一月十一日 (四十歳)
- 一九八五年一月十一日 (四十一歳)
- 二〇一五年二月二十四日 (七十一歳)
- 二〇二三年 (七十九歳)

台湾大東で生まれる
茨城県多賀郡榊形村に両親とともに引揚げ
北海道川上郡標茶町磯分内に転住
両親、弟二人、妹一人、祖父母、叔父叔母、合計十名でダハボン第一次にて移住する
光子(当時三十歳)と結婚
長男 信一生まれる
次男 正晴生まれる
長女 みき生まれる
三男 秀明生まれる
四男 武男生まれる
妻 光子 逝去(享年六十六歳)
会社経営を引退 現在に至る

犬山則男様は、常に相手の気持ちを考え、助けが必要な人々に手を差し伸べる、思いやりに溢れた方です。ボランティアの私たちにも、いつも謙虚な姿勢で、優しく温和な態度で接してくださいます。他の移住者の方から、「犬山則男さんは、仏のような人」と伺ったことがあるほどです。どんな相手でも、穏やかで円満な人間関係を築き、沢山の方から尊敬され信頼されている則男様ですが、その優しい笑顔の奥に、血の滲むような努力で沢山の困難を乗り越えてきた事を知りました。どんな逆境も諦めず前に進み続けた則男様の精神は、大和魂そのものです。日本から遠く離れた地球の裏側にあるドミニカ共和国で、日本人としての誇りを守り続ける則男様の確固たる信念は、今後の日系社会を担う後継者の方々に勇気づけ、「日本の心」を根付かせているとともに、ドミニカ共和国に大きな影響を与え、今後も国の発展に繋がっていくのだと思います。



ご両親について

親父は大事に育てられたみたいです。おばあちゃんもすぐかわいがってね。いつもおばあちゃん（親父を）自分の懐に入れてね、外に自慢しに歩いたみたいです。一番最初の子供だから大事に育てられたんでしょう。

親父はいつもお袋の尻に敷かれてましたよ。お袋には頭上がらんかったみたいです（笑）。

これはお袋が若いときの（写真）。母親は大滝（名字）なんですよね。「桐生のかかあ天下」とか言ってる。空っ風の、昔っからそういう風になりますね。母親は市役所に勤めてたみたいでね、凄くおてんばだったらしいですよ。うちの親父は恐ろしかったみたいです（笑）。（結婚が）決まった時に、親父の友達が「お前はあの女と結婚するんか？ お前、一生尻に敷かれるぞ！」って言われてたみたい（笑）。

うちのおじいさんが気に入ってね。お袋は市役所から畑の指導に行っただけです。それで畑を見て、自分だったらこういう風にするって言って、全部の畑を整理したみたいです。それでね、おじいさんが気に入って、「ぜひ家に来てくれ。」と言って。親父は乗り気じゃなかったけど（笑）。

これはお袋の台湾の若いとき。

私が三歳の時に終戦で日本に引揚げました。

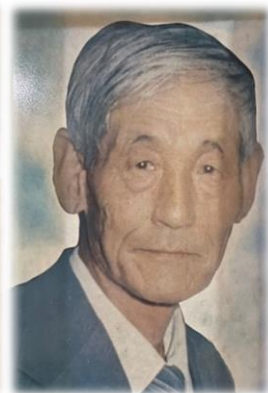
ご兄弟は？

六人。弟二人と妹三人。（兄弟を）まとめていくには、自分が言いたいことばらばら言ったんじゃないからなんです。ね。

祖父について

これは（祖父が）亡くなるちょっと前かなあ。川畑さんという移住者の方が来て、（祖父を）描いてくれたんです。ね。

うちのおじいさんはなかなかしつかりした人で、人間ができた活動的な立派な人でした。台湾でも、他の日本人の人は台湾人を使って威張ってたみたいだけど、うちのおじいさんは良くしてやっただけ。あの頃、台湾は日本の支配下だったみたいです。それで、（戦後、日本へ）引揚げのとき、僕がアメルバ赤痢にあって、帰国が出来なくなりそうだった時にも、おじいさんのおかげで、台湾の使用人たちが色々守ってくれました。



社会のことにも率先して出てみたいですね。消防団の団長になりました。いろんな村のこととか、自分が率先して活動してみたいですよ。おじいさんは鳶職だったんです。だから、どこ行っても家をおじいさんが作りましたね。神奈川の片瀬の家も。北海道に行っても立派な家を作ったね。ドミニカに来て、あちこち建設してる所はいつも見に行つて、あーだ、こーだと言つてましたよ。いろんな評価してましたけどね。いつも聞かされてました。本当に開拓精神が旺盛な人だったね。

僕は、そういうのをちゃんと忘れないですよ。おじいさんが身体を張つて教えてくれたこととか。ちよつとしたことでもね。「なるほどな。」と思つたことは今でも覚えています。言葉もあるけど、その場の実践だろうね。

終戦後の生活は？

終戦後、日本に引き揚げたでしょ。あの頃の日本は食べるものに困つてね。それで大変だったから、親父は茨城の炭鉱に働きに行つたんです。茨城もいろんな歴史があるんです。炭鉱の鉱夫だったから大変だった。配給だったでしょ、食料が。

うちのお袋が、米を毎日食べれんからしまつてあるわけですよ。それで、普段は麦か何かを混ぜて米が見えない。白米にいつも何か混ぜて炊いていたので、白ご飯はご馳走だった。すると僕たちは、白ご飯を食べたいよね。五、六歳くらいだったと思うけど、お袋も親父もいない時に、僕と実(次男)は白ご飯が食べたくてね、自分で(お米を)炊いて、それで味噌を付けて腹いっぱい食べて。お酒なんかも配給にあるんですね。お酒も一本しまつてあったんですよ。それをみんな飲み干しちゃつてね。親父が帰ってきたら二人とも真っ赤になつて酔っぱらつて：怒られました。親たちも口開けた状態で(笑)。お袋がしまつたお米をみんな食べちゃつて(笑)。(茨城に)二年くらいいたんじゃないかなあ。そのあとに北海道に行つたんですよ。北海道におじいさんが先に行つててね。



おじい様がお一人で北海道にいた期間は？

一年ちよつとだと思えます。それで家族も呼べるようになって、「こつち来い」って言うんで行つたんですよ。そこ(北海道)の移住は国の政策だったんですね。軍馬の牧場だったみたいです。そこを開拓させるために移住計画を立ててきたんです、政

府はね。それで移住者を入れたんです。それで土地を、みんな分けてもらって。そこは磯分内（標茶町）のもっと上の方で、磯分内から七キロか八キロくらい入ったとこだったんだよね。当時は、広い耕地にポツンポツンとしか（民家が）入ってなかったもんだから。

おじいさんは掘っ立て小屋を作ってました。初めは（家族で）そこに入ったんですよ。何ヶ月か住みました。下も土で。土の上にただ莫塵引いて。そこに薪を焚くのがあってね、真ん中に。「時々熊が出たんだ」っておじいさん言っていましたよ。おじいさんが寝たら、夜中にガサガサするんだって。それで、何だろうと思って見たら周りに熊がいたんです。何頭か。自分は高いところに登って一晩過ごしたなんて話を聞きましたよ。

おじいさんはいつも先駆者だったんだよね。なんでも拓いていける人。物怖じしなかったからね、どんな時も。台湾に行くのも、おじいさんが台湾に行くって決めたみたいですよ。北海道もそうだし。

ドミニカ移住を決めたのは？

ドミニカに来るのも、おじいさんが最初に言い出したみたい。海外移住の新聞記事を見て、「三百タレアの地主になれる。もう一踏ん張りしてみるか。こんな寒い所にも将来性がない」ってことで。

こっち（ドミニカ）に来る頃には、北海道も良くなってましたけどね。そんなに困ることもなかったんですよ。牛も大分おつたしね。ちゃんと食べていけるようになってたみたいだけど。やっぱり将来性がないって言ってね。台湾もドミニカもだいたい緯度が同じ。やっぱり台湾の生活を知ってるからね。ドミニカに行こうって決めたんです。

これは、北海道から横浜に出発する際、村の人が見送りに来てくれた時の写真です。皆が寄書きをしてくれて、今でも大切に持ってあるんですよ。

宮崎県高鍋町にある県経営伝習農場で農業訓練を受けて、横浜港を出発したのが昭和三十一年七月二日です。出発前に皇居で撮った家族写真です。左から二番目が僕。ぶらじる丸の船上で妹の恵美子と撮った写真もあります。





これがダハボンの入植した年の、当時の家長さんたちですね。僕たちは五十六年の七月かな。その時の新しい年ね。(中央)一戸って言って、移住者と一緒に来たお医者さん。その右側が、日本海外協会連合会(現在のJICA)の北村孝さん(支部長の補助要員)。一戸医師の左側がダハボン管理人。あとはみんな当時の家長さんです。

ダハボンの生活は？

これは、ダハボン入植地の家の前で、学校の制服で家族に見送られ通学する時の写真です。

ダハボンで配分された農地は、僅か八十タレアの水不足の土地だったんです。そこから、血の滲むような苦労が始まってね。その五年後に、当時ドミニカの大統領だった独裁者のトルヒージョ元帥が暗殺されて、コロニア(日本人移住地)から出られなかった移住者たちが、新しい仕事を求めて次々に移住地を抜け出したんです。その頃、一部の移住者で作った産業協同組合がラベガ地方に膨大な土地と製米所を借りて進出したので、それを頼りに私達家族もコロニアを抜け出すことができました。

ダハボン後は？

サバネータというところに転住しました。これが当時の。公民館(現在のフランボジャン 日・ド文化会館)に家があったんですよ。ジャングルを開墾したんです。

農業の写真

これが当時のトマト作りの写真。朋子とひろみの小さいとき。子ども連れて見に来たんですね。何やってるか。家族と使用人ですね。一緒に働いてた。当時はあまりハイチ人はいませんでした。ほとんどドミニカ人。よく働いてくれましたよ、みんな。朝早くからね、四時頃から、太陽登るのを待ってて、明るくなるのを待っててね。これ(木の棒)はね、川の淵に生えてるんです



よ。それを切つてね、トマトの木一本一本に挿すんです。これは Canabrava って言うんですけれどね。竹みたいなもんですね。やっぱり時期が来ると(花が)咲きますね。一回挿したら三年くらいは使います。(トマトは一年に)二〜三回作れます。

この倉庫に、畑からは紙の箱だと傷んでしまうから、木の箱で持つてくるんですよ。これはナスかなんかね。これは当時の箱詰めしてる時の写真。大体同じ頃ですけど。確かもう四十年くらい前だったと思うなあ。これは僕の親父ですね。冷蔵庫はいくつもあるんですよ。

たくさん人夫(使用人)がおったからね。それを日本人がみんな監視してたの。多いときには(人夫が)二千くらいおりました。三十か四十人くらいに一人、その監視役付けて。

リモシードはもう枯れちゃったね。コストリカから持つてきて僕が植えたの。レチョーサ(パイヤ)、プラタノ(食用バナナ)もあったの。はじめはこんな風にマンゴーも小さかった。いろんな種類があるの。十種類くらい植えたみたい。トラクターで消毒するんです。これはパイヤを頭に乗せて収穫してる。この当時の人夫はみんなドミニカ人。アグアカテ(アボカド)もいろんな種類があるの。レモンもたくさん植えてあった。

ブドウも作ってたんだよ。だいぶん植えたの。熟れてくると色が変わってくる。ブドウの苗を作つて挿し木にするんです。大事にね。ブドウは大変だよ。花が咲く時はびっちり咲くんですよ。小さい粒で沢山なる。それを摘果せないかん。良いだけ残して、後は落としていく。ブラジルに行ったんですけれどね、見にね。ブラジルは人夫たちがみんなやるんですよ。ドミニカは出来ない。ドミニカ人は(よい実を)選べないの。慣れてないし、手がぶきつちよなのね。それで、二・三人の人に教えてやるんだけど、間に合わなくてももうやめちゃったの。買って食べたほうが良いって言って。剪定もあるんですよ。そうすると新しい芽が出てくる。慣れると簡単なんだけれどね。良いブドウができるの。ブラジルの技師が来て教えてくれたの。ブドウって寒いところしか出来ないと思つてたけれどね、暑いところでも作り方があるの。剪定の仕方出来るんですよ。

当時、農業の会(ドミニカ日系人農業経営研究会)があつて、ドミニカの農業移住者の発展のために、JICAがいろいろ援助して、ブラジルから農業技師が指導に来てくれて、ドミニカ中を回つてくれてたんです。(農業の会の)初代会長は丸山一美さん。二代目会長が高吉勝実さん。三代目会長が宝代巖さん。四代目会長は私。五代目会長は廣光正照さん。私は五〜六年やりました。



これは一九八七年。確か二回目かなあ。山形に行ったんですよ。世界中の農業やってる人が山形に来てね。新聞に出たから、いろんな友達を送ってきてくれたんです。当時四十四歳。若かったなあ。

コルマド(小さな食料品店)をした経緯は？

これはね、フアンティーンに引越して間もなく、事業団(工団)の千葉所長が訪ねてこられた時の写真です。床は腐って穴だらけの掘っ立て小屋の我が家を見て、そおっと家の中に入って、「生活は大丈夫ですか？」と、話をしに来てくれたんです。

この家もみんなおじいさんが作ってくれたの。私たちが住んでいたフアンティーンの商店街に、当時古い大きい倉庫があつてね、カカオを乾かす倉庫だったんですよ。倉庫だからガラーンとして仕切りも何もない。そこを借りて、おじいさんが色んな製材所で羽板を安く買ってきて、牛小屋みたいに仕切つて、部屋とか、炊事場とか居間とかを作ったんですよ。

コルマドはね、おじいさんがそういうアイデアくれて始めたの。生活が苦しいから、コルマドみたいな店でもやったら食べていけるから、ここにコルマドでもやろうっていうことで、おじいさんが言ったんです。それで、恵美子(妹)がその店を一人でやって。僕と親父とお袋は農業をやってたんです。でも、そのお店の運転資金を使い込んだりして(笑)。

お店の運転資金を使い込んだ理由は？

川の流域には、川が氾濫する度に、上から良い土を流してくるでしょ。それがたまったところを蓄積土壌っていうんですけどね、そこは作物には凄くいいんですよ。そういう所ばかり選んで(作物を)作ってたんです。でも今度、すごく雨が降つてね。雨が降ると上から水が氾濫してきて、みんな流されちゃう。作物が流されると収入がなくなっちゃう。それで、次の作付けするにはお金がないわけですよ。そうすると店からね、恵美子が持つてる少しの店の運転資金を回してもらつて、また(作付けを)やるんです。すると、また水に流されてね、店の運転資金を使いこんじゃった。妹がね、「もう何もせんで、店の資金でどんどん損するんだつたら、店は店で食べていくくらいできるから、家でじつとしとけ！」って言うわけです。だけど、大の男が家でじつとしてるわけにはいかんですもんね。店におつたら細かい商売ですよ。私もたまには店を手伝おうと思うんですけど、お客さんと喧嘩をしたりしてうまく出来ませんでした。やっぱり大の男はそういうの出来んですよ(笑)。



それでも農業を辞めなかったのは？

一回も二回も三回も続けて(収入が)なったことがありますよ。その時に、自分で体験してるので、初めは希望と「大丈夫だ！」っていう気持ちで作付けするんですけど。それが何回も何回も流されるとね、もうあと信用できなくなる。自分に自信が無くなってくる。これやつてもまた雨期になったら、川が氾濫してまた流されるんじゃないかと思ってるね。仕事に身が入らんのですよ。でも、作物はちゃんとそういうのをキャッチするんです。分かるんですよ、作物もちゃんと。自分が一生懸命管理しないで、あやふやで管理するでしょ、すると作物はそういうことちゃんとキャッチして、ちゃんと育たないんです。手を抜いてるから。それで、もう駄目じゃないかと自分の心の中で思ってるんですよ。でも反対に、みんなに励まされて「今度は大丈夫だ！」っていう自信を持って、愛情をもって作物を育てると、作物は分かるんですよ、ちゃんと。作物がすくすくと育つんです。一生懸命草取りしたり、ちゃんと肥料やったり、水かけもちゃんとしたり。愛情込めて接するんですよ、作物に。そうするとちゃんと応えてくれる。その時に、ちゃんと感じさせられましたよね。「ああ、これは外のせいじゃない、やっぱり自分の気持ちがいرونな面に反映していくんだ」っていうことを教えられました。本当、作物が応えるんですよ、ちゃんと。伝わるんです、それが。

また別な時にはね、ちょうど二つ(川が)ぶつかって合流してるところが川下の方にあるわけです。その上の方が土地が良いんです。そこでトマト作りかな、出来てたんです。当時住んでた家は、それから何十キロも下の方だったけどね。そこにどんどんどん雨が降ってきてね。川が氾濫してね、全部水浸しになったんですよ。これはうちの畑のあたりはもう駄目だろうと思ってるんですけどね。生活が懸かっているから、なんとか助けたいと思ってるね。あの時は一生懸命祈りました。それ(畑の作物)が無くなったら生活できません、家族が。そして、次の朝早く行ってみた。そして

ら、うちの作付けしたところだけがポツンと残ってる。それは感激しましたね。そこだけが残ってる。他は全部水浸しでね。これが最後の命綱だと思ってる。本当にそうだった



んですよね。自分の本当の強い心は、色んなことに通じるんです。そういう経験は、まだいくつもありますよ。それから、また、ちよっとピリッとした唐辛子があるんですよ。ドミニカではあまり食べないですけどね。それを輸出用に、川の低いところで作っとったんですけど、その時も、そこだけが助かった覚えがあります。他は全部ダメになったから、それがすごい高値で売れたんです。

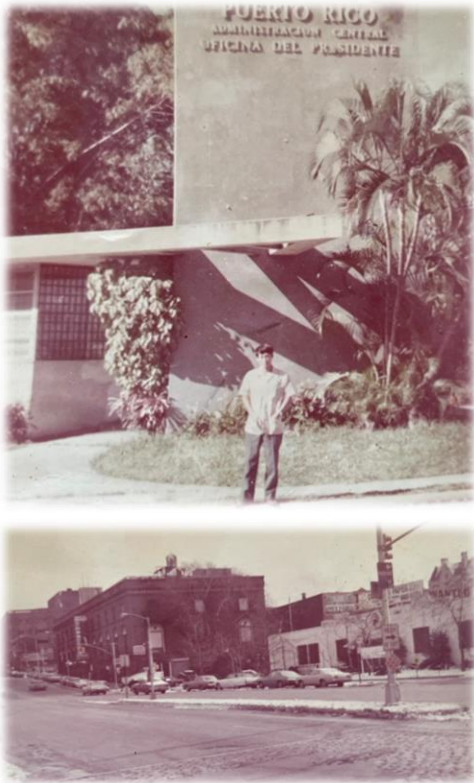
だから、自分の運っていうんですかね、運は自分で作るもんだと思いますよね。悪いにしろ良いにしろ、自分たちは毎日色んな瞬間瞬間にそういう運を作ってるんですよ。だから良い運を積んでいけば、そういう福運が自分についていくわけですよ。だから、いつもいい心掛けをしとかなないとね。それは、一番子供たちに伝えたいんですけど。子どもたちがそこに到達するまでには、まだ自分の生命の濁りがあつて、理解できないんですよ。やっぱりそういう良い運を積んで、福運が切れたらもう何をやっても良い方に行かないですよ。また、反対に、自分が福運を持ってれば、どんな環境でもいい方向に向いていけるしね。自分次第ですよ。福運というのは本当に大事なものと思います。

輸出業を始めるきっかけは？

当時のドミニカは、野菜を食べる習慣が少なかったんです。苦勞して作った作物を市場や野菜輸出業者へ売りに行っても、商人から安くたたかれたかればなしで儲からなかったの。それで、いつか自分で外国へ輸出したいと思うようになったんです。

一九七二年に、取引をしていた業者がニューヨークに行くと言うので同行させてもらったんですけど、プエルトリコに着いたら用件が済んだと言って帰ってしまったんです。生まれて初めて飛行機に乗って、英語も全然分からなかったけど、せっかくここまで来たんだから、勇気を出して一人でニューヨークへ行く事にしたんです。ニューヨークの飛行場に着くと、雪で真っ白なんです。ドミニカは年中暑いでしょ、オーバーも何も持ってきてなかったんです(笑)。寒い雪の中、半袖で取引先を探して歩きながら名刺を配りました。

ドミニカに帰国する飛行機の中で、朝方、太陽の光が差してなんとも言えない気分でした。この時は、「やっとこれから頑張れるんだ、うまくいく！」というエネルギーを感じたのが忘れられません。その時のエネルギーから全てが始まった気がしますね。自分の気持ちがいっかりしてきて、自分に自信がついてきたみたいでした。ニューヨーク



クに半袖で行って、あちこち訪ねて苦勞したから、自分の目先が開けたように思いました。自分の意思と力だけでやってきたから、自分に自信がついたみたい。そこから色んなことが変わってきて、まさに人生の出発だったと思います。

取引先は見つかりましたか？

はい。この時、ドミニカ国出身の業者と取引きするようになったんですけど、田舎者の初めての商売ですよ、うまいこと騙されてすごい損をしました。後からニューヨークの友達のお兄さんが、会社の弁護士を動かしてくれて、騙した業者から七割お金を回収してくれたんです。お金が返ってくると思わなかったんですけど、大きな会社の弁護士はすごいですね。

輸出入が成功するまでの期間は？

十年くらいかかりましたかね。最盛期の時なんて夜寝ないで。そうしないと損しちゃうですよ。野菜だから傷んじやうんですよ。出荷するのはいつも朝方。夜中に出荷するんですよ。朝方三時四時頃(野菜を)積み出すんです。人夫がね、「もう時間だぞー！」って呼び来るんですよ。起きれないんだけど、やっぱり起きて(野菜を)出さないとね。飛行機は時間がくると待たないですから。時間に合わせて全部持っていくんですよ。大変でしたよ。それが毎日だもんね。日曜日でも忙しい時ありました。そういう面で、子ども達の事は全部光子(妻)に任せっきりだったもんね。教育も全部。僕の場合は仕事も仕事だったでしょう。仕事の奴隷だったもんね。自分の意思で動くんじゃないで、仕事によって動かされてたみたい。やはり、仕事の奴隷になると良くないですよ。家族を犠牲にするし。あの頃は分らんかった。目の前に迫ってるでしょう、やらなきゃいけないことがね。どうしてもそれやらないと損するからね。

野菜を輸出するために

サントドミンゴとプエルトラタの飛行場にも、Agencia de Carga っていうんですけど、荷物を斡旋する施設を持っていました。ドミニカ一大きかったですよ。大きな鉄骨で作ったもので。今でも、倉庫が飛行場にありますよ。

野菜を輸出するときに、飛行場に冷蔵施設がないわけですよ。ラベガから飛行場まで冷やして持っていくでしょ。そこから飛行機に積むまで四〜五時間くらいかかるんですよ。その間、(野菜を)炎天下に置いてあるの。冷たいやつを熱くすると、濡れちゃうんですよ。濡れると腐ってしまうんです。それを



解消するために、飛行場に大きな冷蔵庫を作って、それで飛行機に入れる直前まで冷蔵庫に入れてあったんですね。ニューヨークの業者も一緒に資金を出し合っただけです。航空会社からドルでコミッションをもらえるから良かったんですけどね。輸出の仕事を止めた後もやってきましたけど、管理する人がいなくてね。責任者がいないんですよ。今持っていれば良い商売だったんですけど、それも手放しちゃいましたね。やっぱりめっちゃくちゃに手を広げてもダメですよ。人材が揃わないとね。無駄なこともいっぱいありました。

最初はこんな事務所だった。これは実の長男、これが孝の長男。EXPORTADORA JAPONESAっていう会社ですね。初めはニューヨークへの輸出から始めたの。それからカナダ、だんだんとヨーロッパの方にね。

これはニューヨークで一番最初に取引した中国人の商人。このサバネータの倉庫に見に来たの。一番最初に取引した人。三人来たんですね。彼たちがニューヨークで受け取って、店に売るんですけどね。自分のものがどうなってるか、とさきどき見に来るんですよ。

これ、野菜やってる当時の、フロリダでのね、Boca Ratonという拓けた町で、そこで約六十タレアくらいの敷地持ってたの。VALLEY VIEWって会社に野菜を輸出してたんですけど、その会社がこの敷地を持っていたんですけど、その敷地のお金が払いきれなくて、土地を取ってくれて言って。うちは土地を受け取って。いくらか(土地代を)払わないといけなかったんですけどね。土地をもらったの。当時はこんな田舎だったけど。今はもう街の真ん中になりましたよ、どんどん拓けてね。今持ったらすごい財産だったかも分らんけどね。その周りにはね、アメリカの大金持ちの別荘があるんですよ。だけでも維持しきれなくてね、とうとう売っちゃいました。

輸出をやめたきっかけは？

スリップという害虫被害もあるし、だんだん清算が合わなくなってきたね。ドミニカ人がどんどん(野菜を)作ってね。安く売るもんですからね。



スリップの被害は？

何度も収穫した野菜の廃棄処分をしました。もっと強い農薬を使っても、害虫が農薬に慣れて免疫がついてきて、農薬が効かなくなるんです。ドミニカ政府としても、(農作業を)中止されると困るんですよね。アメリカの農林省と交渉して、技師を呼び、ドミニカ政府が一生懸命対処しましたが、どうにもならず、輸出が出来なくなりずいぶん困りました。

今その農地は？

持ってますよ。砂利を掘り出してますから。

そこから碎石業に入ったんですか？

はい。家族も大勢いるしね、使用人もたくさんおるから、何かやらないと食べていけないわけです。やっていけない。だから何をしたらいいかと思わずにぶん悩みましたよね。それであるときね、農場の下に砂利があるのを見つけてね。それで、ドミニカにそういうことやってるオチョアという会社があったから、同じようにしたらいいんじゃないかって、そして始めたんですよ。そういうことを構想してから(始めるまで)二年くらいかかったかな。(輸出の方も)ぼちぼちやってみましたけど、もうどうにもならなくなってるね。やっぱり人間っていうのは困ったときには無我夢中で、何か出来るもんですね。新しいことをするってことは本当に大変なことですよ。仕事を變えるってことは。一から、やっぱり三年かかりますよね、軌道に乗るまでは。

オチョアはドミニカの財閥でしょ。こちらを潰そうとかかってくるんですよ。全部建築資材に使う原料ですから、「日本人の品物はダメだ！こんなんで作ったら家や建物はすぐ潰れる！」っていう宣伝をするんですよ。それに立ち向かって大変でしたよ。ただで試験してくれて言って、建築会社とか(資材を)持って回りましたよ。始めは、弟の実と一緒に。孝は後から入ったんですよ。(孝は)農林省に勤めてたんですけど、僕がこっち来いって言ったんだよね。農林省って給料でしょ。給料はやっぱり毎月一定の収入しか入らないでしょ。だから「仕事一緒にやろう」って言って。うちも必要だったからね。だんだん(会社が)大きくなってきてね、手が間に合わなくなってきた。

軌道に乗るまでの三年間は大変でした。機械も毎年少しずつ買い集めていきました。その機械が高いんですよ。莫大なお金かかるんです、一台買うのにね。この方は、当時の JICA の所長さん。ちよーど砂利の仕事を始める時だったかなあ。お金がなくてね、機械が一台欲しいから、融資してくれって頼んだんですけどね、「あなたより(資金が)必要な人がたくさんいる」って言って、融資してくれなかった。今は(その機械も)随分ありますね。休む暇はなかったです。今の子どもたちはそんなこと知らんの。考えがもう違いますよね。今考えると、何のために働いたのかなあと反省してますよ。



お子様との関係について

ここ(ドミニカ)の習慣がね、全部が全部悪いんじゃないですけどね。光子(妻)がいたら違うね。母親と父親とはやっぱりあたり方が違うから。心の中ではいつも相談するんだけどね。光子だったらどう考えるかなとか、(子ども達に対して)どんな対応するか、とかね。

色々考えると、ただ仕事してお金を儲けるだけが人生じゃないなと…。若いときには、生活に困ってたでしょ。それに苦しめられたからね。だから一生懸命働いて、なんとか苦しい環境から抜け出したいと思って、夢中でやったんだけど。それだけがやっぱり人生じゃないみたいね。若い時ってそういうこと分らんもんね。余裕なんかない。母が、私に最後の頼みとして、残った家族を心配して、「則男、あと家族を頼む」と、息を引き取ったんです。その約束を果たす為、一生懸命頑張りました。

過去のことはいいけど、これからね。自分の子供たち、後継者がちゃんと育ってないんですよ。しっかりして継いでいくっていう、それがいいんです。自分の代でこれが終わっちゃうんじゃないかなあと心配してる。分かっちゃんとついてきてくれると嬉しいんだけど。ダメだつて諦めたらそれきりだし。育った環境がみんな違うんだもんね。自分の育った環境と全然違うんです、息子や孫たちは。だから後継者に、それをどういう風に伝えていくか。価値観をどう伝えていくか。難しいことですよ。

最後に：(則男様からのお手紙より。)

これまでの人生で嬉しかったこと苦しかったとは？

我が人生を振り返ってみて、嬉しかった事、苦しかった事、数々在りましたが、やはり家族の発展の基礎となった、当時家族が食べるにも事欠く逆境の中、生活の向上を目指して、色々な事に挑戦した数々は、今も命に刻まれて居ます。

中でも忘れられない挑戦があります。自分達の生産した農産物の販路を求めて、田舎者が生まれて初めて飛行機に乗り、一月の真冬、夏の服装でニューヨークへ市場調査に行きました。無知と不安の余り、途中 (Puerto Rico) で引き返そうかと思いましたが、勇気を出して初めて自分で飛行機の手ケットを買って、雪で真白なニューヨークに着いて三日間販路を探し歩き回りました。やつと、ドミニカ出身の商人と商談(後に大金を騙される)を得てドミニカに帰る時、飛行機がドミニカの上空に差し掛かった時、朝日が島全体に輝いて、何とも言えない美しい光景を目にした時、自己に挑戦して満足感を感じて居たのか、「よし！これから頑張るぞ！」と勇気と確信を得られたあの時の喜びは忘れられません。今思うと、この時の戦いが、現在の基礎を築いた因を作ったのだと思っています。

もう一つの嬉しかった事と言えば、妻、光子と縁談が決まった時の事かなと思います。

苦しかった事、悲しかった事、数々在りましたが、やはり命に関わる心が一番焼付いて居ます。私の年齢になると、祖父母、叔父叔母、両親、義父母、妻、弟、親族、親友等、多くの方達の別れに会ってきました。特に、長年苦勞を共にした最愛

の妻との死別は悲しく辛いものでした。医師の検査で膵臓癌が発見され、すでに癌が体内に転移していてもう手遅れで、余命三ヶ月と聞かされた時は、強い衝撃を受け、妻はこの世から居なくなり、もう二度と会う事は出来ないと思うと、悲しみと残念さで男泣きに泣きました。日常生活の中で、病の前兆は有ったのですが、糖尿病だと勘違いして、その治療ばかりしていました。膵臓が癌に侵され、インスリンのコントロールが出来ない状態だったのです。私が仕事の忙しさのせいにし、病に気付いてやれなかった事が悔やまれます。

入院最後の日、自分の死が近づいている事を察知してか、生死をさまよう中、私に「さようなら」と最後の別れを言って、子供達にも、一人一人の名を呼びながら涙ぐんで別れを告げていました。「さようなら」と言う言葉も色々な場面で使われますが、二度と会えなくなる「さようなら」は、とても辛い、悲しい意味を含んでいます。人の命の尊さは宇宙の何物にも代えがたいものだと思えます。

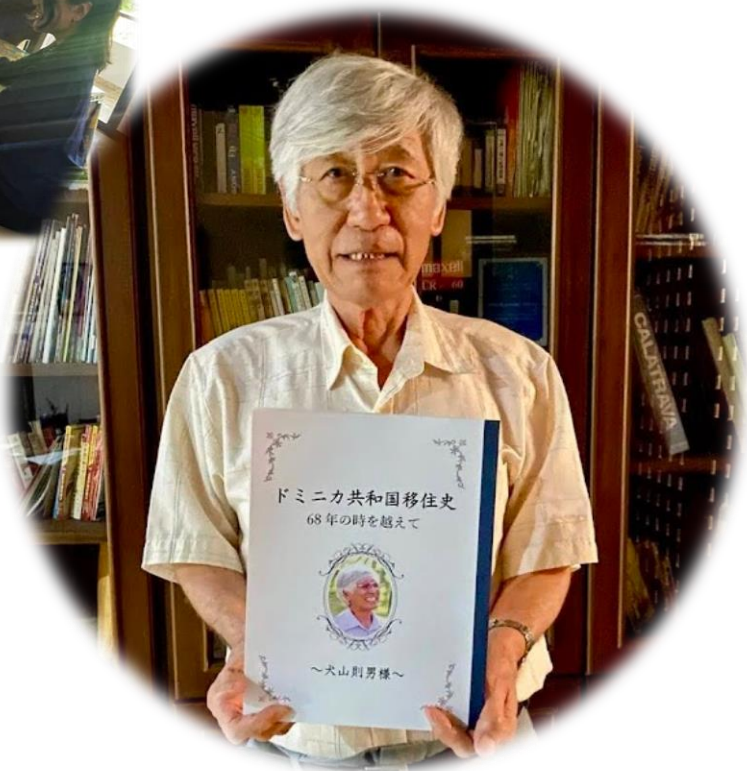
移住に対して

犬山家族は終戦前台湾に移住して、常夏の生活を経験しており、寒い北海道で年一回しか作物が作れない所より、いつでも作物ができる同じ常夏の国、ドミニカ共和国により良い人生を求めて再移住したのだと思います。当時、私はまだ子供だったので、両親と共にドミニカ共和国に移住して、家族の生活を支える為、一生懸命に働かなくてはいけませんでした。一世は皆、親の手伝いで勉強は出来ませんでした。

その苦勞を自分の子供達にさせまいと、ほとんどの一世の親達は、自分の子供達を大学に行かせ学ばせました。お陰で二世、三世の日系人の方々は皆、立派な教育を受けてドミニカ社会で頑張って居ます。一世の日本人特有の忍耐、努力と勤勉な働きはドミニカ社会に高く評価されています。日系の子孫達は、この一世の精神を受け継いで全員成功して頂きたいです。

法華経には「願兼於業」(がんけんおごう)の法理が説かれています。本来、修行の功德によつて安樂な境涯に生まれるべきところを、苦惱に沈む民衆を救済するために、自ら願つて、悪世に生まれる。と教えられています。

私達が日本からドミニカ共和国に移住して、現地の人々の中で苦勞して居る事も、ドミニカ共和国の人々を幸せにし、社会を良くする使命があるのだと確信して毎日頑張つて生きたいと思えます。





～ 浜田忠幸様～



二〇二三年四月二十八日 取材

浜田忠幸

- 一九四七年七月一九日 熊本県で生まれる
一九五六年十月二日 (九歳) 父 松男、母 トキと兄弟七人、合計十名でコンスタンサ第一次にて入植する
一九五八年 (十歳) ハラバコアに転住する
一九七二年 (二十四歳) 浜田京子と結婚 浜田家の養子に入る
一九七七年八月十七日 (三十歳) 長男 弘樹生まれる
一九八九年十月二日 (四十二歳) 長女 ケイコ生まれる

浜田忠幸様の住んでいらっしゃるハラバコアは、首都から車で二時間半離れた場所であり、日本より少し温かく過ごしやすい気候の土地です。忠幸様は、ハラバコアの日本人会会長をされており、「真面目でとってもいい人」と皆から信頼されています。相手を思いやる気持ちに溢れたとても優しい方です。物腰が柔らかく穏やかな口調で、移住当時の記憶を一つ一つ丁寧に話してくださいました。ただひたすら実直に生きてこられた忠幸様の人生を、妻京子様も含め取材させていただきます。

ご出身は？

出身は熊本です。熊本の菊池郡西合志だったんですけど今は合併して分からなくなってます。

子供の頃、日本での生活は？

熊本での生活は(ドミニカと)同じようなもんだったんじゃないですかね。戦後に生まれて、ちょうど一番苦しい時代に生まれ



て育ったので。それで、うちの親父が熊本の働いているところで、ドミニカに移住したければ申請出来ると言われて申請したんです。それで通ってここに来たんです。何故かって言うんですけどね、うちの親父はメキシコで生まれたんです。親父は志願して戦争にも行ったんです。それで帰ってきて、ドミニカに移住できるっていうのを見て、「自分たちは外国育ちで、日本の狭いところよりも、大きなところが好きだ」という考えで応募してみたんですよね。その時、おばあちゃんは亡くなっていたんです。だから僕は、親父のお父さんもお母さんほとんど知らないです。うちの親父が十代の時におじいちゃんが亡くなって、それで親父は、おばあちゃんと一緒に日本に帰ったんです。おじいちゃんは農業をしていたのですが、天然痘にかかったんです。おじいちゃんのお墓はメキシコにあります。うちの兄貴と親父で、一度(メキシコに)行きました。

ご家族について

うちの親父が(ドミニカに)着いた頃は、スペイン語も忘れてしまっていたんですね。何故かと言えば、十五歳頃までは(メキシコで)スペイン語ばかりだったでしょうけど、今度日本に帰って、こっちに来る時は、その後全然使っていないから忘れてしまっていたみたいです。ドミニカに着いたら、ちよつとずつ思い出して、ほとんど思い出して、皆の通訳なんかしていたんです。コンスタンサでもハラバコアでも、最初の頃は日本人はスペイン語が分からなかったから。

一番上の兄は電気の方を習ったので、一九六一年トルヒージョ元帥が暗殺された後、移住者が帰国をしたり南米に転住してしまっただんです。その時、うちの兄もそうだったんです。日本に帰って、で、務めてみたい。それでブラジルで日本の技術者が必要だというので、うちの兄はサンパウロの近くのダムに働いていたんです。兄は、ドミニカから日本、日本からブラジル。転住のタイミングで、長男、長女、次女が日本に帰りました。一番上の姉は九十一歳です。次女が去年米寿です。うちの親父なんかは死ぬのは早かったけど、姉さん達は元気そうです。

僕は日本に二回行きました。兄弟に会ったのは、一回はこっち(ドミニカ共和国)で会いました。姉たちは日本から結婚して一緒に来たんですよ。ドミニカに残ったのは、義行が一番上で、二番が立山宣子のお父さん、それと僕は三番目。一番下の弟の吉宗は百姓をしなかったです。だって僕と六歳も違うんです。

移住当時については?

私は一九五六年十月二日にコンスタンサの移住地に入りました。ちょうど九歳の時です。それで、僕たち子供達はすぐその街

のドミニカの学校に入れられたんですよ。三キロくらいあるところを毎日歩いて。危なくはなくて、自動車も殆どないし、歩いて学校に通学してたんですよ。

その時代は、トルヒージョ元帥がここの大統領みたくなっていたので、その(学校の)ノートにトルヒージョの写真が載っていたんですね。それを、その人(トルヒージョ)は誰かも知らないから、日本人が鼻ひげを描いたり、目を描いてあれしたらね、怒られないけど先生が真っ青になって、びっくりして。自分が教えてるもんだから、もしあれだったら(先生が)殺されちゃう。それで、校長室に呼ばれて叩かれました、みんな。一人残らず。もうこんな長い棒で。あれはね、物差しみたいなの。一メートルもある。あれでみんな足をバチバチ。女の子も皆叩かれたよ。

日本人は何も知らないっていうことで、助かったんですよ。ドミニカ人の子だったら親が大変なことになりますね。

コンスタンサでの生活は？

コンスタンサでは、五十タレアずつ配分されてもらっていたんです。でも、約束は百タレアってなっていたんです。ハラバコアも。(約束の土地を)半分貰えたのは良いけど、今度野菜を植えても売れない。これじゃ生活が出来ないってことで、その当時ハラバコアで移住地が出来るっていうので、そこはコンスタンサよりちよつと暑くて、野菜も米も出来るってことで、コンスタンサで約一年ちよつと過ごした後、ハラバコアに転住してきましたよ。

ハラバコアでの生活は？

僕たち一九五八年にはもうハラバコアに来ていました。ハラバコア移住地に最初に入ったのは、十三軒かな。コンスタンサの五十タレアは、ハラバコアに引越すために、その頃は売りも出来ないくらい安いので、置いてきたんです。

最初、野菜だけの時は全然安定してませんでしたよ。何しろ水路がなかったんです。それじゃ足りないって事で、一九七〇年に政府がこちらのもう一つの川をせき止めて、水路をこちらに持つてきて間に合うようになったんです。皆で言って、水が確かに足りないということ、こちらの水路が出来たらだいぶよくなった。で、ハラバコアの生活は、米と野菜を作っていました。

何年か過ぎた頃に凄く売れ始めて、今度は余計値段が安くなって、それを解決するのは難しかったですね。どこが何を植えてとか見ながら、今はあの野菜があんまり植えられてないっていうのでそれを植えたり、うちの親父達、移住者の人、みんな苦労したみたいです。

その間に、ハラバコアの場合は米に代わったんですね。ほとんどが米に切り替えました。野菜の場合は借地しながら。トマトを植えるならトマト植えるために他の地区に行つて借りて、ちよつとずつ土地を増やしていきました。トマトというのは連作ができないんですね。一回作ったら他の場所じゃないと、病気やら色々残つて出来ないんですね。「ここをこれだけ一年間貸してくれ」と言つて、ドミニカ人から土地を借りながら。

ハラバコア移住地の様子は？

八十家族以上になったんです。それで結局同じ(野菜の値段が下がる)ことになって、その後ハラバコアでは野菜じゃなく米を植え始めたんです。米は安定性があるんで。そんな売れなくて儲からなくても、自分たちもそれ食べてきてるし、生活がまだ安定するようになったんです。野菜だけだったら、もう安定性がなかったんです。良いときはパーツと儲かるけど、もう値段がめちゃくちゃに安くて売れない、畑にほつたらかして、全然収穫もしないで置いてる場合もあったんです。

ハラバコアでの幼少時代は？

ハラバコアにきて十歳ちよつとかな。半日は学校で、半日は親父の農業の手伝いね。学校から帰つてきて、昼ご飯食べて畑に行つて、色々な手伝いをやつてたんです。力があんまりいらぬ、子供や女性が出来るような仕事。例えばトマト売つたり、野菜洗つたり、選別したり。傷んでるとか、サイズに分けたり、悪いのを捨てて良いのをこちらとか、箱に詰めていったんです。小学校の時は夕方の五時か六時まで手伝っていたんです。

十五、六歳の頃から、うちの親父なんかと一緒に借地して、ハラバコアから十キロくらい離れたところに、田舎の方に行つて回つて、川からポンプであげて(トマトを)作つてましたよ。水路がないからポンプも自分たちで買つて。移住地には水路があつたですけど。コロニアの時は米を植えて、トマトとかナスとか野菜は借地で植えていたんです。

最初の頃は、ほとんどの人が野菜を植えていました。コンスタンスでも。それで、野菜はこの国は、あんまり食べるのを知らないで、売れなかつたんですね。一番売れてたのはキャベツみたいで、キャベツをリヤカー一台でちよつと持つて行けば、それで余るくらいだったんです。

(ドミニカでは)ほとんど(野菜を)食べなかつたです。「これはサラダで食べるんだ」と言つて、皆に教えながら、見せながら、皆が覚えて、だんだんと食べるようになりました。トマトも同じです。

「両親の生活は？」

うちの親父はトラックでサンティエアゴとか、色んな所に（野菜を）持って行ってたんです。日本からダイハツの二トン車を持ってきてたんです。何年後かは売れるようになって、アメリカ車のフォードの自動車を買って（野菜を）売ったりなんかしてたんです。最初の頃は作物が売れなく凄く苦労したんです。

うちの母はリヤカーで野菜を売ってたんですよ。夕方には必ず、持って行くのに選別したり、洗ったり。その時は、移住してきたばかりで、皆お金がなく苦労してたんですよ。それで皆手伝って何とか（生活が）持つようにやって、色々手伝いました。

移住後、人生を振り返ると？

僕は午前中は学校、午後は畑仕事を八年生までやりました。十歳から、僕の人生は農業をやってきたもんで。結婚後は独立して、浜田家に養子に行っただんです。また農業をやって、ずっと農業です。（忠幸）二十四歳、（妻 京子）二十二歳で結婚して、まあまあ、喧嘩もしながらやっています。

妻 京子

忠幸様が婿養子に来てくれたことについて

浜田家には三人娘がいて、お母さん達が男の子が欲しいって。（三人目）男の子が欲しかったそうです。私が生まれたときに女の子でガツカリしたっていうことを教えるんですよ。お母さんがね、（忠幸を）息子に欲しい欲しいって、小さいときから言っていた。浜田家の跡継ぎとして、頭下げて（忠幸を）もらいに行っただんです（笑）。

（夫は）凄く働いてくれてですね、浜田家のために一生懸命働いてくれて、お母さんも安心して亡くなっていききました。九十八歳まで長生きしました。一番終わりにベッドで寝たきりだったんです、二年間ね。うちの夫の名前ばかり呼んでました。頼りにしてね、自分の息子だと言ってるね、「男の子できた！ 良かった！」って、喜んでね。

死ぬときまで、私の名前言わないんですよ。この人（夫）の名前を呼んで呼んで、死んで逝きました。いつも私は感謝しています。浜田家をね…。

（話すのは）初めてです！ それほんとの気持ちです。





～向井猛様～



二〇二三年一月二十七日、二〇二四年一月一五日 取材

向井猛

一九四七年八月二日

山口県で生まれる

一九五八年六月二十七日（十歳）

両親、妹、弟二人、祖母と七名で第二次隊にてアグアネグラに入植する

一九六二年七月

（十四歳）

家族でアグアネグラからダハボンに転住

向井猛様は、首都から約三〇〇km離れたハイチとの国境近くにある最初の移住地ダハボンに住まれており、ダハボン地区の日本人会会長をされています。私たちボランティアが出張でダハボンを訪れる際は、いつも移住者の方々への日程調整を行ってください、ボランティアに何かあればいつでも駆けつけてください。私が初めてダハボンを訪れた際は、ダハボンの街を一日かけてご案内してくださいました。また、首都で日系行事があると、どんなことがあっても、ダハボンからバスで六時間以上かけて日系行事に参加される、忠実で優しい方です。取材を通して、自分で選んだ道ではない人生の中で、ご自身を犠牲にし、家族のために尽くし続けた向井様の生き様に触れることが出来ました。「生きてるのが一番」と、笑顔で語る向井様の背景には、言葉にならない程の苦しい時代があったことをお話ししてくださいました。どんなに辛いことがあっても、命があるだけで幸せなのだという事、生命の尊さを学ばせていただきました。

ご両親について

お袋の方は優しくかったというか、半放任みたい。厳しく叱られたことはないなあ。親父は短気な方だった。気が短い、すごい。パツと言ったらパシーっと叩かれた。日本での話になるんだけど、親父に「風呂焚け！」って言われたの。漫画見てて生返事で「うん、うん」って返事だけした。全然やってないわけよ。「何とか言わんか！」パンパンパンと、往復ビンタ。だけど、映画なんかにはよく連れてってもらった。あの頃の映画といえば、娯楽の一つだから。だけど、約束を破ったものは怒ったねえ。



親父は愚痴をあんまり言わん人だったなあ。料理上手いんだよ。母親の方はダメなんだ。最初、ドミニカ人をお昼ご飯に招待したんよね。ほいで砂糖使っちゃったわけよ。ドミニカ人は料理に砂糖使ったら、その当時は食べないから。「日本人は砂糖使う。せつかくの料理を砂糖使つて台無しにして！」て……。でも知らんもんね。せつかく喜んでもらおうと思つて作ったのに。親父は料理が上手だから、こういうときみんな親父が作つてんの。だいたいお正月とかなんとか、みんな親父が作つてんの。どこで親父は覚えたんか知らんけどね、一つには軍隊で炊事当番やつて、まずい飯出したら上官に往復ビンタされる。そこで料理の勉強したんだらうな。元々好きだったのかもしらんけど。

よく軍隊で経験したことを話してた。叩かれた話とか。衛生兵とかもやつてみたい。だから少しの医療知識もあったよね。高田浩吉つて知ってる？ 俳優。その人と軍隊で共演したことを自慢してた。高田浩吉は二枚目スターで俺は悪役だった。そして、やつて、見るのはアメリカの倉庫でしょ。通訳が入つて説明してからやるから、テンポ遅れて拍子抜けするつて。

兵隊に行つた後、ビルマから命からがら帰つて。本当かどうか知らんけど、帰つた時にはボロボロの格好で「よっ！」と顔覗かせて、「ギヤァー」と言つてお袋がびっくりしたらしい。

日本にいるときも、親父は青年団の演劇の演出なんかやつてた。で、僕なんかよくついて行つてた。親父は、浪曲を聴くのが好きだから、やつてくれとは言わんけど、そばに座つてジ〜っとしよつたら、「お前、また浪曲やれ言うんか？」言うて。僕もできんこともないんだけど。そんなにやつたことないよ。この前の敬老会の時やつたんだ。一分間浪曲言うて、僕らオリジナルの。作つたんじゃなくて、民謡みたいなのがあつて、それを自分流にアレンジした。

妹がいるときに親父が亡くなつて。それから、妹は嫁いでハラバコア行つたんだ。妹が結婚した時は、僕と母二人だけだった。それから二〜三年して妹が戻つてきて、妹の面倒を僕が見ることになつたんだよね。

親父は(ドミニカで)農薬中毒と医者 of 誤診で亡くなった。心臓疾患と間違つた。心臓が弱つてのを農薬のせいと思わなかつた。本当の理由は農薬。母さんは敗血症つていうのかなあ。だから輸血せんといかん。最期は転んじやつて頭打つたんな。血管が、毛細血管つていうの、弱くなつて。だけどそれまでは元気だったんだよね。一回病氣になつて、おなかに水溜まる、そんな病氣。ちようど日本人のお医者さんがいた頃。ダハボンの病院に入院して、何日か。それは治つたね。それから割と元気だったんだよね。で、八十二、三からダメ言うか、遠近感も悪くなつて。やつぱり寿命かなあ。

親父が亡くなつた時は、JICAで借金して土地買つて野菜植えてた。弟なんかは自分の近くにいて、親父の手伝いなんかはもちろん。結局長男つて言うのは、お金がある家の長男はいいけど、お金がないとこの長男は犠牲ですよ。男なんかは家から出て行つて自分の仕事をする。私なんかは最初山中さんの精米所で勤務して、自分で覚えて独立したの。で、サトシ(次男)は最初、白木さんの工場で溶接覚えて、サントドミンゴの会社に入つて、何年かして独立して、今に至る。だから下の弟なんかは親をみることもいらんから、自分だけでやつてる。

移住のきっかけは？

広告で一攫千金を夢見たわけ。その時山口県にいた。その前に、ハワイで一攫千金やってた人がいたらうれしいんだわ。だからダハボンの人たちは移住する目的で行ってるけど、我々なんかは出稼ぎする目的で行ってるらしいんだ。だから僕は日本の義務教育の教科書、国語、算数、何冊か持って行ってたんだよ。元々親父は戦後、農業だけではやっていかれんから、市役所の管轄なんだけど、人が嫌がる仕事やってた。僕らが日本を出るまでは景気悪かったから。

お母様はドミニカ行きについて反対ではなかった？

お袋は逆らわない。逆らったのは祖母。ほんとを言うと、母の叔母ね。母は養女。その祖母が(ドミニカに)行かなければ、日本政府からOKが出ない。一家族のうちに三人仕事する人がいなければいけなかった。だけど祖母は年だからそんなに働けるわけじゃないでしょ。で、僕は子守をやるということでOKになったみたい。だから僕が家事をして、弟の子守をして、母と父が働く、ということ(ドミニカ行きが)OKになった。祖父はいなかった。祖父は早いうちに死んだらしいね。

ドミニカ到着後は？

ドミニカの港まで行って、サントドミンゴ(首都)で、日本から持ってきた荷物をトラックに積んで、それでそこからバスに乗ってアグアネグラ(移住地)に行つて。移動中、「立小便はしてはいけない」って言われて。でも、子どもみんな途中でおしっこしたくなったのよね。で、しゃがんでしたんよ。後から聞いたたら、「どこにでもおしっこをしてはいけない」という意味で言ったらしいんだわ。子どもらは正直に「立っておしっこしてはいけないんだ」と思った。あれは一つの傑作だったと思う。今思うと面白い(笑)。そのとき覚えてるのはね、途中でお昼が出たんだよね。お昼って言ってもパンだけ。そこでアルタグラシア行くのとアグアネグラに行くのに引き離されるわけですよ。そこで言葉分からんし、僕の弟はまだバスに乗ってたと思うんだけどね。ばあさんは乗ってなかった。僕も乗ってなかった。だんだんバスが行きかけるんだけど、「子どもが乗ってます！」とかなんとか言うけど、向こう(ドミニカ人)には分かるはずもない。どうしようかと思っていると、そこに、第一次の内藤さんという人が飯屋まで迎えに来られた。もう、日本人に会ってホッとして。それからね、道をぐいぐい登っていくわけだ。どこまで行くんか、だんだん心細くなってからね。コロンビア(日本人移住地)に着いて、家が建ってるから、それまで民家が全然ない中ね、やっと来たなっていう気持ちだったね。



アグアネグラ到着後は？

その晩は、与えられた家に入るわけですよ。そんでね、夜中に変な声が聞こえるわけ。「何あれ？」言うてね。昼間も鳴くんだらうけど、ここら着いたのが夕方の六時頃だったと思うから、夜中になるでしょう。ほんで、家の中に入って、その声に、なんだこれ、どんなあれなんだらうって。声だけ聞こえるから、どんな猛獣もおるんかと思つて。聞いたことない声だった。明くる日に「なんだ、これかあ」と思つて、ロバ。知らないことは怖くないというか(笑)。

コロニアは、移住地の前はギネオ(バナナ)畑になつてゐるわけ。持ち主がおつてね。それでね、裏山をちゃんと除草するため、草の中に生えてゐるアビチュエラ(豆)の苗を、野生と思つて引っこ抜いてね。怒られた怒られた。軍隊の屯所みたいながあつて、その人なんか植えてみたい。でも、まあ、全然そういうこと知らないから、みんな野生のもんと思つてね。

ある日ね、坂から(人が)曲がつてきて、真つ暗い中、本当にもう、たまげて。ハイチ人の(肌の)色ね。(ドミニカ人よりも)つと黒い。最初はまあねえ、初めて見る色だから怖い(笑)。

その時、何歳ですか？

十一歳になる前。

日本語学校について

恐らく僕が五十八年に来て、次の年に日本人で日本語学校作つてんの。学校作つたわけじゃなくて、組織を作つた。一次か二次でアグアネグラの方に(学校の)組織を作つて、そこから先生を頼んで(授業を)やつてもらつたつていうね。恐らく、ダハボンは五十六年に来て五十八年、二年ブランクあるんですよ。僕らはアグアネグラに五十八年に行つて、明くる年には設立してる。早い。その時の先生は、一番若い人が上原君なの。一番若かつたの、先生の中では。僕の五・六年生の受け持ちが内藤さん。一・二年生はね、鮎川さんつて言つたかな。五年六年を内藤さんがやつて。中学一・二・三を中村さんつて言つたかな、担当してた。

現在の日系社会の日本語離れについて

それはね、しようがないと言えましょうがないけど、やっぱり寂しいよね。日本の企業なんかでも来たりしたら、もつと違ふんだらうけど。日本語覚えても「どこで使うの？」となる。直接メリットにつながらないじゃない。もう今、実際日本語を後世に残したいつて思つてゐる人つて、あんまりいなくなるよ。七十代はまだあれなんだけど、こつちの生活が長くなる

と、あんまり：なんじゃないかな。と言いながらね、おかしな現象が起きてるわけよ。その当時、日本語学校に行ってた子どもは今、四十、五十代になってるんだ。自分らのはあんまり勉強する気がなくても、孫にはやっぱり勉強させたいという機運が出てきてるわけ。それがちよつと不思議な現象なんだけど。自分らは途中で（日本語学校を）辞めた子もおるけど、自分の子どもには卒業させたいって思ってるのが多いよね。親の考えが改まったのか。

それは日本人としてのアイデンティティを保つため？

そういう風になったのかもしれないなあ。親の教育だったのか、自分らの考えが改まったのか。

周年記念日について

もう一つね、（アグアネグラで）際立ってるのは、周年記念日。周年記念日でね、演劇会をやった。他のところもやってるかも知らんけど、僕の知る限りでは演劇会やってる、剣道や踊りとか、そういうものでね。本格的な劇をやったのはアグアネグラだけじゃないかなあと思うんだよな。僕は、アグアネグラでは全然何もやってない。見るだけ。親父がね、演出して。あと、東野さんという人がやってたね。（東野さんは）もうどっか行ってる。アルゼンチンかどっか。日本に帰ったんか、どうかよく分からん。

入植当時の仕事は？

親父からもらった土地でコーヒー植えたり、コーヒーもいんだり、トウモロコシ植えたり。コーヒー自体はあまりないから、コーヒーも何十本かは植えるのは植えたよ。別に難しくはないけど、一年に一回収穫だからね。

アグアネグラで農業するのは難しい？

難しいわねえ。約束通り、あのコーヒー園をもらってたら良いんだろうけどもね。雨次第でしたもん。親父なんか土地を与えてもらえないからね、自分らであちこち捜し歩いてね、持ち主がいらないようなところをもらったけど。六十タレア…。そこに山小屋を自分たちで建てて。親父なんかは山小屋に住んで、僕はコロ



ニアに帰ってました。農業とかねえ、トウモロコシ植えたり、養鶏もやってたわ。でも売るとこないんだよね。だから、町まで売りに行かんといかんわけ。遠い…。

移動手段は？

馬。急いでいけば(町まで)三時間ぐらいでいけるんだろうけど、やっぱり四時間ぐらいかかったよ。コロニアから出て、途中のヤギなんかいるところに寄って。弟と二人で夜に。親父と行くこともあったんだけどね。弟と町に色々売りに行くの。弟と行って、行ったまでは良かったのよ。内藤さんが漁業やってて、その倉庫の一角を借りてたんだよね。だからそこに寝泊りできたんだけど、ちゃんと鍵が閉まつてるわけじゃないのよ。金もらって、その稼いだ金を財布に入れて、ぐっすり眠って、朝起きたら…。全部盗られた。誰にか分からんよ。でも、怒られるの覚悟で帰らんとしようがない。だけど帰るのに、やっぱりなんだか足が遅くなるね。トボットボツと。よっぽど怒られること覚悟して帰ったんだけど。堪えたよ…。せつかく売った金が全部盗まれちゃって。

他の収入源は？

売れるかな？ というものをぼちぼち売って生活費にしていた。うちの取得した土地は移住地より下ばかりなの。上に行かんとダメなの。僕らの親父なんかもらったのは移住地の下の方だったから、合わないんだよね、あんまり。気温の変化じゃない？ 標高が違ってくるから。移住地の上は若干涼しくなるし、それより下はだんだん暑くなる。アビチュエラはね、涼しい方が良い。でも、(他で収穫が)ないときに収穫するから、うちの儲けはよかったんだよ。博打だよ、いわゆるコンスタンサのトマト、ウリみたいに。一回はグンツと芽出ても、次は全然ダメ。博打のよくな栽培だよなあ。殺到してないけど、値段が上がったりするから、そういう時に収穫したらいいけど、そうじゃないときに収穫したら目も当てられん。賭け事よ。

ドミニカ政府からの補助金は？

それも長くは続かなかったからねえ。補助金が出る間はまだよかった。でも、最初の二年ばかりで後はもう、だんだん削られていった。それでも日本出るときに僕らが聞いてた契約通りだったら、補助金を切られてもやっていけるはずだったんだけど、全然違うから。そのうちに一時集



団帰国とかなんとかでバラバラになって。最初の（アグアネグラ第一次移住）が二十六家族か二十七家族か。そのうち七家族しか残らない。

ある移住者は、「これは国に帰ったらメンツが気になる」って言うんで、自分の金で帰った。で、他はみんな出て行っちゃって。最後まで残ったのが、内藤さんに、うちと、河原さん三家族だけだったな、確か。で、結局最後に残ったのが田畑さんか。でも、今はアグアネグラに住んでない。今は誰も（アグアネグラに）いないと思うよ。

その後の経済面は？

経済的に苦しかった。借金があったから。まあ、借金って言ってもJICAの…。JICAとドミニカの銀行に借金したんだよ。だけど、返せないから、少しばかりの土地を手放すことになった。その売ったお金で銀行の方に返して、ダハボンに来たんだけど。中々、こちらに来てからも思うようにいかないのよね。

ダハボンに来るきっかけになった人との口約束言うのが、その通りにいかなかったって、いろいろあって。JICAからも融資受けたりして、なんとか、なんとか生きてきたけど。その当時ね、親父が死んでから、四十九日も経ってないと思うけど、JICAの所長が来て「親父の借金はお前が返さないかんぞ！」って言って。ドミニカの銀行にも（借金が）あったけど、そっちの方は全然返す必要がなかったよね。だけど日本の（借金）は、親が死んだら子に回るから。なんとかかんとか払ったよ。払わされた言うかね（笑）。

ダハボンに来てからの生活は？

ダハボンに来たときは裸一貫できたのよ。何もない。来るのは来たけど、こっちに来てても、一つも何もないでしょう。まあ約束が守られてないからそうなったわけで、買ってくれる予定だった土地は買ってもらえんし。早く言えば約束した土地ではない他の土地をもらったんだけど、やっぱりねえ…。で、また泣きっ面に蜂言うか、きゅうりの輸出する話があつて、きゅうり栽培をやったわけ。で、きゅうりを収めたんだけど、お金を払ってもらえんの。詐欺にやられた。日本人に。だからその日本人を怒ったけど、「金が入って来ん」って。その日本人の上の人はドミニカ人なんだろうけどね。その日本人にお金が入ったんかは分らんわけ。規格外れのきゅうりをダハボンの町に持って行っても一個も売れん。持って帰るの馬鹿らしいから、みんな捨てて帰った言うて。

田んぼがないから土方もしたね。水路をあっちこっち作って、水路のセメント張りなんかしましたよ。やるのは親父で僕は手伝い。

ドミニカ人との関係は？

僕らの場合はあんまりそれほど付き合いをせんでもいいわけよ。だけど仕事関係ではね、やっぱりドミニカ人の中に入らないかん人もおるけど。僕らは最初の頃は話す機会もほとんどなくて、相手が畑仕事ばかりだから。それで、そのうち段々変わってきた言うかなあ。僕らはあんまり話し上手じゃないからんだけど、話上手な人はすんなりいけたと思うよ。三男のやつは特に取り入るのが上手なんだよ。早い時分にドミニカ人と結婚して、その家族をうまく使って。使って言う用語があるけど、うまく協力してもらって。精米所で嫁さんの弟なんかもみんな働いてもらって。あれほどうまく取り入るのはすごいわ。

ドミニカでの娯楽は？

僕の場合は「本」。日本から二つ程、クラスメイトが学校から貰ったのをボロボロになるまで読んだ。だって他にないもん。一つは「海洋大探検」、もう一つは「水戸黄門漫遊記」。まだ題名覚えてるわけ。でね、本が欲しいわけ。でも買うわけにはいかんから。親父が県庁に手紙出して、本のこと書いとったんか知らんけど、その時にごっそり送ってきたのが、「週刊ベースボール」言う本。野球ファンがいたんでしょう。溜めておいてもいらんから、送ってやれいうことじゃないんかなあ。それで来たわけ。その時は(野球を)何も全然知らんくて。でも他に読むものがないから、それを読んだの。野球の基礎知識言うんはそこで身についたと思う。

親父、県庁に(手紙)出したけど、ハワイにいる人が(手紙を)偶然見たみたいだね。その人から手紙、親父宛に来たのよ。だけど別に開けもしないから、僕がその時手紙に返事送ったわけ。「活字に飢えてる」いうのを書いて送ったと思うんだけど。そしたら、単行本ではない雑誌、月刊誌ね、それを二・三冊送ってくれて。それで礼状書いたの。で、その人とのやり取りが三〜四年続いたんかなあ。最終には亡くなったのよね。かなりの年だったから。それで終わり。

本を読みたいけど、どうすればいいかなって考えて、投書したのよ、出版社に。そしたら、運よく載って手紙がわんさか来たわけ。それを選んで五〜六人と文通したわけ。その時にいくらか日本語の文章とか覚えた。本が好きで、何とか言うかね、「送りましょう、どんなのが？」って聞いてくるわけ。その当時はね、山手樹一郎の時代物が好きだったの。こういう作家の好きで読んで。送ってくれたの。



あの頃は、日本の景気が良かったのよ。それでもやっぱり波があるから、二〜三年すると収まってくる。それでまた違う本に投書して。その時は「家の光」、知ってる？ 雑誌の名前。農業雑誌みたいなんだけど。それで、ドミニカに住んでた人から手紙が来て、「いました、あなたの国。自分は元ネイバに居たものですが」言うて。石川県に住んでる。「欲しいものありませんか？ なんでも送ります」言うて。

その人がね、演歌のカセットテープ何本か送ってくれた。本も送ってきてもらった。その当時ね、親父亡くなつてたから、三十歳になつてたかな…もう。

その後、土地は手に入れることができた？

JICAの借金で、親父が生きてる頃に十タレア足らずの土地を買ったの。十タレア足らずだと稲作つても生活できんから、野菜作りやつて。冬場は植えるものがあるけど、夏場はほとんど植えるものがないから。（収入が）ゼロというほどではないけど、型落ちよね。その間の食べる方は同じだろ？ だからマイナス分が多いよね。（農業は）難しい。

募集要項が本当にその通りなら、文句は言えないんだけど。ああいう募集要項に嘘八百並べて、騙されて、こっちに送り込まれてね。「お国のやることに間違いはない」という当時の親の考えではあったんだろう、それは。すっかり騙されたわけよ。それさえなければ来ないんだけどねえ、本当のことを言つて。自分らの責任だから。でも、募集要項の嘘八百には…、やっぱり国としてはやるもんじゃないと思うよ。

借金返済が一番しんどい？

しんどい、あれは…。自分が借りてないのになあ。

どん底からどう這い上がったのですか？

いろんなやり方があるんだろうけど、僕の場合は流れに身を任せたよね。木の葉を川に流したように…。カーッと激流に押し流されたときもあれば、ゆっくりしたときもあったけどね。生きてるから、まあいいよ。僕の親父は今の自分の歳ではもう死んでたからね。生きてるのが一番。一回しかない人生だから。



翻弄された人生でも、いつも明るく笑っていますね。

それはやっぱり性格でしょ。ドミニカの温かい気候もあるかも知らんよ。やっぱり、寒いっていうのはあまり好きではないから。まあ、隠れて泣いたこともあったけどね。(どん底だとも思うことも) 何度もありましたね。誰でもあるんだろうけど。

人生が落ち着き始めたのはいつ頃？

一息ついたのは四十過ぎてからかな。四十過ぎてから、ICBの借金もチャラになって、それからは食べるのにも苦勞しなくなった。それまでは苦勞しましたね。土地がないから少しの土地で野菜を育てると、冬は良いんだけど、夏場は植えるものほとんどないんだ。その夏場に収穫がガクンと減って、中々難しかったね。冬場はかなりなるんだけどねえ。夏場はなるとしても、植えるものが少なくなると、収穫も少なくなる。土地があつたら、稲植えたら夏場は稲ができる。やっぱり、稲となると、ある程度まとまった土地がないとできないんだよね。

日本にいたら…と考えたことは？

あるねえ。どっちにしる平凡な人生だろう。

日本よりドミニカでよかつたと思うことは？

ぬるま湯の方がいいんだよね。ドミニカの生活は *Hasta mañana* (また明日) でしょ。あんまりセコセコしてないんだよね。時間もルーズだし。その点はまあいいかな。のんびりして。どっちがいいか分からんけども。

選べるとしたら日本とドミニカのどっちの生活を選ぶ？

それちよつと難しい質問だね。ずーつとドミニカにいて、今から日本の生活に慣れるかって言ったらちよつと難しいだろうし。帰りたいっていう気持ちはない。あと何年生きられるかも分からんしね。まだ若かつたら別だろうけど。(日本に) 帰りたいって気持ちはないね。



妹の早苗様と



移住とは？

「移住」と一口に言っても、いろいろあるだろうけど、（移住する先の国のことを）良く調べんとね。僕らの時はほとんど、自分らで調べんと、国任せにやってたと思う。国にいろんな良いことを言われて、（ドミニカに）やってきたんだけど。本当のことを言ってくれてたら別の歩き方もあったんじゃないかと思うけどね。僕らは地球の反対側にあるってことぐらいしか理解してないもん。

今が一番平和？

そうね。今がまあまあ、一番いいわな。おかげで、お金（ドミニカ政府による土地の金銭補償）が入ったから。本当であれば嶽釜会長のおかげです。お金って心を平和にするよね。やっぱり経済的に安定するとね。昔はそのお金で苦労したからこそ、お金に対する「有難み」って言うのが分かりますよ。もし日本にずっと住んでたら、お金の有難みって知らずにいたかもしれないですね。



～嶽釜徹様～



二〇二四年四月二十六日・三十日、取材

嶽釜徹

- 一九三八年三月十一日 嶽釜家の長男として朝鮮に生まれる
- 一九四五年 鹿児島県川辺郡知覧町に引揚げ
- 一九五六年七月二十九日 上之家の同伴者として両親、兄弟五人とダハボン移住第一次として入植 (十八歳)
- 一九六一年九月十二日 宇田律子と結婚 (二十三歳)
- 一九六二年三月二十一日 長男 裕生まれる (二十四歳)
- 一九六四年三月十八日 次男 彰生まれる (二十六歳)
- 一九六七年 ダハボンからサバナグランデ デ パレンケに転住 (二十九歳)
- 一九七〇年五月五日 三男 稔生まれる (三十二歳)
- 一九七九年 アグリポプロジェクトに参画 (四十一歳)
- 一九八三年二月 パレンケからサントドミンゴに転住、自動車修理業を始める (四十四歳)
- 一九九六年七月 ドミニカ日系人協会会長に就任 (現在に至る) (五十八歳)
- 二〇〇八年四月十一日 第四十二回吉川英治文化賞受賞 (七十歳)

【功績】

一九九六年のドミニカ日系人協会会長就任後、ドミニカ移住における「基本問題」について日本政府と交渉を重ねてきたが、解決には至らず、二〇〇〇年二月、原告団一七七名の事務局長として国家賠償訴訟を東京地裁に提訴した。その後、六五回の来日を経て、二〇〇六年六月東京地裁の判決で当時の移民政策の違法性を認められたものの、賠償請求は棄却された。その判決を受け、同年七月、当時内閣総理大臣である小泉純一郎首相が「外務省として多々反省すべきことがあった」と発表し、移民政策の非を認めるとともに特別一時金の給付を決定、原告団と和解に至った。

その間、二〇〇三年には困窮する移民への財政支援を日本政府に申請し、翌年に支払いが開始された。また、裁判終結後には保護謝金制度、健康保険制度、奨学金制度が開始され、二〇一二年七月に日本人農業移住記念碑の建立、二〇〇八年〜二〇一二年にはダハボン、ハラバコア、ラ・ベガの公民館建設などの資金調達に尽力された。同年には一九七九年から参画していたアグ

リポプロジェクト（ダハボン、コンスタンサ、ハラバコア）における灌漑システムの改善推進者として、ナグア市の功労賓にも任命された。

その後も、ドミニカ日系人協会として日本語学校、学生寮、安らぎセンター（高齢者施設）の土地と建物の所有者となり、施設改修のため日本政府と交渉の上、資金を調達し改修を実施した。また、二〇二一年四月にはドミニカ共和国政府と土地を受け取れなかった家族への経済補償について交渉を開始し、同年七月、ドミニカ共和国政府は要求を満たすことを表明、二〇二二年二月から支払いが行われた。二〇二三年には寄付金を募り慰霊碑の再建築を実現した。また、日本人ボランティアの受け入れも積極的に行い、これまでに様々な職種の JICA 海外協力隊員を受入れ、ドミニカ日系社会と日本の架け橋となつてこられた。

嶽釜徹様は、ドミニカ日系人協会の会長として、約三〇年移住者の先頭に立ち、ドミニカ日系社会を守り続けています。嶽釜会長の成し遂げてきた功績は数知れず、移住者だけでなく、ドミニカ人からも感謝の声が聞こえてきます。「戦後移住史上、最悪のケース」と言われた状況下で、まだ高校生だった少年が、日本人会会長を長年勤められた父純夫氏の背中を見て、沢山のことを学び、経験を重ね成長していく姿は、映画以上の壮大な物語でした。

「真の侍」「武士」「薩摩隼人」など、沢山の異名をもたれる嶽釜会長は、その名の通り、大和魂の精神を貫き、幾多の苦難を乗り越えながら、ドミニカ共和国と日本の絆の一翼を担っています。日本を愛し、日本人であることを誇りに、日本から遠く離れたこのドミニカ共和国で「日本の心」を残すため、後継者への教育に力を注がれています。ドミニカ移住問題では、真実を徹底的に追求し、日本政府に誤りを認めさせた裁判からは、祖国を愛するからこそ、日本政府をも教育しているように感じました。

私がドミニカ共和国でボランティア活動を始める前、初めて嶽釜会長にお目にかかった際、「あなたのやりたいと思うことは何でも挑戦しなさい。何かあれば私が全て責任を持ちます」と言ってくれました。この移住史制作も、全面的に協力してくださり、会長のおかげで完成することが出来ました。会長は、私に言葉で注意したことが一度もありません。私の行いが正しいかどうか、言葉以外で気付かせ、考えさせてくださいます。二年間、嶽釜会長のもとで沢山のことを学ばせていただき、道徳心の大切さと共に「どう生きるか」という人生の課題を与えてくださいました。嶽釜会長の信念を多くの方に知っていただきたい、そんな気持ちで取材させていただきました。



朝鮮の日本語学校について

朝鮮の思い出というところ、犬に噛まれたというのが始まりだろうな。五歳だったか、六歳だったか。犬がワーツと来たのは覚えてる。そこでワーツと泣いたんだろうと思うよね。自分で泣いたかどうかは覚えてない。覚えているのは、小学校の入学式からだな。それから僕の記憶に大体残ってるんだよ。朝鮮の日本語学校というのは、完全に先生方が日本の文部省から来て、日本語学校で日本と同じ授業を受けたわけだから。学校の授業は日本の標準語。だから、僕は祖国に帰って郷里の言葉が分からんというのはそういうこと。当時の朝鮮は日本の統治で、日本と同じことをやってるから、授業もビシツとしてるんだ。

朝鮮での生活について

うちの家がね、ちよつと高い丘の上にあつたんですよ。下の方の町の中よりは、高い丘にできてるし、そこで親父が指揮を執つてたわけだからね。道は真つ直ぐ降りれんわけだから、グルグル回つた道で、下に降りて行きよつたんです。学校に行くときに、僕に護衛さんがついてたんだよ。それを毎朝歩いて下りて学校に行きよつたわけだよ。そして、下に降りてから、朝鮮人の人たちは朝鮮人の学校に行つてる。お互い学生だから、声をかけて、僕がその朝鮮人の方に走つて行こうとすれば、後ろの護衛が「ダメです！」と言つて、「真つ直ぐ、左、右」と、指示をしてくれよつたんだよ。それで今度は、空襲警報が入ると、護衛が僕を抱えて防空壕に入りよつたんだよ。

空襲警報は何回も聞いたよ。ただ、飛行機とか爆弾落したりとかは全然見たことがない。でも空襲警報のサイレンは時々鳴りよつたよ。だから、僕は本当の戦争は経験してないんだよ。しかも終戦後、引き揚げてるからね。ところが、日本に帰つてからの僕の同級生は、戦争を経験してるわけだ。だから、年齢からして、僕も戦争時代の人間ではあるけれど、戦争そのものを僕は経験してない。空襲警報のサイレンがなつたのはよく覚えてるけどね。

あの当時、戦争中だから軍事教育だった。僕ら、小学校全部で生徒が二〇〇人くらいおつたんかなあ。確か僕が覚えてるのは、その中から八人（人間魚雷に）選ばれて、放課後ね、午後の部活動つて言つたかな。人間魚雷の模型があつてね、ちゃんと人間が入れるように作つてある。その中でね、「お前たち一人が二五〇人の敵を倒すんだ！」と。あの当時ね、言いよつたのは、「イギリス軍を叩くんだ！」つてよく言われつた。僕はね、アメリカつていうのを聞くよりも、イギリスイギリスつて先生が言つてたような気がするよなあ。敵の軍艦に突つ込んで、二五〇人のイギリス軍の敵を殺すんだ、それが人間魚雷の使命なんだつて。なぜそんなことをするのかつて言うのは、我々友達同士で学校に聞いたわけだ。すると、「お国のためだ！」つて言うん



だよな。朝の朝礼が終わって、教室に入って、担任の先生が一番最初に生徒に聞くわけだな。「なんのために勉強するんだ？」と。そしたら、その返答は「お国のためです！」って、僕ら返答しよったよな。

戦後考えたのは、ああいう教育をするということは、結局、精神教育だったんだろうと思う。いざというときに恐ろしがつて逃げるとか、そういうことの無いように静かな状態で敵に突っ込んでいくと。そのためのね、精神教育だったんじゃないかと思うんだよな。後から聞いた話だけど、特攻隊だって、心を静めさせるために時間を持つわけだから、それと同じだと思うんだよな。いざ出陣となったときに恐ろしがつて「行きません」というのが出てくるはずだ。そういうのがないように、静かに、『お



国のために突っ込んでいく』と。恐ろしいよりも、戦争時代だし、敵を殺すのは当たり前というしか我々の頭がないよな。だけど、突っ込んでいくとなると恐ろしい。そうならないように教育されていったんだと思う。私は六歳のときに終戦になったけど、もし戦争があると十年二十年と続いていたら、特攻隊と同じように、自分は生きてなかったかもしれない。特攻隊の家族も、その当時は英雄と言われたわけだからね。自分の家族が人間魚雷として出兵出来るっていうのは、家族としての誇りになる。(本当は)悲しいよ。僕が思うには、そういう精神で学校で教えていくから、今でこそ思うことだけど、日本人じゃないとこういう神経は持たないと思うな。日本人だからこそ特攻ができたわけであつてな。

息子が人間魚雷の候補生になったことについての二親の見解は？

そこまでは知らんなあ。言ったことも聞いたこともないしね。僕にしたら普通に学校行ってるだけのことであつて。他の生徒が帰った放課後にちよこつと先生が教えてくれるということであつてね。放課後に残って何かやるってことは、一つの誇りだったよな。人がやれんことをやるわけだから。だから、そういう子どもを持つてる家族の人たちも、誇りだったと思う。時代っていうのが、そういう時代なんだよ。

お父様の朝鮮でのお仕事は？

朝鮮に駐屯している日本軍人に食料を与える、それが親父の一つの仕事だった。終戦後、親父は戦犯として敵に連れていかれたわけだからね。親父が連れて行かれるときには、母親が「お父さんとはお別れですよ」と言つて、親父の前に皆並んで、僕は和子(妹)をおんぶしたまんま、それでお別れしたんだから。僕らは若かったからね、本当の状況がどんなもんだったか、僕らにはよく分からなかったと思



うな。ただ、軍隊の関係で連れていかれよることくらいは分かってたけどね。戦犯だとか、そんなことじゃなくてね。その時に、僕らの方からあんまり何も言葉はかけなかったよね、親父に。親父は一番最初に、子どもに対して、「お母さんのいうことをよく聞きなさい」「お母さんを見守りなさい」って言ったな。母親に対しては「子どもたちを頼む」それだけ。

ご両親の教育は？

スパルタ教育だろうな。二人とも厳しかったな。とにかく子どもに対する教育はすごくきつかったな。（親父は）日本に帰ってからは知覧農業高等学校の教頭先生だった。母親は帰ってきてから、呉服屋さんを出したんだな。着物だけじゃなくて全てのもの、学生服なんかも売ってたよ

な。あとは一般的な服ね。店屋のお手伝いさんがおつたし、裏側には洗濯とか掃除をするお手伝いさん、もう一人はお昼ご飯作ったり、夕食作ったりするお手伝いさん、三人くらいおつたんじゃないかな。だって時々お手伝いさんからも怒られよつたから。「早くお風呂に入りなさい！いつまでも遊んでないで！」ってね。お手伝いさんも厳しく、そこは母親の指示だろう思うよ。絶対甘やかさないでくれて言ってるんじゃないかと思う。だけど、お手伝いさんから母親に告げ口されたことは一度もなかった。あの当時、二十から二十三歳の人だってた。

親父はパーっと叩いたり、そういうのではなくて、とにかく正座させて、障子を開けて、外の人から見えるようにしといて、そして「最近学校は面白いか、数学はどうだ、体操はどうだ、友達とはうまくやってるのか？」とかね、そんなことから始める。なんでこんなこと聞くんか分からんけど、一つの折檻の仕方だろうな。一時間以上だろうな。足が痺れて（痛みが）分からんくらい正座させてやりよつたからね。

母の方が父よりもちよつと強い、教育についてはね。（特に教育されていたのは）一般的なことで、時間を守るとか、言うこととは聞くとか、そういうことは徹底してた。小中高の始まりまでずつと。母親は体罰みたいにし、僕が悪いこととして、勉強もせんで布団かぶって、ラジオの相撲を聞きよつたりするもんだから、「ここに座んなさい」って言って、お茶の入れ方を僕にさせてみたり、花の生け方を覚えさせられたり。「なんで俺がこんなことをやらなくんのか」って、反発を常に持ってたよね。でも、母親に呼ばれたときは「全て負けた、僕が悪くなければ呼ばれるはずがない」と、常にそれがあつたからな。なんで呼ばれるんだらうかってよりも、「また何か俺はしたんだ」と、そうなつちやうんだ。何をしたのか言われるまで分からんけれど。ところが中々言わない両親だったよ。後の方になってから「どうして私がこんなこと言ってるか、自分で分かるでしょ？」っていう母親だったからね（笑）。

褒められることはまづなかったな。両親とも褒めることはしない人。褒めるっていう事はね、のぼせ上がるってことを考える



んだな。それよりも「あなたが今日したことは、〇〇さんが喜んでいましたよ」そういう風に言うだけだった。あなたが良かった、素晴らしいと褒めるんじゃないやなくて、あなたがしたことは良かったことですよと、私に伝えることによって、私を評価してるっていうのかな…。

嶽釜家（母方）のお祖母様の教育は？

おばあちゃんはね、母親や父親みたいなことは言わなかったな。学校から帰ったら勉強だって分かってるわけだから、勉強しなさいとか、そんなことは一切言わない。そして時間が来て僕が机から立ったら「済みましたか？」って僕に言いよったな。「勉強は済みましか」なんて、そういうことは言わない人だったな。「はい」と答えると「夕食を食べましよう」って。だからやっぱり母親を見てたらね、おばあちゃんがそういう規律正しい性質だからかと思うね。

現代の教育について

子どもを怒れん、叩きもできんていう時代になってる。今のようないや教育じゃだめだあって、僕はいつも言ってる。だから日本はダメになっていってるんじゃないかって。学校の先生が子どもを怒りもできんていう教育、どこにあるんだっていうのが、我々の考え。叩く必要はないけれど、厳しく子どもを教育しないと。今の話を聞くと、子どもを怒ると親が逆に学校に怒りに来ると。それは教育じゃないって、僕に言わせればね。子どもを怒れんていうのは変だと思うよ。

親のことが怖かったのは何歳まで？

中学の二年くらいまでかなあ。それからあんまり恐ろしくなかったなあ。もう自分で、口答えができるようになったからかも。もちろん、尊敬はしてた。親以上に恐ろしかったのは先生の方でね。僕の場合は、あまりにも親父の教育が無言のうちで非常に厳しい教育だったと受け取ってきた。叩きもしなきゃ、大きな声で怒るわけでもないけど、正座させて、ちよびちよびちよびちよび話して、苦しめてくるわけだな。そういう教育だったからね。それに対する反抗ちゅうのかな、両親の教育に無言の反抗をしたと思うな。

弱い人を守ること

弱い人を守るということは、今でもだけど、人以上だったね。友達が病気だと言ってたら、お小遣いを持ってワカマツというお菓子屋さんでお菓子を買って、その家にお見舞いに行きよったもんね。



身体にカサができた病気の友達がおったときはね、その友達は教室の後ろの方に常に座ってたんだな。僕は小さいから一番前に机があつて、そこに座らせられよつたけど、お昼お弁当を食べるときに、誰も彼と食べる人がいないんだよ。だから僕は椅子を持つて行つて、彼の隣に座つて一緒にご飯食べていたね。友達には「カサがうつる、病気がうつる」とか言われたけど、そんなことなかったしね。そして彼のお母さんが、「徹さんがこうこうしてくれました。うちのこどもが喜んでました。ありがとうございました」つて母親にお礼を言いに来たらしいんだ。僕が家に帰つたら、母親に「あんた何をしたの？」つて聞かれたから、「何もしてないよ。一緒に弁当食つただけだ」つて言つたら、母親は「彼のお母さんが来たよ」つて言うから、何しに来たんだか悪いことをしましたか？」つて聞きよつたもん。母親は「いや、悪いことじゃないけど、お前の友達は嬉しかったらしいよ」つて。

他にも、草履で学校に通つてた友達がいて、その友達の家に行つたら、失礼だけど貧乏だったんだ。その頃は皆靴を履く時代になつとつた。だから僕は母親を騙して、運動靴を彼にやつたんだ。僕は母親に「運動靴が小さくなって小指が痛いから、買い換えちゃいかんですか？」つて聞いたたら「いいですよ」つて。それも、その友達のお母さんがお礼に来たんだよ。僕のところじやない、母のところに行くもんだから、バレたんだな（笑）。「あんたが靴をあげたんだつて？」つて言うから、嘘は言えんし「はい…」つて言つたら、母が「小指を見せてごらん」つて言つてきて、「あゝしまった」と思つたよ。何にも痛くないもんだから、見せたつてしようがない。僕は小指を出さなかったら「いいよ」つて。僕は靴を買つてもらうのに、小指が痛いからつて言つたもんだから、一応小指を出せつて僕に言つてきたんだな。その時に、証拠がパツと出せない嘘はダメだと思つたね。そういうことをして悪知恵がついていくんだな（笑）。だけど母親もそれ以上突つ込まないしね。最初から分かつてたと思う。やつてゐることは良いことだったんだけど、嘘をつくことは良くないつてことを、彼女は身をもつて私に伝えたかつたんだと思う。そういう母親だった。

言葉でなく行動で

僕は高校生の時、串木野の祖父母の家に住んでいた。おばあちゃんは僕が何時に帰つてゐるのか分かつてるから、その時間に洗面器にお湯を入れて待つてゐるおばあちゃんだったから。帰つたらすぐに足をお湯で洗つてくれて、そこから家に入つて勉強を続ける。もう外に遊びに出られない。だから、母親もおばあちゃんの教育を引き継いでゐるなあと思つたよ。串木野に行つてから、つくづくそれは気付いたし、これはやつぱり親子だなあと思つたな。母親もおばあちゃんのやりかたをやらされたんだろうなあと思つてね。あれやれこれやれつて言うんではなく、両親やおばあちゃんから自然に仕込まれたんだよな。だから僕は、学校の成績は絶対一番をとつて、「一番取りましたよ」つて両親に言うのがお礼の代わりになると考えたんだよ。教育に関しては非常

にうるさいけれど、僕を育ててくれてる。絶対一〇〇点をとることが、私が両親に対する恩返しじゃないかと、その時考えたんだよな。だからほとんどの試験が、八〇点台なんて無かったよ。通知表を見せると、褒め事は僕には言わないけれど、赤飯が出てきよったよ。母親としては（成績を）納得してくれたんだって、僕は自分で解釈しよったよな。

医者を目指したきっかけは？

友達が事故で亡くなったのを目の前で見てるから、その時に「俺は今からお前を助ける！」って心境になったんだな。死んでるのに。それから、串木野に行つて進路を聞かれたときに、医者になりたいと言つたんだな。そこで三つの大学の模擬試験を受けさせられた。そして、先生に言われたのが「好きなどころで良い。その代わり両親と相談しなさい」と言われて、それで帰つて、両親に言つたら「お前の好きなどころにしなさい」って親父が言つたから、遠いところは嫌だから、一番近い九大（九州大学）の医学部がいいと言つたんだ。だけど担当の医者に「東大にいけ、東大がいい！」といわれて、東大東大というもんだから僕は腹が立って「東大だけがだが大学じゃない！」と言つて、九大に行くこと決めたんだ。その二日後くらいだよ。親父から電話があつて「おい、ドミニカ行くぞ！」と。「それは何ですか？」って聞いたら、移住者としてドミニカ共和国っていうところに行くつて。そのとき親父は何も言わんわけだ。だけどこつち（ドミニカのパレンケ）に来てから、日本の農務省からの推薦に基づいて移住者の先頭に立つてドミニカに行つてくれと頼まれて、親父はそれを気持ちよく引き受けたと母親から聞いたんだよな。母親が、やつぱりそういうところは親父と僕はそっくりだつて言つてたよな。だから（母親から）あんたはいつまでたつてもそうやつて金儲けしない男だつて言われたことがあるんだから（笑）。そこも似てる。親父にしてみれば、昔の人間だから、国のいうことを聞いて、お国のために務めるつていうことが誇りの一つだったんだよな。結局、先頭に立つて特攻生として行く、それが誇りだつていうのと同じだよな、考え方は。移住者の中では第二次世界大戦に出た人たちが結構何人も来てたわけだからね。家長で、軍隊経験があつてきてる人がいっぱいいるからね。そういう人たちは外国で生活していた人が多いから、やつぱり外国に出たいんだよな。台湾におつたとか、満州におつたとかね、そういう引揚げ者がまた（海外に）出てるつていうのが多いんだよ。しかもドミニカの場合は、大きな面積の土地をもらつて、日本で小さい面積でココソコつとやつてるよりは、もう少し希望の持てる農業つていうことが、皆の頭にあつた。それはもう確かだった。ドミニカの場合は三〇〇タレアつていう大面積を機械化農業するんだつて宮崎で移住研修を受けたときに聞いてきてるわけだから。それが全然違つたからね。



ダハボンに入植して

ダハボンに入った日の夜は雨だった。明るる日みんな外の土地を見て落胆したんだよ。若いもんは、

「なんだこれ、もう日本に帰ろう、帰ろう、帰りたい、帰りたい」って言ったけど、そう簡単に帰れるわけじゃない。耕作できるような土地じゃない。粘土みたいな乾燥地でね。そのとき雨が降ったかも知らんけど。僕らが着いた頃、ダハボンはまだ開墾しよったんだよ。僕らが着いた頃は開墾中、始めたばかりだったよ。というのは、ドミニカ政府は「今、日本人移住者を受け入れられる時期じゃない」と日本政府に言ってたんだから。でも日本政府は「いやいや、移住者はもうそこまで来ていますから」って言ったんだ。だからドミニカは慌てて作り上げた。ペンキを塗らたての家で、耕地はまだ開墾中で。みんなすぐに騙されたって思ったんだ。ほとんど毎晩家長が家に集まって、どうするか話し合ってた。ハイチに行けば日本に帰されると考えて出て行って引き戻される人もあった。ところが死ねば家族を日本に帰してもらえらるうからと、遺言を書いて自殺した人もあった。ところが、それも政府は何もなかった。だから僕は大きな声で「お前達のやったことは人殺しだ！」と言ってるんだ。着いた明るる日から絶望だった。ダハボンでは昼間は農業して。夜は自分で勉強して、ある程度覚えたら、今度はそれを若い連中に教えよったんだ。

トルヒージョ元帥について

一番最初にね、トルヒージョ元帥がダハボンに用事あつてくるということ、親父が元帥に会うために、僕がダハボンで色々手続きをしようたのよ。というのは、その当時のダハボンの軍隊の最高司令官(ルイス)が元帥の甥っ子だったんだ。それで、僕らが入植してから、その司令官と僕はうんと仲良くなったんだ。週末になったら必ず、ビビア(日本人移住地名)まで僕を連れに来て、一緒に飲み歩きた司令官だったんだよ。それである日、移住者が一番最初、共同で植えた落花生の収穫時期がきたから、ルイス(ルイス)に「トルヒージョが来るようにできんか?日本人の一番最初の収穫だ」と。じゃあ、(ルイスは)「おじさんと連絡とってみる」と言つて、おじさんと連絡とつてくれることになったんだ。それでトルヒージョ元帥が収穫の日に来たわけだ。そして、僕はダハボンに迎えに行つて、ルイスと、もちろん護衛も何人もついているから、一緒にダハボンからビビアまで連れて来たんだよ。その時に、僕は一番最初にトルヒージョに会ったんだ。その時はまだ(トルヒージョと)話なんてしないなあ。その時は見に来て、そして帰ったんだよ。

その次はね、確かね、亡くなった弟の賢三の洗礼の時にトルヒージョが来てくれたんだ、ダハボンまで。ダハボンの教会で洗礼して、ラファエル・ビエンベニード・ケンゾウ・ウエノつて名前をつけたんだ。ラファエルつていうのは自分の名前で、ビエンベニードつていうのは弟でその当時大統領。だつて、元帥だから、元帥は大統領になれないから弟を大統領にしてたんだ。ケンゾウつていうのは初代日本大使、大使じゃなくてね、その当時は公司だったんだ。それがね、吉田賢吉つていう。その「賢」



を取って、「賢三」とつけたんだ。「賢」という字に三月生まれをつけて、「賢三」ってつけた。上之は名字だから。それが弟の名前。それで二回目、トルヒージョと話をしたんだよ、簡単にね、その時は。

その後ね、トルヒージョ元帥がダハボン方に来るってことで、親父が元帥と話をしたいということ、ルイと連絡を取った。ダハボンの手前のコッペイというところから、マンサニージョに入ったところで、夜九時頃、軍隊が道路を止めて、その真ん中で話をするんだ。トルヒージョ元帥は独裁者だから、ものすごく気を付けなければならない。そこで、親父とトルヒージョ元帥が話をするとき、僕が通訳してるわけ。その時は、何を頼んだかという、日本人移住者の家に電氣をつけてくれたことを頼んだんだ。結局実現しなかったけどね。実現したのは僕が無償案件で日本政府にさせたんだけどね。それが三回目に会った時、トルヒージョとね。

四回目はね、トルヒージョ元帥がダハボンのパルティードと言うところで、ハイチとの戦争でドミニカが勝った地点にね、お祝いがあるんですよ。そこに来るっていうことで、それを僕はダハボンからわざわざそこまで見に行っただ。その時に、元帥に会って、僕は直談判したんだ。土地が少ないということ。僕ら兄弟、親子ね、今貰ったのは八十タレアくらいだけど、それじゃどうしようもないから、土地をなんとかしてくれ」っていうことを、僕は個人的に元帥に交渉したわけだ。そしたらね、それから一週間くらいして、元帥からサントドミンゴに出て来いっていう連絡が入って、元帥のところに行っただ。そしたら元帥が、農業銀行の総裁を呼んで、コッツイという米の産地に、約一〇〇〇タレアくらいの土地を僕に探してやれって指示を出したんだ。なぜその場所に土地があるかという、その土地を担保に銀行にお金を借りてる人がおって、支払いが出来ずに、その土地を銀行が取り上げていた土地があったんだ。それを僕に「三十年払いでいいから」って言って、その土地を与えてくれた。タダでくれたわけじゃない、一応売ってくれた。その契約を済まして、その土地で僕は米を生産して売りよったんだな。

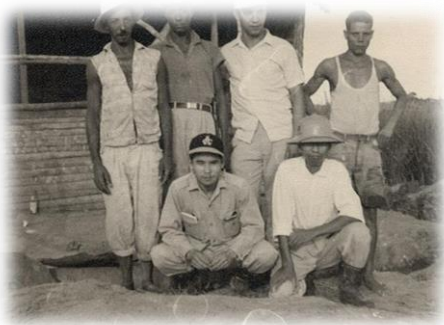
その米の商売をする時に知り合ったのが、今のアビナデル（現在の大統領）の叔父さんと僕は知り合った。と同時に、僕に売ってくれた土地の脇の方に、元の大統領アントニオグスマンが土地を持って、そこでアントニオグスマンともその時に知り合ったんだ。まだその時は大統領になってないけどね。その時に、アントニオグスマンは農業経営をしようとしたわけだから。それでアントニオグスマンの子どもが農業技師で、イポリトと一緒に勉強したやつなんだ。そのアントニオグスマンの畑で、アントニオグスマンの息子とイポリトと知り合ったんだ。アントニオグスマンの息子は交通事故でマイアミで亡くなったけど、イポリトと一緒に勉強して、アメリカのテキサスで一人とも農業を勉強した、兄弟ね。アントニオグスマンが大統領になった時に、イポリトが農務大臣になった。それでイポリトが農務大臣になった時に、僕が四年間、大臣補佐で手伝ってやったんだ。それは、パレンケに来てか



らなんだけ。そのうちに、ドミニカで農地改革が始まった。農民に小さい土地をやれっていう改革がね。その頃にできたのが IAD っていう農地改革局ができたんだ。買った土地が一〇〇〇タレアあったんだけど、結局、その土地は、政府が作った水路から水を取るわけだよな。そうすると、土地の四分の一を IAD にやらなきゃならないという法律ができたんだ。みんな、政府の水路から水を取ってる人たちが、持つてる土地は四分の一を IAD に渡して、IAD が貧乏人にその土地を少しづつ配るという法律ができて、結局貧乏人を助けるためにそうしようって。そうしたら、一〇〇〇タレアの四分の一となると二五〇タレア、政府に渡すと、今度は収益が出なくなることが分かったから、その土地をそのまま農業銀行に売って、僕はまたダハボンに戻ったんだ。

だけど、僕は知らなかったけど、二、三年前に「あそこにはお前のパパの名前がまだあるぞ」と言われて調べたら、IAD のラ・マタ・デ・コッツイという土地の名前が『スミオウエノ』って親父の名前になってることを初めて知ったんだ。そのスミオウエノの農園は、農地改革で貧しい農民何百人かに配分されてたってわけだよ。

ダハボンに戻って、ある日、ダハボンの知事が日本人移住者と話をしたいということでも会議を持ったわけだ。それで知事が「十月二十四日という日は、トルヒージョ元帥の誕生日だから、その日にダハボンからサントドミンゴに出てきて、祝賀パレードに日本人移住者として参加しろ」と言うわけなんだよな。その時、一人の移住者が「徹さん、その行進に行くのは義務なのか聞いてくれ」って言ったんだ。それで僕が質問したら、知事が「義務じゃないけど、行かねばならぬ」ってスペイン語で言うわけだ。だから僕は「義務じゃないか！」って言ったら、知事が怒って「トニー（徹）、お前はスペイン語が分からん！出て行け！」と、僕を蹴ったわけだ。だから僕は「いいよ！」と言って出て行ったから、通訳してる僕がそこから出たら会議にならんかったわけよ。それで、彼も怒って帰ってしまったわけだ。そしたら明るる日の夜、ダハボンの管理人が僕のところに来て、僕の家でビールを飲みながら「トニー、ひよつとしたらお前を連れに来るかも分らんぞ。気をつけろ」と言ったんだ。独裁時代だからそんなもんなんだよ。そしたら案の定、軍隊がジープで僕を連れにきたんだ。その時、僕は、パジャマを着とったから「ちよつと待ってくれ、着替えるから」って言って着替えた時に、半長靴にナイフを入れたんだ。気をつけろって言われてたからね。殺されるなら殺して死ななきゃ損だと思ってたからね。（ナイフは）スイスの良いやつだった。最初は「知事の家に行く」と言われたのに、山の上の軍の施設に連れていかれたんだ。そこにアルカンタラっていうトルヒージョ元帥の右腕の將軍がおってね、それがまた恐ろしい將軍でね。政治犯をナグアの精米所に連れて行って働かせて、ダメになったら生き埋めにしたっていう男だから。そこに入ったらルイがそこにいて、僕を見てニコニコ笑ってるんだ。その時ルイは大尉で、「日本に帰りたいのか？」と聞いてきたんだ。「僕は来たばかりで、帰りたいと言ったことなんてない」ってはっきり言ったんだ。そしたら助手が僕



にパツと紙を出して、これにサインせえと言ったんだ。その時、スペイン語を完全に読めるレベルではなかったんだけど、「SIM」ということが見えたんだよ。「Servicio de Inteligencia Militar」秘密局です。この局員に僕をならせようとしたんだ。そうして、僕にトルヒージョ元帥の悪口を言う日本人を報告させようとしたんだと思う。だから僕はね、「General、僕はスペイン語が分らん。これを貸してくれ。そしたら明日、日本大使館に行つて、なんて書いてあるか聞いて、自分で納得できたらサインしますから」って言ったんだよ。そしたら「それならいい」って、こう言ったよ。それでサインをせんで済んだんだよ。そして、Generalが運転手に「気を付けて送るように」って言ったんだ。『注意をしながら連れて行きなさい』ってことは、逆に言うと、『その辺で処理しろ』と言うのと同じだからね、だから僕は「車に酔うから、窓を開けたら風が入るから、ドアのわきに座らせてくれ」って言って。いざってときは飛び降りる覚悟が自分でできてたわけだから。それで、言われた通り、ビヒアまでちゃんと送ってくれた。

それから二、三ヶ月して、親父に大使館を通じて「トルヒージョ元帥が息子さんに会いたがってる」って連絡が来たんだ。それでセスナがダハボンからここ（サントドミンゴ）まで八ペソだったよ、それで大使館に行つたんだ。大使館に行つたけど、大使館は何も知らんわけだ。ただ向こうから言われただけのこと。それで向こうから連れに来たから行くうと思つたけど、親父はNoと言われて、僕だけ連れていかれた。今、国立劇場がある場所に元帥の家があつたんだ。部屋が四十七あつた。元帥が住んでからは、その家は農地局が使つたんだよ。その時、僕はまだ辞典を持って歩いている時代だからね。（トルヒージョ元帥のところ）行つて、挨拶から始まつて、知っている限りの丁寧なスペイン語で話したんだ。なんで呼ばれたかという、パツと写真を見せられたんだ。その写真を見たら、Rubiaの可愛い女の子だった。そして、「これと結婚しないか」と言われたんだ。後から聞いたら、「婚約しろ」と言つたみたいなんだ。サンクリストバルに元帥のマリア農園という大きなところがあるんだ。牛を何十頭と持つてる場所で、そこで僕に監視させると言つたららしいんだ。何故そんなことを言ってきたのか色々聞いてみたら、ダハボンで知事と言ひ合いつつたわけですよ、そしてSIMのサインを断つて、それも全部元帥にルイが報告してるんだよな。後からルイに聞くと、その女の子は、トルヒージョにはハポネサ・トルヒージョと言う妹がいるんだよね、その孫かひ孫だったらしいんだ。でも、何故私なのか、理由が知りたかつたんだ。そしたらどうもね、私が勇敢な人間であると、私の勇敢さを勝つたらしいんだ。でも、当時二十一歳で「私はまだ結婚を考へてません。でも、自分も考へる時期が来ると思うから、その時は是非あなたの所に来る。だから写真をくれ」と言つたんだ。そしたら、元帥は「お前が腹を決めたときまで置いておくから、その時に貰いに来い」と言つて、前もつてくれなかつた。将来結婚しますって言つたら（写真を）くれてたかもなあ（笑）。



パレンケ移住のきっかけは？

なぜパレンケに来たのかというのと、蔬菜園芸耕作の農民指導のため、政府の要請に基づいて、ダハボンから出てきた。というのも、ダハボンのコロニア（日本人移住地）に農務技官と一緒に住んで、親父が彼に農業を一生懸命教えてやったんだよ。運が良かったのは、その農業技師が段々偉くなって農務大臣になったわけだ。彼はダハボンにおるとき、ダハボンの公園で靴磨きをしようって、僕は彼にお金を払ってやりよったんだよ（笑）。そういう繋がりがあったんだ。

当時、IADの長官とも仲良かったから、その農務大臣が大統領と話をし、二人で親父をパレンケに連れに来たわけなんだよ。農務大臣自身が親父から農業を教わってるもんだから、親父が指導者だつてことを知ってるからね。その時、僕は通訳のため親父と呼ばれて、農務大臣の話は、「サントドミンゴの近くにパレンケと言うドミニカ農民の移住地がある。そこに行つて、その農民達に蔬菜園芸を教えてやって、その生産物をサントドミンゴの市場に売るようにしたい」というのがドミニカ政府の考え方だった。それでパレンケに出てきたんだ。親父は移住者の先頭に立ってドミニカに農業をしに来たのであって、ドミニカ人に農業を指導するために来たわけじゃない。移住者の中で、ドミニカ政府の要請に基づいて、ドミニカ人に農業を指導した人は誰もいないでしょう。

パレンケでの仕事について

パレンケでは、ドミニカ農民二〇〇世帯を一軒一軒指導のために回つたし、作付けや消毒をする時には、皆を集めて指導して、親父が指導することを僕が通訳したんだ。親父は農業学校で教えるように、まず苗床とか、種を蒔いていくとか、そこからずっと説明していくわけだよ。それを本の上で教えるんじゃないやなくて、実習をもつて、無い所は無い所で自分らで作つてね、「こういう風に種を蒔いて、こういう風に水をあげて…」とね。本の上じゃなくて、実習をもつて、順序的に教えていくわけ。例えば、

トマトなら、種を蒔いて、どこで芽を出して、そして苗をあつちこつち植えていく。それを実習にしていくから、結局、トマトの植え付けを教えるつて言つたつて、一日二日で教えられるわけじゃないんだよね。つきつきりで苗の状態に基づいて植え付けしていくから、収穫まで約一年くらいかかっちゃうわけだよな。短期作物と長期作物があるから、作物のできる時期に応じて適した時期に植えていくわけだ。今日種を蒔いたら、芽が生えるのに一週間くらいはジーンと水かけくらいするわけだから、芽が出始めの頃を見たいという農民がいれば、「種を蒔いて一週間くらいして見に来れば良いよ」とかね。ドミニカ人から質問が来ると、それに嫌がらずに返答することによって、お互い信用を取るつちゆうことかな。日ごろのお付き合いがやっぱり大切



だよな。

親父が教えたのは園芸作物。野菜類をその気候にに応じて、ちゃんと計画を立てて植えていくことを教えていったよな。やり方は全部親父に任されていたから、今は何月だから、気温はどのくらいだから、何の作物が一番作付けするのに適してるかって、自分で計画立てて実行に移すと。ただ、日本と違って、気候も違うし、気温も高い、日本みたいに良い土地じゃないから、教えるのがやっぱり難しいんだよな。日本で教えるのは簡単だけど、中々ここでは日本で教えるようにはうまくいかないね。

私は、農民が来たら通訳として教える。そうじゃないときは、我々は我々で政府から与えられた土地を作付けして、収穫したものを僕は市場に売りに行くわけだ。その収益は自分のものにしなさいと政府から言われてるから。上之家として計画して植えて、収穫して売って、それは自由なんだよな。だから、政府からの給与は無いわけだな。教えるのはタダになるけれど、それは我々移住者としてドミニカに来た、ドミニカ政府への感謝だから、そんなことは何も考えはしない、ありがたいことなんだ。

だけど、一九七九年のダビッド台風がきてから、日本政府の事前ミッションの手伝いしてるから、残りは弟たちがパレンケで仕事を続けたんだ。だから親父も死ぬまでパレンケに住んでたけど、病気になるって……。だけど、親父も会長しよったから、しよつちゅうパレンケからサントドミンゴに出てきて仕事しよったよ。親父の病気はね、肺炎から、風邪をこじらせて……。なんで肺が弱かったかっていうとね、親父はダハボンで肺結核になったことがあるんだ。それを治療して、良くなってたんだけど、パレンケに来てから風邪を引いて、それが崩れていったんだな。で、最期は肺機能が落ちてきてね……。母親は胃癌で六十四歳に亡くなって、ばあちゃんには日本におったのを、じいちゃんが七十いくつで亡くなったから、僕がこっちに呼び寄せただけで、ばあちゃんは八十四歳で亡くなってる。親父は七十九歳で亡くなってるから、自分が七十九歳になった時、僕は心配したんだよ。「俺も親父の年代になったらどうなるかな」と。でも、悪いやつはいつまでも残るんだな（笑）。

日本政府の事前ミッションを手伝うきっかけは？

ダビッド台風で被害を受けて家を直している最中に、日本政府の事前ミッションが来て、「手伝ってくれ」っていうことで、だいぶん私は抵抗したけどな。だけどまあ、最終的にはお手伝いした。それが縁で、今度はPCIというコンサル会社の手伝いをするようになったということだ。中南米の国々に仕事を取るため、サントドミンゴにPCIの事務所を作って、初代所長に僕が就いたわけだ。それで、中米をずーっと歩いたわけだよな。（PCIに務めた期間は）六年以上だったと思うな。



様々なプロジェクトへの参加について

ナグアの市役所からアグリポプロジェクトの推進者として表彰されたんだよな。私が行ったのは、コンスタンサ、ハラバコア、ダハボンの灌漑、水路の設備を、JICAの無償案件にうまく繋げていったんだよな。その間にも、当時のJICAの専門家(元JICA所長)と話をして、ピミエンタ(唐辛子)プロジェクトを作って、ドミニカのIAD(農地局)の農民を通じてピミエンタを耕作させて、少しでも農民の純益になるようにということをやったわけだ。そして、アグリポが終わるころになってから、JICAが作った病院の建設スーパバイザーをしたんだよな。

その頃はね、裏で日系人協会の歴代の会長の補佐をしようとしたよ。というのは、私はPCIという一般の会社にいるから、(移住問題に取組む)会長とか副会長として表向きに出れないんですよ。もちろん、出ると日本政府から頭叩かれるしね。だから、バックで手伝いをしてきて、もうだいたい良いなっていう時期がきてから表に出て行ったわけだ。案の定、日本政府に叩かれたわけだからね。PCIに一八〇〇人の従業員がおるわけだけど、それを殺して獄釜一人を生かすか、そういうプレッシャーをかけるわけ。だから僕は最初から、絶対プレッシャーがかかるから早く辞めると言ったけど、PCIの社長は、移住問題とPCIとは関係ないから、やれるところまでやってくれと。それで僕は続けたわけだ。けども、だいたい時期を見て、無理だなと思ったから、そこで僕は辞めたんだ。もちろん会社も納得してね。会社としては、今まで会社の売上げの三割を作ってきた実績があるからね、本当は僕が移住問題に頭を突っ込まずに会社の仕事をやっても良かったかったわけだ。けど、僕としては親父からの言いつけもあったから、移住者として移住問題の方を自分はやるべきだと決めて、提訴を始めた二〇〇〇年度からは完全にPCIを離れて、移住問題一本でやってきたわけだ。

家庭について

家庭や子育てのことは全然考えなかったなあ…。家内に「お願いします」だった。一切僕はタッチしなかったな。それだけ信用してお願いで任せたわけだから。いらんことかえって言うのと、彼女も困ってくるから。彼女の考えで、彼女のやりたいようにやればいいわけだから。それで何か困ったことがあったら必ず私に相談しよったから。その時には相談に乗って、二人で色々考える、と。家内、子どもの協力無しでは、僕はここまで出来なかった。だから、今頃言うのも恥ずかしいけど、家内や子どもに対して感謝してるんだよ。

あることを成し遂げるためにはね、どこかに犠牲が出るんだよな。僕の場合は、家内、子どもに犠牲がいつてるんだけどね。日本の明治維新改革であっても、何であつてもね。成功の裏には犠牲



が出る。西郷隆盛だって、成功するために喧嘩までして殺し合いやったわけだからね。

国を訴えることに迷ったことは？

ないね（即答）。迷うなんてまずないね、そんなことは。やりだしたら徹底的、それ一本だからな。大石内蔵助が、吉良上野介を最期に殺る目的を果たすために、いかなる犠牲があつたか。いらん言葉なんて全然表に出さないし、行動もできるだけ相手に分らんように行動するしね。「吉良上野介を殺るんだ！」って、それ一本でかかっていくからね。だから僕の場合は、「移住失敗の責任者は誰だ！」それを徹底して追求していくのが、僕の一本の筋だったからね。外務省が逃げる、JICAが逃げる、それじゃあ一体全体誰ですか？と。（日本政府に）おとなしく聞いている間は一つも答えが来なかったから、最終的に提訴せざるを得ないってこと。提訴するために、山本福槌さんが、ここで泣いてなあ……。お年寄りの移住者たちが、祖国を訴えたくないと泣いたんだよ。だけど僕は説明した。「僕もそうなんだ。僕だって、自分の祖国は訴えたくない。しかしながら外務省がこういう状態で我々の質問に対して、何一つ応えようとしな。それだったら、一体全体だれの責任なのか。そこをはっきりさせるために訴訟しないことには……。したくてやるんじゃないと、やむを得ない」と。もちろん反対する人もありましたよ。外務省が、団結した日系社会を邪魔するために二つに分けて作り上げたのが『友の会』。しかしながら、最後には一七七名が「会長に任せる！」と言ってサインしたんだ。

一七七名をまとめるのは大変だったのでは？

それを皆から言われたね。日本でも。もちろん、弁護士たちも驚いてたけどね。尾辻さん（参議院議員）からも「嶽釜さん、どういう作戦で一七七名一人として脱落しなかったのか」と。（僕は）「私の説明を信用してくれたからでしょ」って。それしかないんだよ。何も、義務的に強制したわけでもない。僕が説明して、「こうせざるを得ない。本当にやりたくない、泣きたくなるけど、これをしないと何にも回答は出てこない。何もわからぬ。そのまま何百年で続くん。それじゃあ、我々は何のためにドミニカに移住したのか。我々としては意味が無いと。棄民として捨てられたけれど、我々は国民として、それをはっきりさせるために、僕は親父からも言われてるから、イエスと出るか、ノーと出るか、それは構わん。しかしながら、はっきりした結果が出るまで僕はやるし、自分で思ってる真実をもって、我々は相手に対応してるから。その真実は必ず、いつかは分かってもらえると僕は思ってるんだ。僕が言ってることが、僕が死んだ後に出てくるかも分らんし、自分としては自分がやれる間にそこをはっきりさせたいんだ」という説明をじいさん方にしたんだよ。



そして、東京に行つて帰つてきたら、地方にも原告がおるわけだから、必ず地方にも回つて説明して、「今こういう状態になつてる、今後はこういう風に大体やつていこうと考へてる」と。だけど、私が説明したことは、必ず原告以外のものに漏れることを覚悟のうえで、僕は自分ながらの色んな作戦とつてきたわけだから。誰には言つて、誰には言えんとね。ドミニカに来た時から移住者同士のお付き合いだからね、誰さんが大体こういう性質だということは、今までの経験で把握してるわけだよな。移住者の間で情報が回るのは、昔から早いね。何か悪いことでもしたら、良いことよりも速く広まっちゃうわけだよな。それは止められない。それをよく見て、それじゃあ、この人と話をする時はこういうレベルで話をしなきゃいかん、というのを自分で勉強していく。その時その時の感覚、対応の仕方でも検討していった。

自分一人でやつたとは僕は思つてない。原告みんなが一生懸命考へて、そして私に運を任せただろう。任された私としては、成功させるためには、といつて考へるわけだよな。

責任に押しつぶされそうになつたことは？

途中でね、これだけやるけれども、政府が全然動かん、何も話に乗らんという時期が一時あつたからね。だったらもう降参かになつて思つた時期もあつたよ。しかしながら、そういう時には、やつぱりさつき話した、山本のおじさんとか、宇田のおじさん達が涙流して、「祖国を訴えたくない」と言つた、あの姿を思い出したらね、「最後までやらないかん、負けられん！」と元気が出てくるんだよな。それが私には一つの元気づけになつてる。知らんうちにね。

一番学びになつたことは？

学びになつたことは、何事においても、自分が交渉する政府なり、個人なり、そういう人たちが信用するつてことだな。敵に見るんじゃないで、信用する。信用性を持ちながら、自分の方に引き込んでいくつていうのかな。自分の味方に付けていくと。そういうような外交の仕方うちゅうのは、僕はだいたいぶん勉強させられたつてことだな。真実を訴えながら、相手を引き込んでいく、そういう人間性を勉強したつてことだなあ。

自分でも不思議に思うんだよな。日本の学生時代にろくろく勉強もせずに自分勝手にさぼつてばかりおつたから、知覧から串木野に島流しにあつて苦しめられたけど、それがあつたからこそ逆にドミニカで耐える事が出来たんじやないかと思ふよ（笑）。こつちに来てから、日本の学生時代の流れと全然違うから。何事も自分でやらなきゃならん。仕事も自分でやらなきゃならん。日本の時代は親に頼つてみたり、



したい放題のことしたわけだけれど、ここではそういうわけにはいかなかった。島流しにあった時は両親を憎んだけどね、今思えば憎みじゃなくて、今回の裁判の土台になってるんじゃないかな。串木野で絞られた経験が、徹底してやるってことに繋がったんじゃないかと、粘り気がうんと出たんだと自分では思ってる。それを感じたのは小泉（元首相）が謝罪してからだよ。裁判でも最後には言いたいことをピシッととはつきり言ったしね。これは今の若者たちへのメッセージにしてもいいと思うな。

今の若者に伝えたいこと

もう少し真剣に自分らの将来を考えるべきだと思う。ただ個人の将来を考えるのではなくて、日本国という大きな国をおんぶしてるのは今の若い人達なんだから。国の歩き方、方針を間違えないように。やはり、世界に今まで誇ってきた、日本人だと言われるその姿、それを忘れず、働くこと、勉強すること、全てを勤勉にやるべきではないのかなど。今のようないから外れたようなことをやってるんじゃないや、世界から笑われる国になると僕は思う。それじゃ我々の先人たちが可哀相じゃないですか。今まで誇ってきた日本人が無くなるじゃないですか。僕はいいチャンスでもあればそのことを叫びたいな。日本におればよう分からんかもしれないけれど、外国におれば、外から見ると日本っていうのは、ダラダラしてるって言うのかな、そういう風にしか見ええない。軍国主義に返れとは言わない、しかしながら日本人として責任を持った行動で、世界に誇ってきた人種で常にありたいと、それを望みたいと思うな。

日系社会の場合には、外国の地で住んでいる我々の場合は大体同じではあるけど、外国の影響によって日本人としての歩き方も、日本における日本人とは違うところが出てくる。しかしながら、根本的には日本人としての誇り忘れずに、外地でも努力をしていかなきゃいかんと思ってる。外地のいいところを学び、日本の良いところを学んで、「日本人らしい日本人」になってもらいたい。

日本人らしいとは？

誇り高く責任を持った人間であって、人を尊敬し、故人たちを尊敬できる人間になっていかなきゃいかんと思う。今の若い者は故人たちを一つも尊敬しているように見えない。それでは現代を生きる我々はね、日本人としての誇りを持った人間になりきらんと思うな。その地の習慣、文化、言葉、そういうことが違ってても、根本的なことは日本であって同じなんだ。本国の日本人が本当の日本人を示していかないことには、日本人としての意味がないじゃないですか。



日本が変わっていくことは寂しいですよね…。

それは仰るとおりですね。まだ私がいたのは戦後の時代だけど、それでもやはり日本人としての誇りは今より高かったと思う。終戦当時からすると、道徳心もぐっと下がってきてる。僕はそういう風に見てる。簡単なことなんだよな、道徳なんて。僕らが小学校の時に習った「人の物をとっちゃいけませんよ」というのも一つの道徳だよな。そういう簡単な道徳でも、今の日本社会では崩れてきてると思う。もう少し頭を冷やして、「道徳とは」「日本人としての誇りとは」ということを考える必要があるんじゃないかな。

そこを日系社会に求めるのは難しい？

私はそれは非常に難しいと思う。今のドミニカ日系社会のような場合には、日本から入植した一世そのものが、日本での道徳教育が半端しかできてないんだ。戦争中に受けた道徳、それが戦後になつてから崩れていった。ましてや、ここに来てから二世三世四世の時代に入ってるけれど、親が本当の道徳を理解できていないところでね、子どもや孫が道徳を分かるのか聞く方が無理だと思う。しかしながら、道徳そのものは、どんな国において、どういう生活をしててもね、大体世界同じようなものだと思う。だから、その国その国で、我々みたいに他国においても、日本人としての道徳を学びながら、そしてその国の道徳ももちろん学んで、最善を尽くすことが我々としては必要じゃないかと思う。日本と同じように言うことは無理だし、日本から見ても我々が日本と変わらない道徳をやっているとも考えられない。しかしながら、その国で学び、勉強して、そして自分で身に付けて実行するという努力をしないと、いつまでたっても日系社会が発展することはないと思う。

今考えると（ドミニカ日系社会に求めるのは）これ一つに限ってくるね。やっぱり道徳はちゃんと自分で覚えて守ることで、他のことも全て上手くいくと思う。道徳的なことが分らないと、何をやらせても上手くいかない。今の時代っちゅうのは道徳どころじゃない。ただ単なる利己主義なことしか表に出てないんだ。他の道徳、あるいは他の人類が生活していくうえで、幸福で楽しい生活ができるようになるためには、それなりの勉強をすべきであって、今の利己主義な世の中は、はっきり言って消していかなければいけないと思う。それがないと、中々お互いが平和でない。今の利己主義な世の中は、はっきり言って消していかなければいけないと思う。今の日本の政府を見てごらんさい。自民党の利己主義なことが問題のため日本国内が荒れてるじゃないですか。あれだって利己主義。もう少し、日本のリーダー、政治家、学者、そういう人たちが利己主義を抑えて、国民の平和な生活を考えるべきだと思うな。



他人を思いやること、それが会長の信念なのです。

そういうことだよ。やっぱりそういう信念がないとダメだよ。自分さえよければいいという考えが多いじゃないですか。本当にそれで世の中はいいのか、ってね、問うてみたらみんな分かると思うな。みんなが良くなってるこそ、自分もよくなるはずですよ。だから、自分だけで人間なんて生きてるわけじゃない。お互いが共有し、お互いが助け合ってるこそ、良い生活ができ、今以上の良い社会ができると思うな。それを言うのは簡単かもしれない。しかし物事を実行に移すと難しい。そこまでもって行ってこそね、本当の幸福を求めることだと思うな。

ご両親の教育が現在に繋がっているのです。

その通りで、親から教わったことは知らず知らずのうちに私の身に付いてきてるんだろうと思うね。なにも目立ったものではないけれど、やっぱり両親の教育っていうのが、相当私には浸透したんだろうなと思う。学生時代に、それは自分には分かってなかったけれど、しかしながら、今こうしてドミニカで六〇何年暮らして、そしてここで苦労しながら生活できるっていうのも、やっぱり目に見えない、浸透した教育のおかげだろうなと私は思う。私は両親に感謝してますよね。今頃感謝したって遅いけれど、毎朝僕は仏壇に線香をあげて、一つだけ、毎朝言うのは「今日も頑張ります。バックアップをよろしく願います」と、これだけなんだ。毎朝、家を出るときにね。若いころは宗教なんて考えもしなかったけど。ここに来た頃だって、宗教なんて考えなかったよ。しかし、小泉が謝罪した後、色々深く深く考えていくとね、やっぱり行きつくところは両親のきつい教育だったと、そこらあたりに落ち着くよね。それが、目には見えなかったけれど、今こう、出て、こんな状態になってるんかなあ、と。立派な威張ったようなことばかり言ってるけど、自分は実際にそういう風に生きてきたんだ。物語じゃなくて、経験してきたことを言ってるだけのことであって。両親からもらったもの、それそのものが僕は幸福だったんだと解釈できるな。結局、周りの目に見えぬ支援があったからこそ、私はそれを学んできて、今があるんでないかと思ってる。元をただと、自分の祖先、あるいは先人たちの努力、そういうものを考えることによって、自分もどうしていかなければならないか、ということも自然と分かってきてるんじゃないかと思ってる。

お父様が残された言葉について

「徹、頼んだぞ」それで全て分かった。日系社会を見てても、先人たちに対する扱いというのが、僕から見ると非常に残念な扱いをしているように見える。一つも尊敬してないように見える。それじ



やいかんと思う。先人たちはこの世にはいない。しかしながら、我々が目に見えぬ教育を彼らから受けてきたんだよな。そういうことがあるからこそ、今の我々は色んなことを出来るんじゃないですか。自分らだけでなんもかんも出来たわけじゃないんだよ。先人の教えがあつてこそ、我々は励んでいくことが出来るんだ。

ドミニカ日系社会の後世に残していくこと

今の若い者たちはね、そういうことを勉強しないんだ。いいチャンスはいくらでもあるけれど、中々そこまで自ら進んで勉強しない。日本における日本人よりも、我々みたいに外国にいる日本人の方が、いいチャンスがいっぱいあると思う。そういうチャンス逃さずに、もう少し冷静に物事を考えていくべきではないのかなあと僕は思う。もちろん、毎日の生活に追われて、そういう時間はないんだと言われる方もおるかもしれんけど、ほとんどの日系の人は、少なくとも色んな宗教があつて、仏壇というものを持つてると思う。それであれば、ちよつとでいいから仏壇の前に座つて、宗教だけのことじゃなく、我々日系社会、これからどうしたらいいかなと、そういうことを考える時間を持つことも必要じゃないかと思う。それぞれの流があつてね、仏教なり何なりあるけれど、それはそれで尊敬すべきであつて。しかしながら、自分ら、我々外地に住んでる在留邦人が、いかにして日本の誇りを表に出して、日本人として恥ずかしくない行動を取つていけるかつてことをね、ちよつとでもいいから少しづつ考えていくべきではないのかな。ただ単に金儲けをすればいいというんじゃない、そういうところを考えてこそ、日本人としての誇りになるんじゃないのかな。

これが今の僕の想い。これでもう、僕も話すチャンスはないだろ、恐らくな。また、これが歳とつて、まだ元気で質問されたときには、その時の状況に基づいた考え方つていうのが出てくると思う。しかしながら、一つの信念つていうのは僕は変わつていないと思う。

最後に：

奥様との関係性について

ある日、まだ四〇代だろうな、僕が車を運転して、律子が脇に乗つて、坂を下つていきよつたら、前の方に綺麗な女の子が歩きよつたんだよ。顔を見たいもんだからスーッと近く行つて、少しブレーキかけた。でも、ぶつかるようなものがあるわけじゃない。そしたら、律子が「ほら、ぶつかりますよ」と、それだけ。だから、僕は「なんで俺の車は変なところでブレーキがひとりでかかるんかなあ」と冗談言つたけど、律子は「はははーっ」と笑つて、それで終わり。それから四〇年くらい経つけど、その話





はしたこともないよ。それつきり。"あー、この人はこんなことじゃいちいち、あーじゃこーじや言わん人だ"と思っただね。彼女もそこで僕を疑ったわけでもないし、後がない人だな。律子が私に対する信頼感をもってるかっていうことが分かるよね。そういうところが僕は助かってると思う。そういうところが、僕はね、彼女を好きなんだよな。

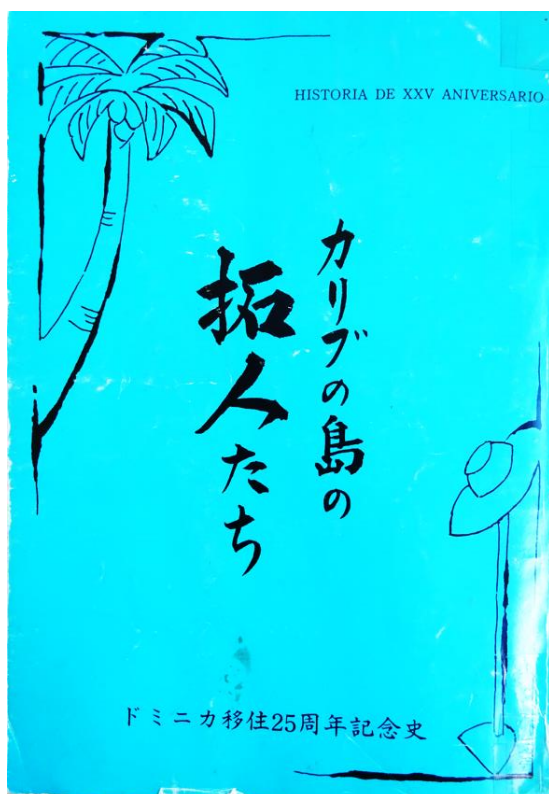
人間関係が一番難しい。相手を信用すること。相手を信用しないと必ず揉める。お互いが信用しきる。いらんことを考えない。僕は妻を信用してる。恐らく妻も今まで信用してくれてると思う。人間失敗は必ずある。人間百パーセントなんてないから。年齢も性別も違う、十人十色って言うでしょ。失敗をとって指摘するのではなく、自分の良心で判断しなければならぬ。



移住者アンケート

アンケートの実施

移住史を制作するにあたり、全ての移住者に取材することは難しいと考え、ドミニカ移住二十五周年記念史の中で JICA により実施されたアンケートと同じ内容で、日系一世の方を中心に五十五名の移住者に対しアンケート調査を行いました。四十三年前のアンケート結果と比較することで、全体像から見えてくる変化を知ることができました。



アンケートにみる移住者の実態

今般、編纂委員会は移住者の実態調査の目的で次のアンケートを実施し、二十五年の歴史を顧みると同時に、今後への在り方を探る一助とした。これはドミニカ共和国内各地に散在する全日本人に対して行ったものである。

1981年時点

移住者世帯数 165世帯 (641名)

移住者アンケート
Cuestionario para emigrantes dominicanos

① 移住動機 / Motivos de la migración	1981年	2024年
1. 生活の不満 / Insatisfacción con la vida	10%	3%
2. 新天地への夢と憧れ / Sueños y anhelo de un nuevo lugar	45%	15%
3. もっと大きな仕事をしたい / Deseo de un trabajo más grande	18%	10%
4. 家族のため / Por familiares	9%	47%
5. 以前の海外移住の経験から / Por haber emigrado antes	8%	2%
6. その他 / Otros	11%	22%
② 現在の生活 / Su vida actual	1981	2024
1. 満足 / Satisfecho	20%	35%
2. もう少しで満足 / Casi, satisfecho	25%	26%
3. 入植時の目的にはほど遠いが満足 / Aunque dista mucho del objetivo en el momento de la emigración, estoy satisfecho con él	29%	9%
4. 最初の計画と現状のずれが大きい / Hay una gran distancia entre el plan inicial y la situación actual	11%	12%
5. 不満だが見通しが付いた / No estoy satisfecho pero tengo mejores perspectivas	6%	9%
6. 疲労困憊 / Estoy exhausto	1%	5%
7. その他 / Otros	8%	5%
③ 今まで最も困難だったこと / Lo más difícil que he tenido experiencia	1981	2024
1. 言葉 / Idiomas	43%	30%
2. 異人種との文化の違い / Diferencias culturales con las distintas razas	17%	18%
3. 親子関係 / Relaciones entre padres e hijos	2%	10%
4. 年代の相違 / Diferencias de edad	5%	4%
5. 子供の教育と進学 / Educación de sus hijos y estudios superiores	10%	13%
6. 子供の結婚問題 / El matrimonio de sus hijos	10%	7%
7. 子供の独立問題 / Independencia de sus hijos	6%	10%
8. 宗教問題 / Religión	6%	3%
9. その他 / Otros	0%	6%

④	今までの経済面の障害 / Obstáculos económicos previos	1981	2024
1.	異人種間との考え方の相違 / Diferencias de pensamiento con las distintas razas	1%	17%
2.	現地での技術的な経験不足 / Falta de experiencia técnica	6%	11%
3.	雇用問題 / Problemas de empleo	6%	6%
4.	資金不足 / Falta de fondos	43%	26%
5.	人材不足 / Falta de recursos humanos	6%	7%
6.	土地保有問題 / Problemas de propiedad de la finca	29%	17%
7.	家族内の意見の相違 / Discordia familiar	3%	4%
8.	用材の入手困難 / Dificultades para obtener materiales	2%	5%
9.	資料データ不足 / Falta de datos y informaciones	2%	5%
10.	その他 / Otros	3%	2%
⑤	大使館、JICAとの関係 / Relaciones con la Embajada y JICA	1981	2024
1.	入植目的達成のために大いに役立った / Eran muy útiles para alcanzar nuestros objetivos	20%	13%
2.	良好であった / Eran buenas	46%	42%
3.	良好であったとは思わない / No eran buenas	29%	24%
4.	その他 / Otros	5%	20%
⑥	現地人との関係 / Relaciones con la población local	1981	2024
1.	劣等感を感じた / Me sentía inferior	3%	12%
2.	良好であった / Eran buenas	90%	74%
3.	その他 / Otros	7%	14%
⑦	日本とドミニカ共和国を比較して / Comparación entre Japón y la República Dominicana	1981	2024
1.	日本の方が良い / Japón es mejor	10%	20%
2.	ドミニカ共和国の方が良い / República Dominicana es mejor	16%	48%
3.	帰国して良かった / Fue bueno volver a Japón	25%	4%
4.	機会があれば帰国したい / Me gustaría volver a Japón si tuviera la oportunidad	35%	16%
5.	老年は日本で暮らしたい / Quiero vivir en Japón en mi vejez	9%	2%
6.	その他 / Otros	5%	10%

⑧ 自らの意思で移住した場合 / Si emigré por voluntad propia	1981	2024
1. 目的がかなったら日本に戻りたい / Si mi propósito se hace realidad, me gustaría regresar a Japón	10%	3%
2. 目的がかなったら日本以外の国で暮らしたい / Si se logra el propósito, me gustaría vivir en un país que no fuera Japón	6%	0%
3. ドミニカ共和国に骨を埋めたい / Quiero pasar toda mi vida en la República Dominicana	68%	80%
4. 明るい見通しがない為ドミニカ以外に転住したい / No tengo esperanzas y me gustaría emigrar a otro país	10%	3%
5. その他 / Otros	7%	13%
⑨ 生涯補償について / Cobertura de vida entera	1981	2024
1. ドミニカ共和国の生命保険に加入している / Tengo seguro de vida de R.D.	15%	12%
2. ドミニカ共和国の医療保険に加入している / Tengo seguro médico de R.D.	7%	40%
3. 何も加入していない / No tengo seguro	40%	8%
4. 墓所の用意が出来ている / Tengo arreglos para un cementerio	21%	27%
5. 子供の生活設計が出来ている / Tengo arreglos de vivienda para los hijos	16%	13%
⑩ 宗教について / Religión	1981	2024
1. 関心を持たない / No me interesa	27%	21%
2. 必要なことである / Es necesaria	15%	36%
3. 先祖の宗教を引き継いでいる / He heredado la religión de mis antepasados	28%	19%
4. ドミニカ共和国なのでカトリックへ改宗するのが自然である / Es natural convertirse al catolicismo en este país	11%	15%
5. 移住後改宗した / Me convertí después de emigrar	19%	9%
⑪ 結婚について / Matrimonio	1981	2024
1. 日本人同士の方が良い / Es mejor que los japoneses se casen entre sí	31%	21%
2. 国籍は関係ない / La nacionalidad es irrelevante	16%	28%
3. 将来、多国籍同士の結婚は増加する / El matrimonio entre multinacionales aumentará en el futuro	21%	24%
4. 移住者間の結婚は意義を感じる / El matrimonio entre emigrantes es significativo especialmente	13%	4%
5. 計画的な出産を望む / Los nacimientos planificados son deseables	13%	9%
6. 家族人員は自然に任せる / El tamaño de la familia debe dejarse a la naturaleza	3%	10%
7. その他 / Otros	2%	3%

⑫ 今後の望み / Futuros deseos	1981	2024
1. 現在の仕事を続ける / Continuar el trabajo actual	30%	22%
2. 現在の仕事を子孫まで続けさせる / Quiero continuar el trabajo actual con mis descendientes	4%	11%
3. 将来仕事を変える / Cambiar de trabajo en el futuro	9%	2%
4. 今より条件の良い仕事があれば変わりうる / Puede cambiar si hay un trabajo mejor con mejores condiciones	20%	4%
5. 子供が親の仕事を継ぐべき / Los hijos deberían hacerse cargo de los trabajos de sus padres	2%	6%
6. 子供は子供が選択する仕事をさせる / Deja que mis niños hagan el trabajo que quieran hacer	34%	48%
7. その他 / Otros	2%	7%
⑬ 教育について / Educación	1981	2024
1. 子供は大学まで行かせる / Dejar que mis hijos vayan a la universidad	14%	17%
2. 大学より職業的な学校を選ばせる / Dejarles elegir una escuela profesional	6%	14%
3. 子供の希望に任せる / Dejarlo en manos de mis hijos	38%	29%
4. 現在の仕事を続けさせる方針 / Dejarles conservar su trabajo actual	9%	8%
5. 日本へ留学させたい / Dejarles estudiar en Japón	9%	8%
6. 日本以外の外国に留学させたい / Dejarles estudiar en un país extranjero que no sea Japón	3%	6%
7. 文化面で日本との関係を深めたい / Quiere que profundizar en su relación cultural con Japón	18%	15%
8. 日本以外の国に関心を持つ / Quere que se interesen por un país distinto de Japón	2%	3%
9. その他 / Otros	1%	0%
⑭ 文化活動について / Actividades culturales	1981	2024
1. 現状のままで良い / Me gusta la situación actual tal y como está	22%	16%
2. ドミニカ人との親善を深めたい / Quiere profundizar en la buena voluntad con los dominicanos	14%	16%
3. 公民館での活動が必要 / Necesitan actividades en los centros comunitarios	16%	24%
4. 日本語学校の活動は必要 / Necesitan actividades en la escuela de japonés	44%	30%
5. 時間の経過に伴って考えたい / Me gustaría pensarlo con el tiempo	5%	14%

入植六十八周年記念式典

ドミニカ共和国日本人移住記念第六十八周年記念式典における嶽釜日系人協会会長挨拶
(二〇二四年七月二八日)

在ドミニカ共和国日本国特命全權大使 高木昌弘殿

独立行政法人国際協力機構 理事長 田中明彦殿

JICA 理事長特使 黒柳俊之殿

JICA 中南米部長 小原学殿

JICA ドミニカ共和国事務所所長 坂口幸太殿

御来賓、ご来訪の皆様。

謹んでご挨拶申し上げます。

この度、ドミニカ共和国日本人移住記念第68周年を迎えるにあたり、こうしてご挨拶の言葉を述べさせていただくことを大変光栄に思います。

カリブ海の真ん中に位置する、この美しく、平和で常夏の国に我々日本人が始めて到着してから、すでに60年以上が経ちました。

ドミニカ共和国の農業とマンサニージョの漁業の発展に貢献するために、計249世帯、全員で1,319人の日本人移住者がダハボン、コンスタンサ、ハラバコア、ネイバ、ドウベルへ、アルタグラシア、アグアス・ネグラスに移住しました。彼らがどのような強い精神と熱意をもって生きてきたか、まるで昨日のこのように思い出されます。

私たちは日本人移住の目的であり使命であった「ドミニカ共和国の農業発展に貢献」するために、当時の世帯主たちが抱き続けた偉大な闘志と意志を心に刻み、後世に伝えていくつもりです。

彼らの子孫である我々はその意志と精神を受け継ぎ、農業の分野だけでなく、ドミニカ共和国の発展と福祉に役立つような他の様々な分野でも活躍したいと思っています。

我々はこの長い68年間多大なる感謝の気持ちを持ち続けてまいりました。広大な感謝、日本人移住者を温かく受け入れてくれたドミニカ共和国と国民に深くその意を表したいと常に思っております。

又同様に、これまで、長年にわたって常にご支援とご指導をいただいている日本政府にも感謝の意を表したいと思います。

本日、お多忙中にも関わらず、遠路日本からわざわざ我々の入植式典に参加し喜びを分かち合う為に当共和国に来られました。独立行政法人国際協力機構理事長田中明彦殿に我々は特別なる感謝の意を述べたいと思います。

尚、理事長に同行されました理事長特使黒柳俊之殿、小原学JICA中南米部長、他お二人の方々にも重ねて感謝申し上げます。

我々がダハボンのラ・ビヒアに入植しました時にJICAよりの特別派遣員が寝起きを共にし、親が子供を夜通し看病するようにわれわれの安全を守るため努力されたことを思い出します。時心に残る感謝がいっぱいです。

私は、私たちの未来の世代が、先駆者の偉大な夢を継承し、これからもドミニカ共和国の社会経済の発展に貢献し続け、この美しいカリブ海の国に大切な足跡を残していくと確信しております。

ご清聴ありがとうございました。

編集後記

本誌制作にあたり、取材に応じてくださった移住者の皆様に対し、心より感謝申し上げます。同時に、異国の地で幾多の苦難を乗り越え、異文化を受け入れつつ異なる価値観を融合し、日本人としての誇りを失うことなく、ドミニカ共和国において信用と信頼を勝ち取り、現在に至る日系社会の礎を築かれた先人達に対し、深く敬意を表します。先人の体験を知ること、まさに彼らのアイデンティティに思いを馳せ敬意を表することと同義であり、先人の「生の声」をそのまま記録することは、今を生きる我々、ひいては後世にとって、自らのアイデンティティを確認し確立する一助となることを、編集作業を通じて改めて感じていきます。ドミニカ日系社会の経験は、他国における日系社会含め、より広く国際社会における重要な遺産的要素を内包するように考えます。

先人の活躍により、ドミニカ日系社会が、ドミニカ共和国と日本の架け橋として重要な役割を担っていることは、誰もが知るところであり、疑いの余地はありません。次代を担う後継者の方々もまた、先人の魂を引継ぎ、二国間の架け橋として活躍されることを期待するとともに、今後のドミニカ日系社会の繁栄を祈念します。

末筆ながら、本誌作成に際し、ご協力頂いた全ての方々に感謝を申し上げます。

二〇二四年七月二十九日

ドミニカ日本人移住六十八周年記念誌編集者 青木美重

ドミニカ共和国移住史 68年の時を超えて

編者	青木 美重 (JICA 海外協力隊)
共編者	坂本 あやめ (JICA 海外協力隊)
発行	2024年7月29日
住所	(法)ドミニカ日系人協会 ASOCIACION NACIONAL DE JAPONESES, INC (ASONAJA) Calle Francisco Prats Ramirez106 Santo Domingo República Dominicana Apartado Postal (P. O. BOX) 768-2
編集協力	高橋 英樹 (JICA 海外協力隊) 小林 大祐 (JICA 海外協力隊) 和泉 正明 (JICA ドミニカ共和国事務所 企画調査員) 田原 和佳 (九州大学共創学部)
特別協力	(法)ドミニカ日系人協会 会長 嶽釜 徹

【お問い合わせ先】

本書に関するご意見・ご感想等がございましたら、下記までご連絡ください。

メール：mieaoki7214@gmail.com

